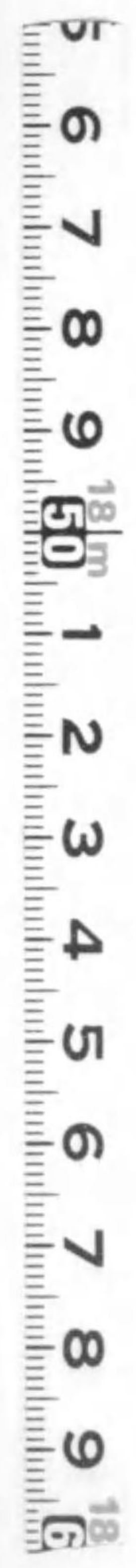


324  
593



始



324-593

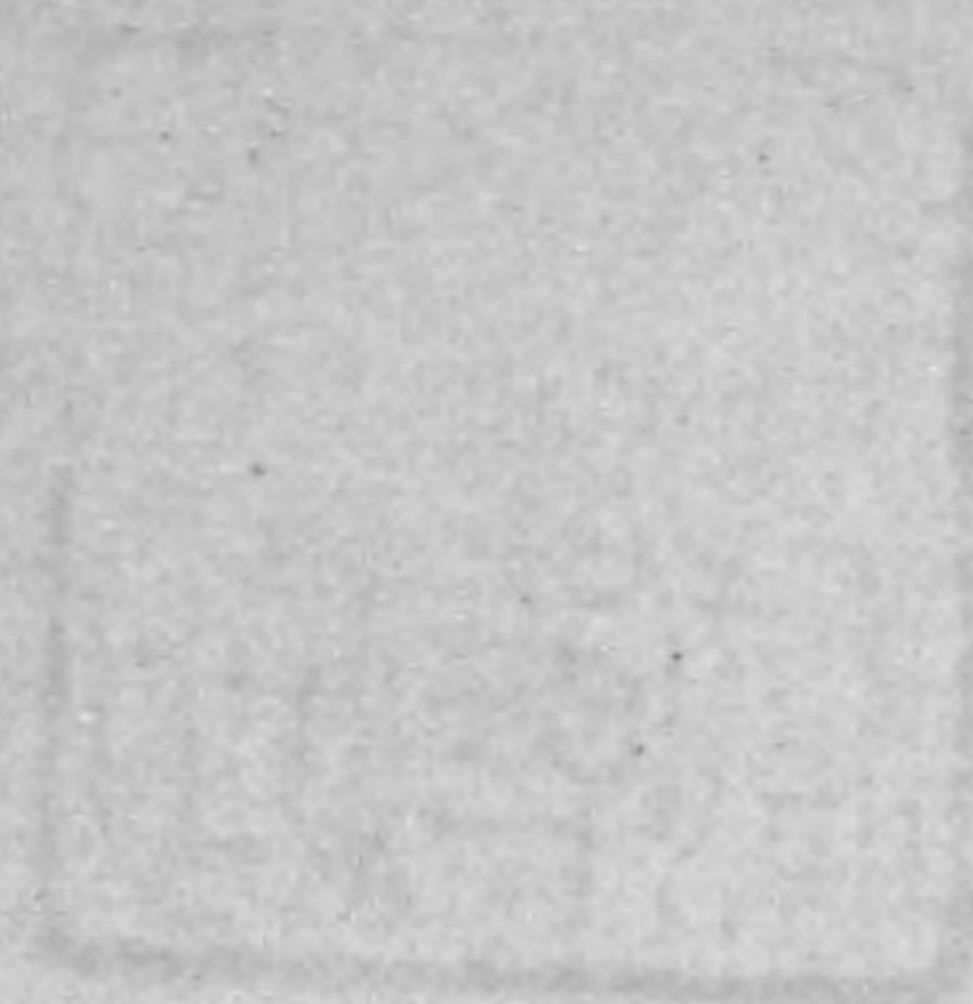
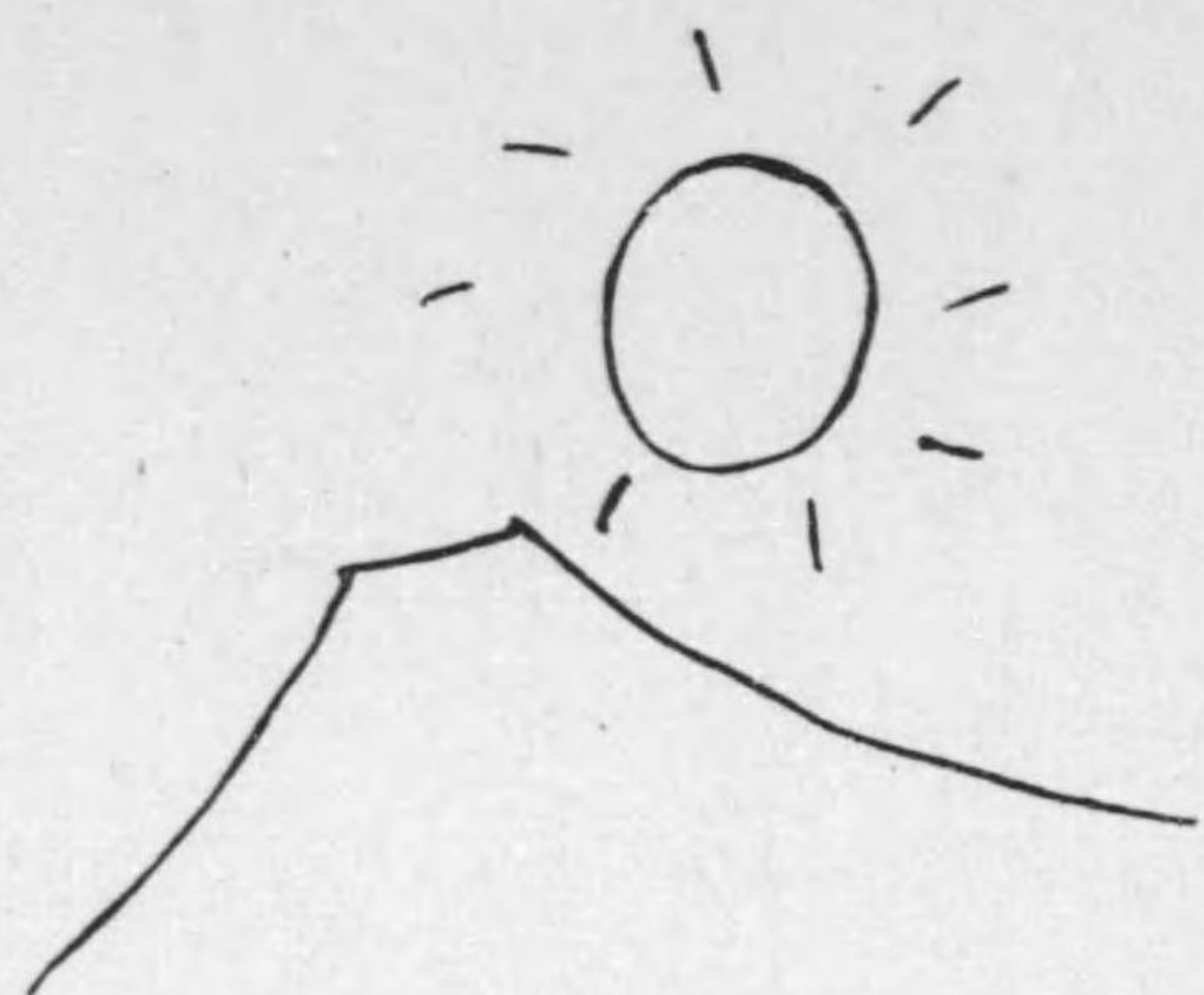


日蓮聖人の法華經色讀史

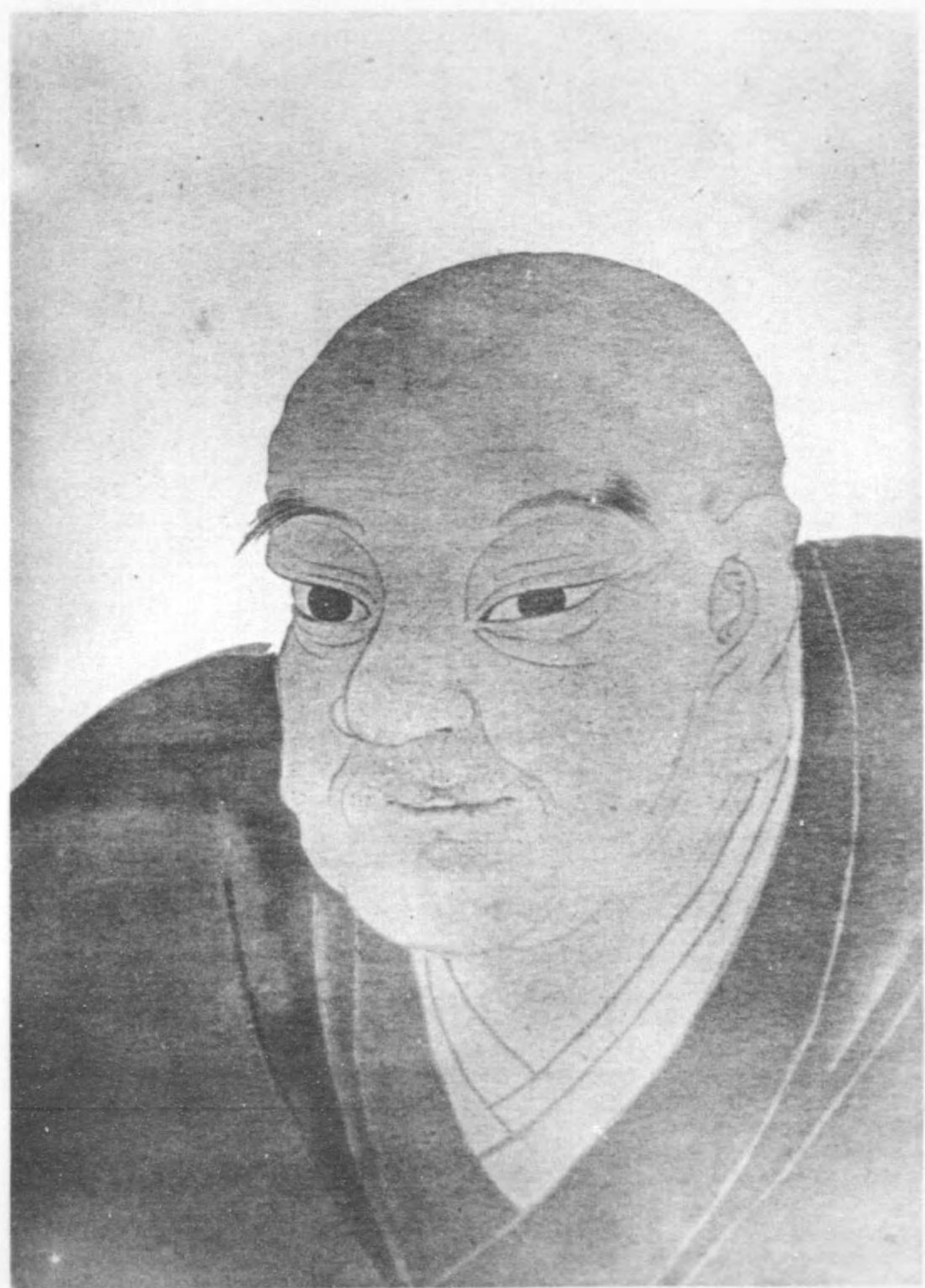
室伏黄川著

東京佐藤出版部刊

大正  
8. 5. 12  
内交



如日月光明  
能除諸幽冥  
斯人行世間  
能滅衆生闇



序

日蓮主義の勃興につれて、日蓮主義及び日蓮聖人（せうにん）に関する書籍が多く刊行される様になりました。これは非常に悦ばしい事と存じます。たゞすこし物足りなく感じますのは、その研究が概して皮相的である事でありませう。ある二三の専門家の発表を除きましては、これまでに出版された書籍の多くは、大むね一夜漬けの粗製濫造たる事を遺憾といたします。とりわけ聖人傳に關しては、これもまた二三専門家の研究以外は、全く従來の焼き直したるにすぎませぬ。古來の諸傳、即ち行學、日朝師の元祖化導記、圓明、日澄師の日蓮大聖人註、晝讀、智寂、日省師の本化別頭、高祖傳、建立、玄得、兩師の本化高祖年譜、小川泰堂氏の日蓮大士眞實傳等のふるい述作の上に、何等新しい貢献をなし得ないのであります。これは出版される多くの書が、たゞ日蓮主義勃興の機運に投じようとするものばかりで、研究し指導するといふまじめなものがないからであります。たゞ併し專

門家の間にはさすがに二三すぐれたものがある様であります。

私は日蓮聖人を唯一無二の聖人と崇拜するものであります。而して世界人類は、日蓮聖人によつて早晚必ず完全に救済される事を信じます。随つて此偉人の傳記は、さういふ點に就て明白に且つ多量に叙述されなければならぬと思ふのであります。然るにどの傳を讀んでも、此大偉人の面目が甚だ躍如として居りませぬ。先づ大ていの傳は、どういふ事があつた、どういふ事をした、どういふ本を書いた、だれそれがどういふ贈物をした、それに對してどういふ返事があつたといふ位の事であつて、これだけでは事件に就てのやゝ潤澤なる筋書きといふにすぎない。併しながら、たゞ筋書きであつても、聖人の聖人たる要點を逸しなければよいのであります。其種のものに限つて、不思議とまた聖人一代の要領をとらえて居りません、これでは世界救済の偉人の面目は到底るがき出せないのであります。

けだし日蓮聖人が世に出現された目的と、その目的を貫徹する爲めの努力と、

是れに對する時代の反應とを知悉して、この一大人格と世界との交渉を深刻にかんがへるものでなくては、到底眞實の日蓮聖人を知り且つ傳する事は出来ないのであります。

日蓮聖人を單に特色のある宗教家と考へたのみではあたりません。いはんや、愛國者とか、英雄僧とか、意志の權化とか、いふ程度の量見では、聖人の眞面目は金輪際分らうわけはないのであります。

聖人の事業、人格、規模を肯定するに就ては、先づ聖人が世界第一の聖人であるといふ事に、確固たる信仰を立て得なければなりません。世界第一の聖人而して永遠にわたつての唯一人の救済者、これが日蓮聖人の資格であります。この資格に適應した聖人の思想、事業、人格、閱歴に對して、その具體的標幟たる聖人である事を信じ得なければ、聖人の教義の敷衍に就ても、人格の説明に就ても、傳記の叙述に就ても、到底聖人らしい聖人を現はし得るわけはないのであります。

明治大正の年代に輩出した數十冊を以て數ふべき日蓮傳は不幸にしてこと

ごとく上に記した件々を逸して居ります。私は此點に就て常に不満を感じて居りました。而して自分に日蓮聖人を崇拜し得る資格があるなら、どうかして比較的完全に近い日蓮聖人傳をつくりたいと思つて居りました。たゞし私は専門家ではありません。日蓮聖人の教學をば、教學らしく解し得るものでない法華經を訓詁的に一字でも解釋しうるものでない、全くの素人であります。素人の分際で、かりにも完全に近い聖人傳をつくらうなどといふ事は随分大膽な話であります。けれども實を申すと、日蓮聖人はこれまで餘り専門家達に扱はれたばかりに、却てその真相が知られなかつたといふ様なうらみもないではありません。むしろ素人が熱情を以て聖人の一生を叙した方が、存外正しいものが出来るかも知れません。そう考へて私は聖人傳を研究しようといいたしました。およそ十二三年前からであります。しかし思ひ立ちはしましたものゝ、實際はすこしも、聖人を研究する餘暇を有しませんでした。もと／＼専門家ならぬ私は、當面の事に逐はれて、聖人傳研究はいつもおるす勝ちであつたのであり

ます。

然るに時勢は日一日と日蓮主義化してまひりました。それにつれてか日蓮主義に關する述作も年と共に益々増加してまゐりました。が、それにもかゝはらず世間が日蓮主義に對する考へには格別の進歩も見えませぬ。これは前申した一夜漬けの濫出によるのだらうと存じます。そこで私も大に考へたのであります。明治の四十五年はとづくにすぎず、大正も今年で七年である。明治の維新から數へれば通じて五十一年。この短からぬ時間を経過しつゝ、日蓮聖人傳は依然として、『年譜』『眞實傳』等の糟粕をくらつて居るとあつてはまことに残念である。よろしく此文運隆興の新機運に應じた研究をもつて聖人傳を述作して、適當に此時代の人々を啓發しなければならぬ。且つ、文運隆興とはいへ、現代日本は思想的精神的に、何等の歸着安住をもつて居ない。標榜せられたる主義、或は教法といふものも、皆他の主義、他の教法との妥協によつて、辛うじてその命脈をたもとうとする様なはかない現状である。かゝる時世を開導するに



は、まさしく世界人類、國家にわたつて、これを根本的に指導し得る様な大主張をもつてしなければならぬ、さういふ大主張をもつた一大人格を示して、はやく世界改造の幕をあけなければならぬ時である。時世はすでにかうなのだから、グズ／＼してゐる時ではない。かう考へまして、私は聖人傳の述作を思ひ立ちました。甚だ唐突な思ひ立ちではありましたが、完全を望んでゐては、この希望がいつ果されるかも分らないので、思ひ立つたが吉日と九月の末に筆をとりはじめ、参考書も何もない中で、十一月半に脱稿しました。他人の一夜漬けを笑ひながら、私のも随分一夜漬けであります。こんな唐突な思ひ立ちが果して上に申した様な點に就て効果をあげ得るか得ないか、問題は自ら別であります。たゞしかしかういふ考へでつくられた日蓮聖人傳は、すくなくとも日蓮聖人に對して信仰も何もない人がたゞ書肆の依頼で急に筆をとつて製造した傳記とは多少異つて、これによつて日蓮聖人に對する世間一般の態度に、必らず何分かの變革を來し得ることを信じて疑はないのであります。

ともかくもかういふ考へで私は此書を撰しましたこれによつて、日蓮聖人に對する世間の知見が少々でも開拓されれば本望であります。必ずしも多くを望みませぬ。素より専門家ならぬ私に、さう深遠な教義のわからうわけはない。たゞ日蓮聖人の名の下にあつまり、或はその名に渴仰の誠をさしげる人々の解し様が、餘りに日蓮聖人の意志と違ひすぎてゐるのが齒がゆいのであります。純真な心で聖人の主張にきけば、却てむづかしい教義を離れて直ちに聖人の懐にはいりうる事をわすれて、術語や科語の詮議に日を暮し夜を送つて、爲めに聖人の面目性行閱歴を直爾に語り得ないのが残念に思はれるのであります。私は此意味に於て、たゞ南無妙法蓮華經と唱へる心持で、此書を述作いたしました。乍併、書きあげて見た結果は、頗る此豫期にそぐはない者でありました。實は自分でももう少しましなものが出来るだらうと思つて居りました。ところが研究の十分でない悲さは、私自身の甚まづしい豫期の十分一にも達しなかつたのであります。まことに不幸なことには、疑義をただすべき専門家にあふ機會

もありませんでしたし、座右にはほとんど一二部の参考書以外、從來流布の聖傳類は一部もありませんでした。尤も私にして、完全無比といふ聖傳をつくらうといふ考へでありましたなら、随分あらゆる諸傳にわたつて一々に研究する必要もあつたでありませうが、それほど大膽でない私は、とにかく聖傳らしい聖傳を編まうといふ心構へから、一意聖人の自記に準據して、ともかくも六十一年多端なる聖人の一生を叙し終つたのであります。

日蓮聖人の傳記を撰するに就ては、聖人の自記によるのが尤も正しい方法であります。現存の者にあつては最古の傳と目すべき行學日朝師の「元祖化導記」二卷は全く此方法によつて撰述されてあります。たゞ日朝師の時代にあつては、日蓮聖人の御書に對する研究が、只今の様に自由ではありませんでした。爲に聖人の眞撰でありながら僞撰と目せられたり、或は全く諸山の寶庫中に秘藏されて公開を禁せられる等の事情の爲めに、廣く聖人の自記を徵して遺憾なく聖人一代の行狀を考定し記述する事が出来ませんでした。かつ文献學的考證

の不十分な世の中でありましたから、聖人の御書中に記せられた事柄に對しても、十分な研究が届かなくつて、たゞ一代行化の大綱だけが傳へられたのみであります。

「元祖化導記」に次で、圓明日澄師の「日蓮大聖人註畫讀」は、時代がこれにつぐばかりでなくその良書たることに於てもやはり「化導記」につぐべきものであります。が、それに次での智寂日省及び六牙日潮兩師の聖人傳述作の方針に就ては、不幸にして其實質に於て十分賛同しかねるのを遺憾といたします。けだし兩師の護法心の熱烈なことは最も敬服すべきであります。が、聖人傳における正系たる聖人の自記に對する態度の不十分と、口碑傳説に對する取捨の不十分とは、遺憾ながら、以後の聖人傳に對して好ましからぬ結果を残したのであります。しかも聖人に對する崇敬の感情を示したことは、この兩師の態度における美なる特色とすべきでありませう。

建立玄得兩師の「本化高祖年譜」は、はるか後のものでありますが、叙述は簡單な

がら聖人傳中の好著と目すべきもので、考證の比較的正確なこと、いひ、文章の妙味といひ、まことに聖人傳としてはぶかしからぬものであります。小川泰堂氏の「日蓮大士眞實傳」は、記述の實質に於ては、必ずしも以上の諸傳にすぐれたとはいへないのでありますが、一種の讀物としての聖人傳としてはその挿入せられたる多くの繪畫と共に、たしかに誇るに足るべきものであります。此書の著者小川泰堂氏はすでに此書述作の以前に、日蓮聖人の遺文四百餘篇を校訂して、所謂録内録外を統一した「高祖遺文録」三十卷を以て正しい日蓮聖人の御書を成されたほどの人でありますから、上の「眞實傳」に於ても、よく聖人の御書によつて記述はされましたが、聖人の御書を正確の典據として、それによつて一切の口碑一切の傳説を判ずるといふ態度には出られなかつたのでありますから、「眞實傳」五卷は、良著たることに於て毫も異存はありませんが、最後の決をこれによつてとるといふ事は出来ないのであります。

明治大正の代になつて何事も研究といふ事が主になつて参りました。随て

聖人傳を述作する人々の間にも、在來の傳によらずに、直接聖人の御書によるといふ聲が高くなつて参りましたが、しかし駈け出しの研究等々は、從來の諸傳にはよらないといひながら、やはり從來の諸傳によつて聯絡をつけなければ記述の統一がたもてない爲めに、知らず知らず、上記の諸傳により、別してほとんど唯一の物語りたる「眞實傳」を通して、智寂日省師、六牙日潮師あたりの傳を復述するにすぎなかつたのであります。のみならず、中にはまた随分と荒唐無稽の説を加へるものも出来ました。結果として、上述の如く、聖人の研究は、これ等の諸傳によつては何等新方面を開拓されなかつたのであります。

たゞこゝに一つ、頗る奇としなければならぬのは、これ等の諸傳の撰述が、そのほとんどすべてが、専門家の手を離れて、一般世間によつてなされた事であり、これは、史傳的には、何等啓發をうけなかつたといふ事が、遺憾の様ではあります。これは、國家全體の希望が期せずして此人々によつて代表されたものと考へれば、この聖人傳の通俗化も、その一面には確に喜ぶべき傾向があるのであり

ます。そこで私共の希望としては、所謂専門家が、よく此ういふ人々を指導して、完全なる聖傳(主として讀物の)をつくらせる様に努力しなければならぬと思ふのでありますが、また不思議に専門家の方面には、餘り聖人傳述作の事業がない様であります。たゞ田中智學先生の「日蓮聖人略傳」同氏の門下たる山川智應氏の「日蓮聖人傳十回講話」(これは講演としては完結した相であるが、文字の上には發表されたのは遺憾ながら未完結である)は私が拜見しましたうちでは恐らく聖人傳中の權威だらうと存じます。また最近發表されました本多日生上人の「日蓮聖人正傳」は不幸にしてまだ拜見はいたしませぬが、定めし立派なものであらうと存じます。以上の三述作は、いづれも日蓮主義の權威たる方々の撰でありますから、まさしく現代聖人傳中の典據とすべきものであります。これに對してなれば専門家とも目すべき文學博士姉崎正治氏に「法華經の行者日蓮」といふ好著があります。此書に於て示されました姉崎氏の意見は、専門家に於て必ずしも賛成さるべきものではないかも知れませぬが、とにかく聖人の傳として

多くの特色を有した書である事は疑へないのであります。

そこで甚すくないとはいへ是等の名著があるのにこれに伍して、此書がいかなる理由を以て存在し得るかは、一往述べなければならぬと思ひますが、批評がましい事は諸先輩に對して敬意を失するものと存じますから、それらは御判断にまかせたいと存じます。が、たゞ私が述作の際に自ら希望いたしました事は、これによつて聖人の全面影をなるべく周囲に及ぼさ出したいと思つた事であります。しかもそれを、たゞ排列的でなく、戯曲の漸次に開展する様なあんに、叙述したいと思ひました。けだし日蓮聖人の一生の如くしかく戯曲的に巧みに構成された生涯はあるまいと思ひます。書中にもしばしば申しましたが、聖人は全く豫言された聖者で、而して豫言を以て人類永遠の平和を示された偉大な聖者であります。隨て其一生の行動は一の大なる法則の下に、整然として爲されたのであります。それは實に驚く様に規定されてあります。凡そ聖人の一代には、聖人として爲さなければならぬ事のすべてが、ちやんと豫定さ

れてあつて、其豫定にもとづいて聖人が行動されれば、周囲の世界もまた聖人の行動と節を合して、頗る微妙なる階調をなして居ります。此點は別して東西古今のいかなる聖人賢人英雄豪傑にも全く見られないところであります。随て聖人傳の體裁としては、編年體でなければ、どうしても微細に此間の呼吸をしめす事が出来ないと思ふのであります。

私は、日蓮聖人を以て人類世界の最大驚異であると存じます。凡そ人類の歴史あつて以來、聖人の様な偉大な人はないであります。聖人は單に無勢力な聖人ではありません。物質界に何等の力をも有しない内生活の雄者ではありませんが、孔子の如き大道徳家であつて、同時に、秀吉の如く、家康の如く、ナポレオンの如き雄略をそなえた大英傑であります。即ちたゞ教を垂れて能事終れりとする聖人でなく、全く世界を改造して人間に眞實の安息を與へんが爲めの偉人でありました。随て其包容もまた古今無雙であります。その智慧は三世を徹見するの大智慧、その慈悲は一切衆生おほはざるなきの大慈悲、それを遂行する

の意力はすなはち一天四海皆歸妙法の大願業となつて世界の光輝となりました。しかもこの世界をおほふ大聖人が、特に此日本國を以てその宗教の必要條件とした事は、聖人の宗教が、事實的に世界を眞理の中に包容し得る事を證據立てるところの、尤も深遠な思想であります。聖人が日本を力説されるのは、聖人を小くするのだといふ様な考もありませんが、それは誤解であります。

かういふ偉人の一生は、たゞ聖人の内部生活をうつしてそれで足りるわけのものではないのであります。聖人が外部と交渉された事實の幾部分を録して、鎌倉幕府の威力も遂に聖人をばいかんともする事が出来なかつたといふ様な月並な叙述を以て満足すべきものではないのであります。たゞ日蓮聖人といふ一大樞軸の廻轉につれて、時代も、民衆も、國土も、世界も、ともに廻轉しつゝ、そこに種々なる波瀾を生じ、葛藤を生じたありさまを描寫しなければならぬのであります。しかもそのよつて生ずる波瀾に非常な複雑なものがあつて、極めて些々たる如き事件の中にも、なを教義の緻密な發現を見るなど、實に人文史上の大

觀を極めて居る事は、聖人傳の一大特色であります。すなはち私の希望の全部をこの聖傳の上に實現するに就ては、世界史及び日本史の重要な一部として日蓮聖人傳を記さなければならぬのであります。(不幸にしてこれは全うされませんでした。)

私は以上の見地におきまして、到底その全體はうつせないまでも、幾部分なりともあらはせるだけをあらはして、從來の聖人傳の缺點を補ひたいと思つたのであります。如上の希望を満足するに就ては、凡そ左の件々を必要としました。第一には聖人の事業の性質と規模とを考定する事であり、第二には事業の中心たる聖人の性格の面影に就て研究を爲す事であり、第三には聖人と聖人の周囲との交渉關係を精査する事であり、第四には、時代の傾向實情を知悉する事であり、第五は、

古來、二天四海皆歸妙法は日蓮聖人門下の標語でありました。しかも門下の大部分はこれに對して現實的規模を與ふる程の具體的觀念をもつて居なかつ

た様であります。いはんや日蓮聖人の性格に就ては、たゞ本化上行の再誕といふ點から漠然として高遠なものとするばかりで、その性格の面影に就て確たる捕捉をなし得なかつたのであります。同時に聖人と聖人の周囲との交渉に就ても、考へ方があまりに單純でありました。その單純な結果として、時代其物に對する研究の如きはほとんど皆無といつてもよい状態でありました。これでは聖人の一生を描寫して活躍させる事は到底困難なのであります。

殊に日蓮聖人傳の史的考證に就ては、往古の専門家等、殆ど何等の確たるものを殘し得ませんでした。これが後世の研究者に對して頗る困難を與へたのであります。たとへば聖人の佐渡流謫に就て辣腕をふるつた武藏守、後に武藏前司の如きは、數百年の永い間、北條時房の子の朝直(武藏守後武藏前司)だとされて居りました。違つて居ります。この聖人佐渡流謫の責任者は朝直でなくて朝直の子の武藏守宣時(文永十年に武藏前司となる)であります。明治大正の代になつても、斯る誤りは尙依然として繼續されました。文學博士姉崎正治氏の名

著法華經の行者日蓮の如きも、その第一版には、此武藏守をば、龍口法難より八年前に死んでゐる武藏守長時と斷せられる様な甚いあやまりを致されました。これ皆從來の紀傳の考證不精確なるが故であります。其他平左衛門尉頼綱の人物の如きも、古來漢として傳ふる所がなかつたのであります。しかも是等が漸く鮮明になりましたのは、恐らく現代日蓮主義の權威たる山川智應氏の研究によつてあります。寡聞私の如きは、専ら同氏の研究に負ふところが多いであります。素より公開された學說でありますから、其說に従ひこれを拜借するに就ても、一々同氏の許可は得ませんでした。こゝに謹で敬意を表します。が、同氏とてもまだ全部の研究を果されたわけではありません。私のごときは尙更の事であります。勢ひ其點に就ても、不十分なものを世に提供しなければならぬのは私に於ても十分遺憾と感ずるのであります。何分時世は前申した様な急迫な状態であります。世界は世界大戦によつて空前の震盪を感じました。戦争の終了と共に世界は一大覺醒をなさなければならぬのであります。

しかし私共が豫期した様な結果は仲々生じさうにも思へません。ウイルソンの國際聯盟もつひに空想にすぎないであります。かゝる時に際して、久遠の平和を人間の世に下された、日蓮聖人に就て研究することは尤も必要な事と思ふのであります。しかし日蓮聖人研究も然るべき口火をつけなければ、依然として舊套を墨守するに過ぎないのであります。かゝる際にあつては、全きものよりはむしろ應急の趣意にかなつたものをよしとするのが原則と存じます。すなはち拙速を尊ぶといふ語によつて、此小著を敢て世間に提出いたします。これによつて世間の日蓮聖人觀の上に、多少とも新らしい機運をうながし得れば、わが能事は終れるものであります。たゞ私の此書に對する責任は、この書を全然不要とするほどの好著のいづるまで、どこまでもつゝかなければなりません。すなはち其好著の出現するまで、私は、今後研究のすゝむに隨ひ、此書の記載したる事實の上にも、はた思想の上にも、乃至は行文の上にも、出來るだけの増補と訂正とを加へて、ねがはくはあやまりを傳ふる事の、極てすくなからん事を

期するつもりであります。隨て此書に對して疑義を抱かるゝ諸賢は、直接著者に對して御垂示を賜はるとも、或は雜誌新聞紙等にて充分の御批判を賜はるとも、そのいづれにもあれ、御懇篤の御教示に接することは、私の尤も光榮と存するところであります。

神武天皇即位紀元二千五百七十八年

日蓮聖人生誕六百九十七年

大正七年十二月

著者謹んで識す

例言

一、此書の述作に關しては、不幸にして、博く考へてその正確を期するの時間を有せざりしと座右典籍に乏しかりし爲め、或は獨斷に失するの嫌なしといふべからず、若し其說にしてあやまりあらば、此書を読みたまふ諸賢願くは指教をおしみたまはざらんことを。

二、此書の述作の體裁に就ては、聖人の一代を三段に區分して容易にその一代の中心を知り易からしめたり。「鎌倉中心の時代」はその第一にして、「佐渡流瀆の時代」はその第二、「身延隠棲の時代」はその第三なり。すなはち佛教における經典分文の佳例たる「序」「正」「流通」の三段節によれるものにして、此經典分文の例を直ちに聖人一代の行化に配して、「佐渡中心」の説を立せられたるは田中智學先生の創說せられし所なりと云ふ。尤も聖傳分別の典據とすべきなり。此書もまたこれに隨ふ。

三、叙述の體裁に就ては、必ずしも從來の諸傳に隨はず、聖人が京師南都の遊學の如きは次第叙述するの煩をさけてたゞ其要領を記述するにとめたる如きその例なり。要は細大の事件ことごとくこれをつくさんよりは、傳へざる可らざる事に於てなるべく其精を欲したるが故なり、隨て著者の必要と認めたるものに就ては、時として煩冗に失するかと考へらるゝまでに叙述せしこともすくなからず。

四、聖人の一生に於て吾人が最も感激にたへざるは、聖人の教義が事實とともに次第開宣せらるゝ



その微妙なる徑路なり。これを詳叙するにあらずんば到底聖人傳の眞要は發揮し得られざるも、事もとより専門家の業に屬して、著者の如き學にうときもの、よく爲し得るところにあらず、即ち極めて不十分の叙述を以て満足せざる能はざるは遺憾なり。

五、著者は此書に於て、聖人の思想を叙するにあたりて、佛教における術語は、なるべく使用せずして極めて平易通俗に解領せしめんと試みしも、かくの如きはもとより著者の分にあらざる事にてありしかば、豫期の如き結果をあぐる能はず。或は恐る、平明につとめたる結果これによつて更に幾層の迂曲を與へしやも知るべからざるを。

六、「鎌倉時代」を論ずるに就ては、著者は、日蓮聖人の遺文を通じて、「鎌倉時代」なるものに就て、多少の新解釋を爲し得たるを信ず。その解釋の當れると否とは看者各所見を異にすべきも。特に鎌倉時代の政治の中、蒙古來襲に關する外交と國防とに就て論述せし點は、史學家の一考をわづらはすべき價値ありと信ず。しかも其點に就て日蓮聖人に對する研究の方針が從來と全く異ならざるを得ざるは、容易に解し得べき事なるべし。

七、若し時間の制限、紙數の制限等なからましかば、著者は、日蓮聖人の遺文を通じて「鎌倉時代」なるものに就て、尙幾分の寄與をなし得たりしならんも、種々の事情は、そをして他日を期せざるを得ざらしめたり。此書なるの後に於て、著者は、閑を得て更に「鎌倉時代」において記述するところあるべし。

八、著者はこの小なる述作の上に頗る過當なる結果を求めんとせり。そは、日本の國史における後堀河天皇の貞應元年より、後宇多天皇の弘安五年迄の六十一年間を、日蓮聖人の傳記に於て叙述するを以て至當とすといふ一種の見解によりて當時の國情を此一巻に縮寫せんとせし事これなり。これ聖人を歴史上の一人物として通常の偉人傑士の間に伍せしめて語るを不當の事なりとし、日蓮聖人の教化が日本國家における根本的意味なる立脚地より、「承久の國難」と「弘安の國難」との二つの間にありて、この二大災禍に對する根本的救治をなせる偉人は、すなはち國家の生命をさながらにあらはせりとの見解によれるものなり。しかもそを記すべく著者の識量はあまりに小に過ぎ、著者の見聞はあまりにまづし。隨て此書の結果は、たゞ著者の抱負をのみ語つて、その實行は不能なりしものと解せられん事を乞ふ。

九、著者は事實を記する事に於て極めて正確ならん事を期せしも、時にまた傳説にもとづきての詩的想像、或はまた傳説を離れての詩的想像をも敢てせる事あり。これ聖人の人格とその人格の發動に對する適當なる心理的描寫としてゆるさるべきものたることを信じたればなり。且つまた聖人の一生は序文の中に於ても記せしごとく、殆んど戯曲的巧緻を以て目すべくして、しかも其事實は戯曲よりもなほ妙なり。いはんや聖人が此間の事を記せらるゝの文藻は至妙にして、事實以上の暗示にとめるに於ておや。著者また此境に參して、必しも不可ならざる範圍に於て適當の文辭をつらねたるは、けだし著者の意、此書を以て單に一の記録たるにとゞまらしめずして、聖人の全人格の發動を描寫し

て、人をして、聖人に接するの思あらしめんと願したればなり。

十、著者は此書に於て、つとめて聖人傳の地理的興味を十分ならしめんと企てたり。すなはち聖人の靈蹟にして著者が曾つてふみたる地に就ては、一見無用と思はるゝまでの描寫と考證とをなせし點すくなからず。著者はこれによつて、この一大人格の對象としての天地自然と、この天地自然の中にかゝる一大人格との相互の對映に就て尤も聖人を活躍せしむべきものあるを信じたればなり。しかも著者は、これに就て尤も重要と目すべき地點たる房州と佐渡とを知らず。若し著者にしてこの二つを踏査し了れば、著者はすなはち「日蓮聖人傳の地理的研究」を完成して、聖人傳の側面研究となすを得べきなり。

十一、日蓮聖人傳中の豊富なる諸問題（教義はいふまでもなければ、史的に開拓すべき多くの問題）に就ては、到底この一冊のよくつくすところにあらず、また著者の此書中に逸せしところのものにして、大に叙説を要すべきものもこれあらんか。この欠缺をみてんが爲めに著者は此書の後に「日蓮聖人傳研究」を漸次刊行して、その粗を精にし、そのもれたるを補はんと欲す。尙此書に於ては聖人の門下に就て記すこと甚すくなし、しかも聖人の門下には英俊甚だ多くして、日蓮主義の光輝をあぐる事頗る顯著なり、是等を集録して、日蓮聖人傳の側面研究とする事は尤も必要の事に屬せり、此書の後に於て著者はまた必らず此點に就て研究するところあるべし。

十二、此書の名に就ては、著者は最初名くるに「日蓮聖人傳」を以てせり。友人はこれを以て平凡

なりといふ。平凡と非凡とは予の問ふところにあらず。しかも何等の奇構を弄さずして直爾に「日蓮聖人傳」といふものは、けだし著者の抱負の存するところにして、「日蓮聖人何々傳」或は「、、、」としての「日蓮聖人」などいふ紛紜葛藤を去つて、單に稱して「日蓮聖人傳」といふ中、綸爛を去つて平淡に歸するの趣と共に、傳としての正系をこれにしめさんとなり。しかも友人兩三輩依然として平凡を説いて、結局此書の普及に害あらんかと憂ふ。それ此書の普及は著者が此書の完成とともに畢生の願業とするところなり。平凡は敢て恐れざれど普及に害ありては何の詮かあらん。即ち改題して今の如くせり。著者の本志にあらずといへどもこれもまた佳名たるを失はず。

十三、此書の文體に就ては、かつては、文語體を以て朗誦に便せんと欲せし事ありしも、後ち時代文としての口語體にあらずんば、到底よく劇的發展を描き出して委曲なる能はざるを思ひて、此書は即ち口語體を以てせり。しかも、聖傳を述するに文語體を以てして、朗誦せしむるの必要は尙大にこれありと信ず。

十四、此書は大正七年九月二十一日を以つて起稿せられ、同年十一月十五日（陰曆十月十二日日蓮聖人臨終の前日）の夜を以て本文を脱稿せり。通じて五十六日。其間事によりて約半月を空くす、すなはち僅々四十日餘にして此書をなす。且つ旅中匆忙、著者の座右には、著者多年集録し來れる「日蓮聖人傳年譜」一冊と世間文士の筆になれる二三の聖人傳あるにすぎず、幸に鎌倉時代の事に關しては、史界にありて鎌倉時代研究の權威と稱せらるる文學博士三浦周行氏の「鎌倉時代史」あり、鎌倉

時代に關する材料は多くこれよりいでて著者を益する事すくなからず。しかも博士の史的意見に對して博士と著者とは必ずしも相一致せず、爲にこの敬服すべき名著に對して思ふ儘の批評を下せしことは、史學の先進に對して頗る敬意を失するに似たりと雖も、その意の存するところは、けだしこれによりて國史の荊蕀をひらかんとするの微志に外ならず。これは學に忠なる博士の、必らず諒とせられ、而してこれによつて鎌倉時代史に横はれる幾多の疑點を解決せんと試みらるゝものなることを疑はざるものなり。

十五、書中、日蓮聖人に關する文辭は、聖人の信仰者たる著者としては、或は不遜にすぐるの嫌ひなしとせず。しかも餘りに敬語に累せられて、語調の滑稽に陥らん事を恐れてこれを避けたる事多し。これは著者の苦痛とせし所なれど、文辭にまづしき著者のまたいかんともする能はざる所なりき。かつ書中の「假名づかひ」等の如きも、必らずしも正確ならず。然るべき學者の檢閲を請はんかと想ひしも、適當の機會を得ずして止めり。

十六、此書篇を分つこと三、篇の下その所要にしたがつて各章あり、章の下小題を數ふ。小題中にふくまれたる事項は、脚註の欄に123等の數字を以てこれを票出せり。これ等の數字を有せずして脚註欄に記せられたる文字は、或は本文に對する注意、若しくは本文の脱漏に對する補足、或は本文中に記するに及ばずしてしかもなを置くべき事等をしるす。

十七、書中、日蓮聖人をよぶには一々日蓮聖人といはずして單に聖人しやうじんといふ、若し聖人せいじんといふ場合

には必らずふりがなを以て區別せり。また聖人の門下に對しては、日昭、日朝、日興等の諸師を、時に昭師、朝師、興師などよぶ事あれども、多くは辨阿闍梨日昭、大國阿闍梨日朝、或は筑後房日朝、伯耆房日興等と、敬語を附せずしてよべり。これ聖人門下の高足に對して甚不遜なるが如しといへども、聖人を傳するにあつて、門下に對する稱呼としては、必らずしも失當とすべきにあらざるか。

十八、此書はじめは附録として「日蓮聖人一代年表」を附すべき考へなりしが、こは、此書の後ちあまり遠からざるうちに、やゝ詳密なる「日蓮聖人傳年譜」を出すべき計畫あり。よつて此書に附する事を見合はせたり。尙日蓮聖人の足迹の及べる地圖は、著者が靈地の巡拜を終りて後に完成さるべく、目下研究中なり、その大略を記したるものは、すでに姉崎正治氏の「法華經の行者日蓮」の附圖に有之、更に贅するに及ばず、よつて研究の完了をまつ迄、これもまた此書に附する事を見合はせたり。

十九、書中に挿入せし日蓮聖人の筆蹟は中山法華經寺所藏「觀心本尊抄」の開卷にしてけだし天下の至寶なり。別に傳へて「波木井尊容」と稱する藤原親安筆日蓮聖人の尊影一葉、及び聖人の靈蹟としての、誕生地房州小湊の風景と、弘長元年五月十二日聖人伊東法難の古蹟なる伊豆國田方郡日蓮崎の「祖岩」をかゝげて、此二葉によつて靈地の面影を示せり。けだし伊豆の祖岩は靈蹟中の靈蹟なり、多くの靈蹟と稱するものが、徒らに殿閣堂舎の美と大とを競つて却て靈蹟の意義を沒了せんとしつゝある中にありて、「日蓮崎まないた岩」の巉巖と、怒濤と、暗礁とは尤も靈蹟としての面目を示す

に足れり。ことに「日蓮崎」の名は、日本國家が聖人の名をもつてよべる唯一の地名なり。國土を祝福せんが爲めに、特にこの圖を標出す。これ等に挿入せる寫眞版に就ては、いづれも世間に公表されたる「日蓮聖人御眞蹟」「本化聖典大辭林」等によつて複製せり。一々に知照して許可を請はざりしを以て、特記してこゝにあつく敬意を表す。

二十、著者の自ら序せしところは、もつて短しとすべからざるに、「例言」また二十則の長きにわたれども、なを未だ著者の意をつくさず、看者著者を以て煩冗を好むものと爲したまふことなけれ。讀み終つて一事 礙滯するなからんを欲して、著者の赤心を布くのみ。けだし本文讀過に備へんが爲なり。しかも著者が最後において篤く江湖に乞はんとするところは、此書出版の後世間文筆の士にして日蓮聖人を傳せんとせらるゝの士は、必らず此書をもつて大體の標準とせられん事を乞ふ。そは此書は、日蓮聖人を以てたゞ小き愛國者なりとする誤解を解き、たゞ一箇の宗教家なりとする誤解を解き、傑僧英雄僧、意志の人などいふ偏見に對して其然らざるを説いて比較的に醇正なる聖人を傳するを得たりと考ふればなり。

終りに、此書の出版を引受けて十分に著者の意を延る事を得せしめたる佐藤卯兵衛氏の好意を謝す。

大正七年十二月

(著者記す)

日蓮聖人法華經色讀の  
生涯を略叙せし史録

# 日蓮聖人の「法華經色讀」史

## — 目 次 —

### 第一篇 鎌倉中心の時代

#### 第一章 立正安國論已前

(1) 日蓮聖人の出現と時勢……………	一
1 「承久の亂」と國體の危機(一) 2 「承久亂」に對する國民の態度(二) 3 國家生命の自然救済(三) 4 日蓮聖人出現前後の政治家及び宗教家(五)	
(2) 生誕と家系と幼時の環境……………	七
1 聖人出誕の時、處、父母(七) 2 聖人の家系に就ての二説と家門の尊卑(七) 3 出生の奇蹟に就ての傳説(八) 4 出誕の國に就ての聖人の自記(九) 5 聖人の幼時と環境(九) 6 房州人と天空海淵なる房州人の郷土(一〇) 7 海洋の感化と天才の自然觀(一一)	
(3) 聖人の立志と立志の動機及び基礎……………	一五
1 出家以前における聖人幼時の發心(一五) 2 聖人發心の動機と「承久の亂」(一七) 3 早熟の天才(一七) 4 出家(一八) 5	

千光山清澄寺と聖人在山の時の師友(一七九) 6 清澄寺の狀態(一八〇)

(4) 修學その一(第一期清澄、第二期鎌倉)……………三三  
 1 聖人が修學の規模と「日本第一の智者」(三三) 2 研究の二途「國體の根本」と「佛教の中心」(三三) 3 鎌倉の修學(三四)  
 4 鎌倉在留の時期とその間の研究事項(三五) 5 聖人鎌倉修學當時の國情(三五) 6 後鳥羽法皇の崩御と鎌倉幕府(三七)  
 7 鎌倉在學中の生活狀態(三〇)

(5) 修學その二(第三期叡山南都)……………三三  
 1 叡山に入るに就ての傳説の誤謬(三三) 2 研究の進捗と時勢との併行(三三) 3 聖人在學當時に於ける叡山の狀態(三四)  
 4 ほろぼされたる傳教の雄圖(三五) 5 聖人の師と師の學風(三六) 6 叡山に於ける聖人の地位並に住地住房(三六) 7 歴  
 史的研究と現量的研究(四〇) 8 園城寺及南都(四二) 9 前後研讀二十年(四三) 10 修學の終結と時代の適當なる配置(四三)  
 11 叡山を出づ、修學の順序、要領、結果(四七)

(6) 立教開宗……………五五  
 1 修學の大成と故郷に於ける開宗の意義(五五) 2 宗廟へ開宗の事を奏す(五六) 3 開宗發表に先だてる靜慮(五七) 4 旭  
 の森の開教と日の理想(五八) 5 立教開宗における最初の説法(六〇) 6 最初の迫害(六一) 7 迫害を華房に避く(六四)

(7) 日蓮聖人によつて唱へられたる法華經と題目の意義……………六六  
 1 佛教の中心たる妙法蓮華經と無量義經の大判(六六) 2 法華經にあらはれたる諸法實相(六七) 3 法華經の時勢と非法  
 華經の時勢(六八) 4 法華經の出現と正像末の兼言(六九) 5 末法應時の法華經(七〇) 6 末法の開幕(聖人の出世は末法  
 に入つて百七十一年目)(七一) 7 三大秘法と聖人の一生(七二)

(8) 聖人の鎌倉入と事業の基礎……………七四

- 1 安房の開教と鎌倉の弘教(七四) 2 兩親の受戒と聖人最初の弟子(七五) 3 日蓮といふ名のよつて出づる所(七七) 4 鎌  
 倉に入る(七七) 5 聖人の弘通と鎌倉の佛教界(七八) 6 小町の辻説法と街頭布教の新形式(七八) 7 日昭及び日朝の來投  
 と在俗の諸弟子(八三) 8 鎌倉宗教界の狀勢(八三) 9 「四箇格言」の大批判(八五) 10 「念佛無間」(八六) 11 「禪天魔」(八八)
- 12 「眞言亡國」(八九) 13 「律國賊」(九〇) 14 「四箇格言」と下種の化導(九二)

第二章 「立正安國論」と「伊東流謫」の前後

(9) 正嘉の大地震と正元の大飢疫……………九五

- 1 時勢の本領的促進と極樂寺入道重時の一曲事(九五) 2 領家は何人なるか(九七) 3 保争の内容(九七) 4 極樂寺入道の  
 私曲に對する重要な觀察點(一〇一) 5 聖人の宗教的本領(一〇二) 6 立正安國論の動機(一〇四) 7 災禍の由來(一〇五)
- 8 三災と七難(一〇五) 9 變天と飢饉と疫病と叛亂の歴史(一〇六) 10 宇宙精神と人間精神(一〇八) 11 聖人の岩本實相寺入  
 道と學頭智海并に學徒伯耆房(一一〇) 12 入藏中の災天(一一〇) 13 準備的述作(一一一) 14 立正安國論の述作と豫言(一一三)
- 15 文應元年七月十六日の上書と「立正安國論」の内容(一一三) 16 最明寺時頼と立正安國論(一一五) 17 北條氏の中樞に對す  
 る考察と日蓮聖人に對する鎌倉幕府の感情(一二七) 18 鎌倉政治の特色(一二八) 19 立正安國論の反響と松葉ヶ谷の焼打(一  
 一七) 20 松葉ヶ谷焼打の眞相(一二〇) 21 お猿窟の傳説(一二〇)

(10) 伊東の流謫、法華經の行者と宗教の五綱……………一二三

- 1 房總の遊化(一二三) 2 聖人の歸鎌と伊東の流罪(一二三) 3 伊東流罪の眞相(一二三) 4 流罪によつてあらはされたる極  
 端なる憎惡の感情(一二三) 5 最近に於ける祖岩の兩説と眞偽(一二四) 6 船守彌三郎(一二六) 7 伊東八郎左衛

門に就ての舊説の誤謬(二七) 8 地頭の版伏(二九) 9 重時怪異を見る(三〇) 10 神經質なる鎌倉政治家(三一) 11 法華經色讀の生活(三三) 12 「教機時國抄」に於ける「宗教五綱」の發表(三五) 13 「教」知教判(三三) 14 「機」知機判(三五) 15 「時」知時判(三五) 16 「國」知國判(三三) 17 「教法流布の前後」知序判(三三) 18 法華經の行者に對する三類の強敵(三七) 19 西大寺製尊の鎌倉下向と極樂寺良觀(三八) 20 製尊によつて授戒されたる鎌倉の貴婦人(三三) 21 伊東流瀆救免の真相(三九)

(11) 小松原法難の前後……………一四一

1 最明寺入道時頼の死(一四一) 2 文永の大長尾、執權長時の出家と死(一四二) 3 聖母の逝去と蘇生延壽(一四三) 4 道善房との華房における會見(一四四) 5 歸省の目的(一四八) 6 十一月十一日東條小松原に於ける法難(一五〇) 7 思想、事業の轉機(一五三) 8 「日本第一の法華經の行者」及び東條法難に於ける二の意義(一五三) 9 房總に於ける教難の延長と頗々たる天變地天(一五四) 10 幕府中心の動搖(一五五) 11 來らんとする不滅の年(一五六)

第二章 蒙古の國書と日蓮聖人の豫言

(12) 蒙古第一回の牒狀と「十一通御書」……………一五七

1 蒙古の國書と他國侵逼(一五七) 2 蒙古牒狀の到來に對する聖人の態度(一五九) 3 一の試み「法華房に與ふる書」(一六〇) 4 群星の出現に就ての國家の驚擾(一六一) 5 第二の試み「宿屋入道に與ふる書」(一六二) 6 北條彌源太入道(一六三) 7 第三の試み「十一通御書」(一六四) 〔北條時宗狀(一六五) 宿屋入道狀(一六六) 平ノ左衛門狀(一六七) 北條彌源太狀(一六八) 建長寺道隆狀(一六九) 極樂寺良觀狀(一七〇) 大佛殿別當狀(一七一) 壽福寺狀(一七二) 淨光明寺狀(一七三) 多賣寺狀(一七四) 長樂寺狀(一七五) 8 十一通書における二つの中心その一平ノ左衛門狀(一六八) 9 十一通書における二つの中心その二極樂寺良觀狀(一七〇)

10 十一通書の構想と法王破魔の大戦闘曲(一七四) 11 日蓮聖人傳 於ける聖人迫害の偉大なる一代表者としての平ノ左衛門尉(一七五) 12 平ノ左衛門尉に就ての山川智應氏の研究(一七七) 13 政權の推移と執政者の低下、政兵の大權を握れる一執權家司(一七九) 14 十一通書に對する反響(一八〇) 15 弟子權越を激勵す、聖人の決死的覺悟(一八一)

(13) 再度の蒙古國書と聖人の再勸告……………一八二

1 蒙古の國使對馬に來る(一八二) 2 十一通書に對する反動の一としての三人問註(一八三) 3 問註に對する聖人の嚴誡(一八四) 4 「十章抄」の末文(一八五) 5 蒙古再度の國書と返牒に對する不可(一八七) 6 十一月の再勸告とその反響、再度の牒狀に就ての世間の恐怖(一八九) 7 北條時宗の性格と時宗が聖人に對するある程度の理解(一九〇) 8 當時の日本に於ける二つある二大壓力、聖人決死の大覺悟と展開せられたる時代の光景(一九一) 9 幕府が聖人に對する初度の評定と聖人が門下に下せる雄大壯烈なる宣示(一九二) 10 「立正安國論奥書」(一九四) 11 未來永遠にわたれる豫言としての「立正安國論」(一九四) 12 富士埋經の説及び時期(一九四) 13 「法門可申抄」の嚴訓、聖人の權威をあらはせる一面(一九五)

第四章 「龍口法難」の近因と法難の次第開展

(14) 極樂寺良觀の雨乞に對する聖人の挑戦……………一九七

1 文永八年前半期の平靜(一九七) 2 急轉せる後半期、早懸に就ての良觀の祈雨(一九七) 3 良觀に對する聖人と、聖人に對する良觀と(一九〇) 4 祈雨の不成功、聖人の皮肉にして辛辣なる態度(二〇〇) 5 良觀の性格と人物(二〇一) 6 良觀に對する聖人の打撃と其効果(二〇二) 7 良觀に對する有効なる打撃法(二〇三) 8 良觀を聖主として聖人に對抗せる鎌倉佛敎家の一大聯盟(二〇四)

(15) 良観、念阿、道阿の訴状と幕府の評定……………二〇四

- 1 僧行敏によつて試みられたる斥候戦(二〇四)
- 2 良観、念阿、道阿の訴状(二〇五)
- 3 訴状に対する聖人の答書(二〇六)
- 4 訴状の不成功と裏面運動の成功 幕府の評定會議(二一〇)
- 5 聖人評定所へ出づ(二一一)
- 6 當時の評定衆と引付衆(二一二)
- 7 自界叛逆難と佗國侵逼難との豫言(二二三)
- 8 形勢重大(二二四)
- 9 「昨日御書」(二二五)

(16) 形勢の急轉、御勘氣と召捕……………二二八

- 1 生か死か、恐しき表裏両面(二二八)
- 2 重視されたる聖人の地位勢力(二二八)
- 3 平ノ左衛門の郎黨と退轉者(二三〇)
- 4 少輔房が打ちし法華經五ノ卷の杖(二二二)
- 5 大罵聲「日本の柱倒れんとす」(二三三)
- 6 引廻しと訊問(二三四)
- 7 正式になされたる國家に對する第二次の諫言(二三四)

(17) 龍の口の頸の座……………二三五

- 1 武藏守宣時の「預り」(二三五)
- 2 八幡神によせたる警告(二三五)
- 3 四條頼基につぐ(二三七)
- 4 頼基をいましむ(二三八)
- 5 龍の口(二三九)
- 6 「これ程の悦びをば笑へかし」(二三〇)
- 7 天地の震怒、刑場の混亂(二三〇)
- 8 刑場の沈黙(二三二)

第二篇 佐渡流謫の時代

第一章 佐渡に入るまで

(1) 依智に入る……………二四三

- 1 本間六郎左衛門重連(二四三)
- 2 誓固の武士をねざらふ(二四三)
- 3 武士等の歸伏(二四四)

(2) 追 状……………二四五

- 1 不安状態(二四五)
- 2 聖人に對する一般の好感(二三五)
- 3 鎌倉よりの立文(二三五)
- 4 注意すべき追状の内容(二四六)

(3) 宣時の熱海行……………二四六

- 1 宣時が熱海行きの意味(二三七)
- 2 日蓮聖人に對する幕府中の種和派と過激派(二三七)
- 3 機會と口實(二三八)
- 4 責任回避と形勢觀望(二三九)
- 5 宣時の人物性格と聖人に對する態度(二四〇)

(4) 十三夜の月色……………二四一

- 1 月明に象徴されたる正義の勝利(二四一)
- 2 月天の叱咤に托して時人を警醒しあはせて聖人の内觀を表明す(二四二)
- 3 明星の來下(二四四)

(5) 龍の口以後における聖人の心地……………二四五

- 1 兼定せられたる龍口法難(二四五)
- 2 龍口までの經過(二四六)
- 3 斷頭場裡に於ける聖人の念慮、生か死か(二四七)
- 4 兼言によつて生れ豫言によつて進退する豫言的聖者(二四八)
- 5 根本的人格の根本的動作(二四八)

(6) 執權邸の怪異……………二四九

- 1 執權邸の怪異と陰陽師の言(二四九)
- 2 聖人の赦免に就ての義議と赦免に就ての兩説(二四九)

(7) 破壊せられたる教團の有様……………二五〇

- 1 富木入道(二五〇)
- 2 聖人遺難後の教團の維持(二五〇)
- 3 松葉ヶ谷庵室の破却と日期已下の禁獄(二五一)
- 4 御内を出され所領を没收せられたる在家の弟子(二五一)



(8) 教團の一部瓦壊……………二五三  
 1 弟子の迫害に対する聖人の慈念(二五三) 2 教團一部の瓦壊(二五三) 3 當時の信仰心(二五三) 4 数量的に觀たる教團の半減(二五三) 5 退轉せる「安房清澄の領家」(二五四)

(9) 迫害の第二次計畫……………二五四  
 1 教團の抵抗力(二五四) 2 流謫か否か此間の屈曲(二五五) 3 迫害の新方法(二五五) 4 放火と殺人、流言と讒謔(二五六)

(10) 流謫決定に就ての曲折……………二五七  
 1 聖人に對する幕府の宗教的畏怖(二五七) 2 不氣味な問題(二五九) 3 日蓮聖人迫害に就ての尼御前(二五九)

(11) 佐渡へ向ふ……………二六一  
 1 依智滞在中の書簡(二六一) 2 法華經の色蘊と教義の次第開展(二六一) 3 法華經の行者の實際生活(二六三) 4 聖人の教團を留守する人々の苦衷(二六五) 5 教團に對する聖人の指揮統制(二六六) 6 七日と十日(二六七) 7 「土牢御書」(二六七)

(12) 寺泊の假泊……………二六八  
 1 十月十日依智を出づ(二六八) 2 寺泊着——順風定まらず其期を知らず(二六九) 3 「寺泊御書」(二七〇)

第二章 「開目抄」中心の在島第一期

(13) 佐渡到着、謫居のありさま……………二七三  
 1 三昧原の謫居(二七三) 2 謫居生活に於ける外部的刺戟(二七三) 3 八寒地獄の苦(二七四) 4 佐渡の人情風俗(二七四) 5

弟子をかへす(二七五)

(14) 門下に對する警告……………二七五  
 1 期待されたる流謫(二七五) 2 聖人と聖人の周囲との協調(二七七) 3 「寺泊書」と「宮木入道書」との差違(二七七)

(15) 佐渡における念佛者等の動搖……………二七九  
 1 念佛者等の分派(二七九) 2 日蓮來(二八〇) 3 阿佛房(二八〇)

(16) 阿佛房の隨侍供養……………二八一  
 1 迫害の各種方法(二八一) 2 阿佛房を通しての日蓮聖人と順徳上皇(二八二)

(17) 雪中の思索生活……………二八二  
 1 迫害の難境に於ける聖人の精神生活(二八二) 2 歡喜の生活(二八三) 3 報恩觀(二八四)

(18) 念佛者等の第一僉議……………二八五  
 1 迫害方法に就ての廢議(二八五) 2 恐るべき多くの意見(二八五) 3 本間六郎左衛門の意見(二八六)

(19) 塚原問答……………二八六  
 1 各宗の聯合軍(二八七) 2 宗教史上の奇觀(二八七) 3 喧嘩と沈黙(二八八) 4 問答の形式、内容(二八九) 5 利飯と瓜(二八九) 6 六郎左衛門に對する警告(二九〇) 7 翌十七日の論議(二九一)

(20) 最蓮房の歸伏……………二九三  
 1 優秀なる天台の學僧(二九三) 2 阿佛房と最蓮房との對照(二九三) 3 塚原問答の反響(二九三)

(21) 「開目抄」の製作……………三九三

1 佐渡に於ける多くの事業と豫定されたる流調の期限(二九三) 2 「開目抄」の構想と人生世界の依據たる「大人格」(二九七) 3 實質に觸れざる法華經(二九七) 4 本法の相貌(日本を中心とする)(二九七) 5 國體無自覺(三〇一) 6 道徳宗教の無權威無勢力(三〇二) 7 承久亂の翌年(三〇三) 8 日本と一體不離の宗教(三〇三) 9 その宗教の實行者(三〇三) 10 實行者が具すべき條件(三〇四) 11 法華經の活現と「開目抄」述作の原意(三〇五) 12 聖人門下の動搖(三〇六) 13 法華經に必然的な迫害(三〇七) 14 三大誓願(三〇七) 15 「開目抄」の前と後(三〇九)

(22) 六波羅時輔の反と豫言の適中……………三二〇

1 京都及び鎌倉の合戦(三〇〇) 2 時輔と名越一門の呼應(三〇〇) 3 自界叛逆の恐怖(三〇一) 4 重連の驚愕と歸伏(三〇二) 5 重連に對する訓示と中央政界への反響(三〇三) 6 豫言の適中に就ての二箇の事實(三〇四)

(23) 幕府の小反省と世評……………三二五

1 囚れたる弟子等の一部解放(三二五) 2 佐渡に於ける皈依者の續出と念佛者の長齡(三二七) 3 念佛者の墓評(三二六)

**第三章 「觀心本尊抄」中心の在島第二期**

(24) 塚原より一ノ谷へ移る——聖人の生活狀態……………三二七

1 石田の地頭と給與の乏少(三二七) 2 近藤次郎入道(三二七) 3 聖人の生活狀態、米麩の窮乏(三二七) 4 紙の缺乏(三二七)

(25) 弟子檀越への教訓……………三二九

1 聖人門中に於ける二様の態度(三二九) 2 「佐渡御書」(三三〇)

(26) 流罪赦免に就ての希望と運動……………三三二

1 門下の悲傷と赦免運動(三三二) 2 觸頭(三三三) 3 赦免運動に對する嚴誡(三三三) 4 佐渡の流調は聖人の大神變なり(三三三)

(27) 鎌倉との往復……………三三五

1 宮木氏の使者と四條頼基(三三五) 2 佐渡へ交通の危険(三三六) 3 乙御前の母に就ての一挿話(三三七)

(28) 佐渡に於ける教勢……………三三〇

1 迫害に對する反撥力(三三〇) 2 助手としての最蓮房(三三一)

(29) 文永九年の後半期と一年中の概観……………三三一

1 後半期の平靜と「本尊抄」の準備(三三一) 2 後醍醐天皇の崩御によつて起れる國家的憂患(三三二) 3 國體的悲劇としての皇統分立(三三三)

(30) 「觀心本尊抄」已前已後……………三三六

1 「新編抄」の撰述(三三六) 2 「法華宗内證佛法血脈」に於ける聖人の外相的傳統(三三六) 3 「觀心本尊抄」の完成(三三七)

4 「本尊抄」の基本思想(三三八) 5 一念三千の意義(三三九) 6 本尊を中心としての三大歸法の密釋(三四〇) 7 「本尊抄副狀」(三四二) 8 思想發表の時期(三四三) 9 「本尊抄」の後分としての重要著作(三四三) 10 「顯佛未來記」(三四四) 11 「如說修行抄」(三四四) 12 「諸法實相抄」と「已心佛界抄」(三四四)

(31) 念佛者等が再度の僉議……………三四五

1 念佛者等の生活に及ぼせる恐慌(かうてあらんには我等かつて死ねべし)(三四五) 2 聖人を除くべき方法(三四六)

(32) 武藏前司の私の御教書……………三四六

1 佐渡と鎌倉との聯絡(三四六) 2 宣時の擅斷(三四六) 3 宣時の迫害命令(三四七)

(33) 世界統一の標幟としての本尊圖顯……………三四八

1 世界人類の大紀念日(三四八) 2 本尊の意義(三四九) 3 本尊の元始(三五〇) 4 三大秘法(三五〇) 5 「本門本尊」の略説(三五〇) 6 「本門題目」の略説(三五三) 7 「本門戒壇」の略説(三五三) 8 世界、個人、國家(三五四) 9 聖人の一生と三秘次第(三五五)

第四章 佐渡における事業の終結と凱旋

(34) 武藏前司の私曲と鎌倉時代の政治の真相……………三五六

1 三度の虚御教書(三五六) 2 鎌倉時代に對する一般史家の先入見(三五七) 3 歴史に就ての科學的態度と精神的態度(三五七) 4 北條氏の生命を通じての苦惱(三五七) 5 暴力の勝利(三五八) 6 北條氏と短命の傳統(三五九) 7 暴力の延長としての「虚御教書」(三五九) 8 日蓮聖人の政治批評(三六〇)

(35) 文永十年の概観……………三六一

1 在島中の中心時期(三六一) 2 鎌倉との交通及び聖人の侍者(三六一) 3 蒙古の使者と幕府の對外無方針(三六一)

(36) 虚御教書に就ての門下への教令……………三六四

1 虚御教書の頒發と形勢の險惡(三六四) 2 河野邊入道(三六五)

(37) 流罪の赦免と赦免 實情……………三六五

1 鎌倉宗教家の躍起運動(三六五) 2 赦免に就ての時宗の態度(三六六) 3 赦免と北條氏一門の諸大名(三六六) 4 蒙古に對す 恐怖と聖人赦免の必要(三六七) 5 赦免狀(三六八)

(38) 念佛者等の第三僉議及び企圖……………三六八

1 僉議と議題(三六八) 2 佐渡の流人生還を期せず(三六九) 3 日期の赦免(三六九) 4 赦免に就ての白頭の鳥の挿話(三六九) 5 僉議の實證(三七三) 5 信越における念佛者の計畫(三七三) 6 鎌倉入(三七四)

(39) 謫居生活の終り、聖人の鎌倉入……………三七〇

1 往古の佐渡人と聖人に對する最後の舉擧(三七〇) 2 佐渡を出づ！聖人の感慨(三七一) 3 佐渡生活の概観(三七二) 4 聖者の實證(三七三) 5 信越における念佛者の計畫(三七三) 6 鎌倉入(三七四)

(40) 四月八日における平左衛門尉との會見……………三七四

1 勝利の入鎌(三七五) 2 四月八日の會見における重なる意義(三七五) 3 注意すべき顛倒の態度(三七五) 4 蒙古來襲の時期に就ての質問(三七七) 5 文永入寇の豫言と國難の救済者(三七八) 6 眞言宗打破の眞意(三七九) 7 佛法とは明了徹底せる智慧なり(三八〇)

第三篇 身延隱栖の時代

第一章 身延生活の開幕

(1) 第三國諫の反響……………三八三

1 聖人一代の三大關節(三八三) 2 三諫における特色(三八四) 3 第三諫の意義と幕府の妥協利用策(三八五) 4 交渉斷絶(三八七)

(2)阿彌陀堂法印の雨乞……………三六七

1 加賀法印定清(三八七) 2 聖人の法敵たる人々の地位人物と俗縁的勢力(三八八) 3 定清の雨乞について参考すべき文永八年良觀新雨の失敗(三八九) 4 定清の新雨の奏効と反対派の歡喜(三九〇) 5 聖人門下の意蓋(三九一) 6 聖人の訓誡、新雨の効驗に對する諷刺(三九三) 7 聖人化導の慈智(三九四) 8 四月十二日の大風と反對者の閉塞及び門下の覺醒(三九五)

(3)身延に入る、事業の第三期……………三九六

1 國家の無自覺と萬代救済の策(三九七) 2 豫定の行動としての身延入山と、幕府の反省を促さん爲めの入山(三九七) 3 蒙古——日蓮(三九九) 4 隠棲地として身延をえられたる理由(四〇〇)

(4)身延入、雨を衝いて鎌倉を去る……………四〇一

1 五月十二日(四〇一) 2 聖人傳に於ける雨期(四〇二) 3 十二日酒匂、十三日竹の下、十四日車返、十五日大宮(四〇三) 4 富士山下の旅と聖人の願念——大宮の一夜(四〇三) 5 西行坂と富士川(四〇五) 6 十六日南部(四〇六) 7 内房御一宿の傳説は誤傳なるか(四〇六) 8 南部より身延への險道(四〇七) 9 櫻清水の傳説(四〇八) 10 日蓮水と櫻清水(四〇九) 11 相殿の溪谷(四〇九) 12 十七日身延(四一一)

(5)身延の地勢及交通並に住房の構築……………四二二

1 地勢(四二二) 2 身延と比叡との對照(四二二) 3 山嶽の配置と水流の交錯(四二三) 4 交通の不便(四二四) 5 鎌倉身延間の旅程(四二五) 6 草庵の地點(四二五) 7 庵室の構造と規模(四二六) 8 建築の設計と聖人の多方面の性格(四二七) 9 「法華

取要抄」(四二八) 10 日本史と世界史とにわたれる深刻なる考察(四二九)

(6)身延生活の開始、飢饉……………四三〇

1 飢饉(四三〇) 2 法華經講語の開始と幕閣の制止(四三〇) 3 平靜なる生活にひそめる幾多の問題(四三〇)

第二章 「文永の入寇」と日本一國の恐怖

(7)「文永の役」——幕府の對外防備と聖人の豫言……………四三二

1 幕府の無防備と蒙古の來襲(四三二) 2 壹岐對馬の劫掠(四三三) 3 蹂躙せられたる太宰府(四三三) 4 蒙古に對する幕府の無知識(四三三) 5 第一の神風(四三四) 6 倭寇に就ての聖人の記述(四三四) 7 神武以來の國辱(四三五) 8 聖人の豫言と憂國の至誠に對する幕府の無關心(四三六) 9 鎌倉幕府の能力と日本史に於ける不思議なる政治時代(四三八) 10 國防に關する鎌倉幕府の大失態、史學家の偏見(四三九) 11 公卿の眼に映じたる幕府政道の親怠(四三〇) 12 蒙古と勝法罪(四三三) 13 蒙古の襲來に就ての聖人の内觀と外相(四三三) 14 「顯立正意抄」——日蓮聖人と上行菩薩(四三三) 15 上行菩薩本地顯發の本尊(四三三) 16 本化上行とは何ぞや(四三三) 17 本化上行の權能及力用(四三七)

(8)文永の役と一般思潮……………四三八

1 文永入寇に就て聖人に對する感情の融和(四三八) 2 文永十一年の概観(四四〇)

第三章 「撰時抄」の述作と惡國日本の滅亡

(9)日本の滅亡と聖者の慈念……………四四一

1 分發と解體(百四二) 2 北條氏の不合理の隆盛と権力の次第(百四三) 3 日本史の驚異(百四三) 4 日蓮聖人の亡國の呪咀(百四四) 5 呪咀の聲と愛護の聲(百四四) 6 當時の日本の實力(百四五) 7 國家をして大ならしむる力(百四六) 8 勝法の現前としての亡國(百四七) 9 滅亡の内因外縁と日本國の眞理的存在(百四八)

(10) 鎌倉及其他に於ける教團の情勢…………… 四五〇

1 建治元年(百五〇) 2 昔し見しあまのり(百五一) 3 池上氏の家庭に於ける信仰的波瀾(百五三) 4 橘樂寺良觀の活躍(百五三) 5 「兄弟抄」(百五五) 6 四條頼基と池上兵衛志との性格的興味(百五七) 7 千手萬手籠手ある父母(百五八) 8 阿佛房と國府入道の身延參詣(百五八)

(11) 西國の防備に就ての幕府の施設と「撰時抄」の述作…………… 四五九

1 戦後に爲されたる西國の防備(百五九) 2 蒙古使者の渡來(百五九) 3 「撰時抄」の述作(百六〇) 4 國難の憂慮に對する聖人と幕府との主客顛倒(百六三) 5 爲政者の素質の低下(百六六)

**第四章 身延生活と世間相**

(12) 身延の環境と生活にあらはれたる自然情調…………… 四六六

1 聖人の力用と本體(百六六) 2 自然生活(百六六) 3 自然に對する聖人の藝術的著眼(百六七) 4 聖人の性格の根柢としての謙讓と素樸(百六八) 5 聖人の宗教と自然現象(百六九) 6 身延入山後の聖人の文章にあらはれたる變化(百七〇) 7 「身延山御書」(百七一) 8 「給仕」の生活(百七二) 9 身延山頂の思親瞻望(百七三)

(13) 元使誅戮に對する聖人の批評——「科なき蒙古の使の頭」…………… 四七四

1 杜世忠以下の死(百七四) 2 幕府の潰滅(百七五) 3 邪見政道(百七六)

(14) 元使處分後の防備…………… 四七七

1 金澤實政の鎮西發遣(百七七)

(15) 無謀極まれる外征計畫…………… 四七八

1 血塗へる鎌倉幕府(百七八) 2 外征に就ての軍艦と戦費は如何(百七九) 3 外征に就ての敵情偵察は如何(百七九) 4 外征と石壁(百八〇) 5 外寇と内患——兩統迭立の事現(百八一)

(16) 日蓮主義に就ての一新機運…………… 四八二

1 教學上の問題としての本迹論(百八二) 2 北方の能化の難題(百八三) 3 僧強仁の難狀(百八四)

(17) 身延の維持と育英の規模…………… 四八七

1 維持と育英とに就ての諸大檀越の負擔(百八七) 2 學教の講材(百八八) 3 學風(百八八)

**第五章 發展と迫害との正比例**

(18) 期待されたる年…………… 四九〇

1 聖人の眞言破と眞言宗徒の蜂起(百九〇) 2 清澄と身延との關係(百九一) 3 「清澄寺大衆中」にあらはれたる清澄の形勢(百九二)

(19) 北條宗頼の長門發遣と鎌倉の燒亡…………… 四九三

目次

一七

1 「長門守護」(四九三) 2 將軍御所の焼失(四九三) 3 「王舎城事」(四九三)

(20) 駿河における教勢の振張 ..... 四九五  
 1 教勢の増大と教線擴張に就ての努力(四九五) 2 房州(四九五) 3 駿州(四九五) 4 伯耆房と實相寺(四九六) 5 瀧泉寺學僧の飯伏によりて起れる波瀾(四九七)

(21) 鎌倉の形勢 ..... 四九八  
 1 四條氏と主君江馬氏との問題發生(四九八) 2 現世安穩と難信難解との問題(四九九) 3 河野邊入道等の四人(四九九) 4 聖人の事業家的資質(五〇〇)

(22) 「報恩抄」 ..... 五〇〇  
 1 蒲師道善房の遷化(五〇〇) 2 「報恩抄」の撰述——宗教と道徳との融合——(五〇一) 3 適材適所と人物經濟(五〇四)

(23) 「長門國警固番役」と「蒙古人用心番」 ..... 五〇四  
 1 攻守兩様の案(五〇四) 2 外征計畫の好影響と計畫の露中消滅(五〇五) 3 長門の警固と博多の警備(五〇五)

(24) 四條頼基と主君江馬氏との問題 ..... 五〇五  
 1 四條頼基二代の忠誠と頼基の信仰によつて起れる感情的乖離(五〇六) 2 性格的指導と其効果(五〇八) 3 四條氏の信行的躍進(五〇九)

(25) 鎌倉雜件 ..... 五〇九  
 1 武士の遁世と遁世の止みがたき社會事情(五一〇) 2 金澤實時の死(五一〇) 3 將軍御所の焼失(五一二)

(26) 身延生活と芋の頌 ..... 五一二  
 1 聖人の生活に示されたる餘裕(五一二) 2 芋によつて美化されたる人生世界(五一三) 3 殘されたる諸問題(五一三)

### 第六章 「桑ヶ谷問答」とその關係交渉

(27) 龍象房の鎌倉下向 ..... 五一四  
 1 喰人肉の流行と龍象房(五一四) 2 「天台座主記」にあらはれたる龍象房(五一四) 3 眞言宗の邪法と龍象房(五一五) 4 飢饉と人肉(五一六) 5 龍象房金人の露顯(五一七)

(28) 「四信五品抄」と富木入道の信仰的境地 ..... 五一八  
 1 聖人傳中における四五の最重要なる人物(五一八) 2 聖人門下における富木入道の地位(五一八) 3 「四信五品抄」(五一九) 4 龍象房と極樂寺良觀との結托(五二八) 2 龍象房の桑ヶ谷の法席(五二九) 3 三位房日行の龍象房論破(五三〇)

(29) 迫害競ひ起る多難なる教勢 ..... 五三〇  
 1 四條氏の風采と下馬評(五三〇) 2 用心嚴重(五三二) 3 人間味と超人間味(五三三) 4 所領の轉換と隔離策(五三三) 5 四條氏以外の事件、一、在柄の殿原(五三三) 6 二、大學三郎(五三四) 7 三、波木井實長(五三四) 8 四、上野七郎次郎時光の問題と駿河の教勢の消長(五三四) 9 五、因幡房日永と「下山御消息」(五三七)

(30) 桑ヶ谷問答 ..... 五三八

(31) 江馬入道の下文と「頼基陳狀」 ..... 五三八  
 目次

1 四條氏の寵遇と離間者(五三〇) 2 下文の内容と身延への急使(五三〇) 3 「頼基陳狀」(五四〇) 4 陳狀善後(五四一) 5 選ばれたる三位房(五四一) 6 陳狀提出に就ての用意(五四二) 7 教團全體に及ぼんとする大瓦壞に就て(五四二) 8 四條氏の覺悟を促す(五四三) 9 陳狀の効果(五四三) 10 陳狀提出後の態度(五四三) 11 陳狀提出前の一變動(五四四) 12 所領没收(?) (五四四) 13 變動に就ての警戒——四條氏の性格における弱點指摘(五四五) 14 「頼基陳狀」と永久の問題(五四六) 15 江馬入道の所勞と識者の病氣——局面の展開(五四七) 16 龍象房倒る(五四七) 17 勝利に就ての四條氏の態度(五四八) 18 聖人と史上の英雄(五五〇)

(32) 多難なる教勢(二)..... 五五一  
1 「彌三郎殿御返事」(五五二) 2 富木入道と了性房信尊との問答(五五二) 3 三位房と大進阿闍梨(五五三) 4 了性房の屈服と下總における教勢(五五四) 5 池上太夫志勸當問題の再燃(五五四) 6 兵衛志の煩悶と聖人の警誡(五五五)

(33) 庵室の大破と修復..... 五五七  
1 身延の嚴寒と庵室の修復(五五七) 2 身延の經濟的獨立(五五八)

(34) 世態一斑..... 五五九  
1 朝命によれる敵國降伏の祈禱(五五九) 2 連署武藏守義政の出家と遁世並びに佐介時盛の死(五五九) 3 院御所の炎上(五五九) 4 疫病の流行——死人路に滿つ(五六〇) 5 同一時代における興味ある二者の對立(五六〇) 6 當時における日蓮主義の地理的分布(五六一) 7 社會階級的分布と教團に於ける諸勢力の集注(五六二)

### 第七章 身延生活の窮厄と冬營の苦

(35) 疫病の流行と聖人の所勞..... 五六三  
1 連年の飢饉と疫病の猖獗(五六三) 2 時代的特徴としての三災(五六三) 3 人心の矛盾せる二面——時世に輪をかけてる宗教家の墮落(五六四) 4 人爲の自然に及ぼせる影響自然の爲に及ぼせる影響(五六五) 5 聖人の下痢(五六五) 6 病氣の原因——佐渡の冬營と身延の嚴寒(五六五) 7 四條氏の治方(五六六)

(36) 理想實現の時たらんとす..... 五六六  
1 「諸人御返事」(五六六) 2 本懐満足(五六六) 3 日蓮主義の善政良治(五六六) 4 遺憾なる頓挫(五六八) 5 鎌倉宗教家等の反對運動(五六九)

(37) 身延生活の窮厄..... 五七〇  
1 三四ヶ月にわたれる雨(五七〇) 2 交通の杜絶(五七一) 3 鹽の不足(五七一) 4 食料としての人間の肉(五七二) 5 第二次本能(五七三) 6 人間の心と宇宙の心(五七三) 7 金石植物は人間の心の過去の一状態(五七四) 8 善惡不二邪正一如(五七五) 9 統觀と直觀(五七五)

(38) 「治病大小權實違目」..... 五七七  
1 身と心との病(五七七) 2 心の病の原因(五七七)

(39) 四條氏の問題其他..... 五七八  
1 阿佛房の三度目の登山と一の谷入道の死(五七八) 2 建長寺道隆の死(五七九) 3 道隆の舍利及び建長寺の状態(五七九) 4 四條氏所領を給せらる(五八〇) 5 四條頼基の身延詣で(五八二) 6 聖人の嗜好品(五八二) 7 大通房の死去と其死に表示されたる責罰(五八二)

- (40) 身延の嚴寒……………五八二
  - 1 聖人の病の平愈(五八二)
  - 2 聖人の病症——腎臓炎或は糖尿病(五八三)
  - 3 法に過ぎたる寒じと聖人の衰弱(五八三)
  - 4 防寒設備の乏少(五八四)
  - 5 身延學堂の盛大(五八五)
  - 6 鎌倉と身延との交通の頻繁(五八六)

### 第八章 加島法難の一大厄と其影響

- (41) 加島法難の興起並に迫害の規模……………五八八
  - 1 平ノ左近入道行替(五八八)
  - 2 刃傷と殺害(五八九)
  - 3 行替彌藤次等が誣妄の訴狀(五八九)
  - 4 熱原神四郎等二十餘人の召捕と聖人の教團に如へられたる一大厄難(五九〇)
  - 5 聖人の門下に對する激動(五九〇)
  - 6 「瀧泉寺申狀」と聖人の下知(五九二)
  - 7 恐怖時代(五九二)
  - 8 問註に就ての徹底せる措置(五九三)
  - 9 熱原神四郎等の懲刑(五九三)
  - 10 平ノ左衛門頼綱私の下知(六〇一)

- (42) 身延を中心としての教勢と世態一斑……………六〇一
  - 1 百人以上の學徒(六〇一)
  - 2 聖人の風邪と三位房日行の死去(六〇二)
  - 3 晩年の三位房(六〇二)
  - 4 連門無得道の論議(六〇三)
  - 5 「日蓮が如くに」(成佛に就ての法則)(六〇三)
  - 6 阿佛房の死(六〇四)
  - 7 祖元の來朝(六〇四)
  - 8 大造阿闍梨の空房(六〇四)

- (43) 加島法難の後事並びに影響……………六〇六
  - 1 加島法難の餘波(六〇六)

- (44) 内外の形勢……………六〇七
  - 1 鎌倉の焼亡(六〇七)
  - 2 八幡宮焼失に就ての二箇の觀察點(六〇八)
  - 3 日蓮主義者によつて持たれたる正義の命脈(六〇八)

4 神天上によりて法華經の行者に加はれる使命と責任との重加(六〇九)

5 元寇に就ての幕府の警告(六一〇)

### 第九章 蒙古の來寇と日蓮聖人内觀の日本國

- (45) 國難と朝野、聖人護國の大力用……………六一一
  - 1 元の征日本軍の殺到(六一一)
  - 2 眞言宗等の祈(六一二)
  - 3 天皇上帝身を以て國難に殉ぜんとしたまふ(六一三)
  - 4 聖人の國難と「護國大本尊」(六一三)
  - 5 聖人の大直覺力(六一四)

- (46) 本門戒壇の調整發表付聖人の示病……………六一七
  - 1 日蓮聖人の宗教に於ける思想の完成及び終局としての本門戒壇説(六一七)
  - 2 「三大秘法抄」の撰述——抄の中心(六一八)
  - 3 周備したる本尊、題目、戒壇(六一九)
  - 4 「三大秘法抄」と「護國大本尊」(六一〇)
  - 5 「小蒙古御書」(六一〇)
  - 6 北條時光の叛(六一二)
  - 7 前連署義政の死と極樂寺系の凋落(六一三)

- (47) 聖人の示病と身延生活の變動——身延の造營……………六二二
  - 1 四十九年間の聖人の勞苦(六二二)
  - 2 「下痢」「風邪」「やせやまひ」(六二二)
  - 3 聖人の病苦と食欲不進(六二三)
  - 4 「病と申、歳と申」(六二三)
  - 5 佛臨終前の示病(六二四)
  - 6 病の中になされたる事業(六二五)
  - 7 身延の造營(六二五)
  - 8 造營の規模(六二六)
  - 9 大師講と延年の舞(六二七)
  - 10 生れてはじめての寒さ(六二七)
  - 11 病める聖者が山中の冬營と酒(六二八)

### 第十章 聖人の示病と事業の終局

- (48) 聖者の終焉……………六三〇



1 事業の完成と聖人の一生の終結(六三〇) 2 死の前の静けさ(六三二) 3 聖人が山を出する時、釋尊の先蹤(六三二) 4 九月八日身延を出づ(六三三) 5 聖人と富士山、身延の出入における聖人の富士一周(六三三) 6 栗鹿毛の馬(六三三) 7 「立正安國論」の講談(六三五) 8 「立正安國論」の注釋、敷衍、實行としての聖人の一生(六三六) 9 六上足の定めと御遺物配分(六三六) 10 十三日辰の時大地震動して滅に入る(六三六) 11 日本國家の二大危機と聖人の出誕入滅(六三六)

(49) 葬送次第……………六三九  
 1 十四日茶毘、遺骸を身延に移すに就ての憂慮(六三九) 2 二十一日池上を出で、二十五日身延に入る(六四〇) 3 十二月二日葬送(六四〇) 4 墓處の選定(六四一) 5 身延輪香の制(六四二)

(50) 日蓮聖人滅後の宗勢……………六四三  
 1 聖人の創造に對する組織と擴張(六四三) 2 日蓮聖人を中心とする日本史(六四三) 3 諸弟子の事業(六四三) 4 日期の青英(六四四) 5 日興の戒壇準備としての富士經營(六四四) 6 偉大なる世界宣傳の先驅者(六四四) 7 日向及日頂其他の諸弟子(六四五) 8 日像の帝都に於ける宣傳(六四五) 9 日蓮聖人滅後百五十年頃迄の宗勢と人物輩出(六四五) 10 日蓮主義の一特色(六四六) 11 足利時代の政治状態(六四六) 12 天文法難(六四七) 13 戰國の意義と價值(六四七) 14 権力と日蓮主義との反比例(六四七) 15 徹底せる徳川氏の迫害法(六四八) 16 日蓮聖人の大と鎌倉幕府の小、徳川幕府の大と日蓮主義者の小(六四八) 17 退嬰的氣風の馴致と明治維新の展開(六四八) 18 文化の進展に於ける時機(六四八) 19 時勢より七百年を先じたる日蓮聖人の思想事業(六五〇) 20 適當なる試練、徳川氏の鎖國は最良の方法なり(六五〇) 21 明治の新機運が生みし日蓮主義の正しき意識(六五二) 22 分裂と次第融合(六五二) 23 世界解決の問題(六五二) 24 國際聯盟に根柢を與へよ(六五三) 25 眞實の平和は日本と日蓮聖人の宗教とにあり(六五三)

— 目次 終 —

挿圖目次

一、聖影の扉「太陽と富士」(繪畫、凸版) 小柳 正作(巻首)

二、聖 影 (繪畫、コロタイプ) 藤原親安作(同)

三、小湊「妙の浦」(寫眞、コロタイプ)……………六

四、日蓮崎「まないた岩」(寫眞、コロタイプ)……………二六

五、「觀心本尊抄」(筆蹟、コロタイプ)……………三四三

表紙の中央には、轉輪聖王世界統一の表章たる輪寶を表示し、これによつて、世界における日蓮聖人の地位を象徴せり、「太陽と富士」とともに、畫家小柳正氏の作にかゝる。尙此書の裝釘に就ては、特に同氏を煩はせし事多し、謹で氏の好意を謝す。(著者)





第一編 鎌倉中心の御代

# 日蓮聖人の「法華經色讀」史

法華經色讀といふ事は、法華經を「身に讀む」といふ事である、法華經を身に讀むといふ事は、法華經を體達實行する事である、日蓮聖人の一生は、法華經の體達實行を措いて外に何もない、即ち「法華經の行者」たる日蓮聖人の生涯を叙して、題するに、「日蓮聖人の法華經色讀史」とする所以である。

蟹澤藍川撰



第一章「立正安國論」已前（貞應元年より建長五年頃迄）

日蓮聖人の出現と時勢

源頼朝が鎌倉に覇をとなくて已來、政權が武門に飯したことを、後鳥羽上皇は殊に御殘念に思召して遂に討幕の御計畫を御立てあそばされたのであつたが、時勢の非なるが爲めか、叡念を満足し奉ることができなかつて事はやぶれ。法皇は隱岐に、順徳上皇は佐渡に御遷幸の止むなきに至つて、御孝順の土御門上皇は叡慮やすからずわれとおぼしめし立た

日蓮聖人の出現と時勢

<sup>1</sup>「承久の亂」と國體の危機

れて土佐へ御遷幸あらせられた。御運いかに拙くおはしましたとはいへ、九五の寶位をふませられた御身が、源家の家從たる一陪臣の手によつて孤島に流寓の身とならせたまふたといふ事は、此時、建國既に二千年に垂んとすれども、日本に曾て事實として一度もなかつたばかりか思想上に思ふといふ事さへ不可能の事であつて、また寶祚のさかへまさんかぎり絶對にありえない事であるべきのが、はからず邊土の一武士によつて敢行された。剩へ同時に天皇の廢立が行はれた。此事は實に國體の危機をつぐるものであつて、若し春秋<sup>しゆんじゆ</sup>的筆法<sup>ひつぽう</sup>を以てすれば、日本はまさしく此時に於て一たび滅亡をつげたとはいえる。

然るに朝野一人として是を怪む者がない。これ程の稀代<sup>きだい</sup>な出來事<sup>できごと</sup>、恐くは空前絶後の出來事に對して、一人のこれをあやしんで、國家の爲めに考慮したものがないといふのは抑何故であるか。事柄は大きい、問題は簡單である、けだし日本國家といふ意識が明確を缺いたが爲めであつて、國體に對して正しい自覺がない結果である。國體の尊貴も寶位の尊嚴も、要するに名ばかりであつて、其名の背後にどれほどの實質があり、其精神にいかばかりの深遠なる内容があるかといふ事を知らない爲めに此國體の大危機に類しても、起つてこれを正そうとするはもとより、あやしむ者さへないのである。若し此思想を其儘に

<sup>2</sup>「承久亂」に對する國民の態度

推しひろめていけば、此次に来るべきものは事實上の瓦壞である。若しこれが來たら、それが日本といふ國の最期の時である。それ程の危険状態であるから、政治家、宗教家、學者等も澤山居るのに、一人もこれを氣にしなかつたとはまことに奇蹟の様であるが、是れは獨り其時ばかりではない、現代でも北條氏とやはり同じ氣分がかなりあるから、其點に就ては同じかも知れないが、一度び日本國體の價値を知るに至つたものから見れば、承久亂前後の日本は何とも明状すべからざる怖畏の状態に臨んだ時代であつた。

併し人に生命があれば國家にも生命がある、宇宙にも生命がある。不幸にして人が、與へられただけの小さな生命の範圍で、その第二次本能<sup>わづはひ</sup>に累<sup>たまは</sup>されて、根本的性情を一時忘失して其結果弊害が起つたとするも、宇宙といふ、若しくは國家といふ大なる生存體は人の氣付かないのを放任せず、必ず自衛の手段をとるのが眞理である。人が病めば、自ら其病をなをそうと努力する心があり、餘程物ぐさい人間が醫者にゆくことを溢つたとしても、人體には、ある程度までこれに就て防止するだけのはたらきが自然をなはつて居る。しかも其防止たるや積極的防止だから、順調にいけば、大抵の疾患は必ずしも醫師をわづらはさずともなをる。國家若しくは世界は、かゝる際に聖人賢人、若しくは英雄豪傑をだして、

<sup>3</sup>國家生命の自然救濟

必ず自己の生命の進展に就て廓清をはかるのである。東西古今の歴史に就て尤も傑出した聖人賢人、英雄豪傑等の事業を検すると其事蹟がこの宇宙行動の一進一退に重大な意義を有する事が分るのである。簡易な例として支那における一時代一時代の元首、日本における一時代一時代の主動者などに就て見れば、よく分るのである。神武天皇の開國の御趣意が、崇神天皇によつて文教の上に具體化され、其基礎が聖德太子に至つてあの透徹せる國體眼からの世界的統融となつて、日本固有の思想の上に、佛教の磁味、儒教の磁味が加はつて、かゝる太古にあつてすでに現代的文化傾向に接觸し得る様な急進をみた事も、やはり時代に生命のある運動であつたが、其大意匠を解し得なかつた蘇我氏の專横が却て利器となつてまた「大化の改新」が行はれ、其中心が天智天皇で有力なる助手が藤原鎌足であつた。この鎌足といふ人物の崛起が、はからずも「此世をば我世とぞおもふ望月のかけたる事もなしと思へば」の藤原氏を出現せしめた結果として、爛熟した平安朝の文化はすなはち藤原氏中心の文化であつた。その藤原氏の横暴が國家的生命の堪ふ可らざる所となつた所から、それが武家の反感となつてあらはれこれに先驅をしたのが平清盛であつたが、清盛はその武家的主張を惜しや抛擲して、たゞ公卿の模倣を武士がやつたに過ぎなかつたか

ら、弊害百出の結果、源頼朝が出て初めて「武門政治」といふものが日本の歴史に新生面を開いた。かういふ意味に於て、列聖の事は恐れ多いからしばらくいはないとするも、この鎌足、頼朝の如きが、つまり必要によつて押し出された英雄である。しかも藤氏の場合と源氏の場合の如きは、ある一大變革を要する時とはいへ、日本の國家的生命を永久に絶滅するといふ様な非常な場合でない。然るに承久亂といふものは此大頓挫によつて、その結果として日本といふ國が活きるか死ぬかの境ひ目であるのだから、たゞ歴史的に見ても、鎌足以上頼朝已上の大人物があらはれなければならぬ、まして國體的需要においては鎌足頼朝に十倍二十倍した大人物が出なければならぬ。其國家大艱難の際にあつてこれを救ふためにあらはれた人が日蓮聖人である。これは予が日蓮聖人を崇拜するから我佛尊として獨斷するのではなく、此時代に生存した人の中の偉人といはれ英雄といはれる人に、この時世に適合して國家を救済し得るといふ理想的人格が、聖人以外に於ては全く求める事が出来ないからである。

例へば聖人出現の前後における政治家に就て見るも、京都における公經道家の輩はいふにも足らず、義時泰時はたとひ良政治家たりとするも當の攪亂者である、よしんば攪亂者

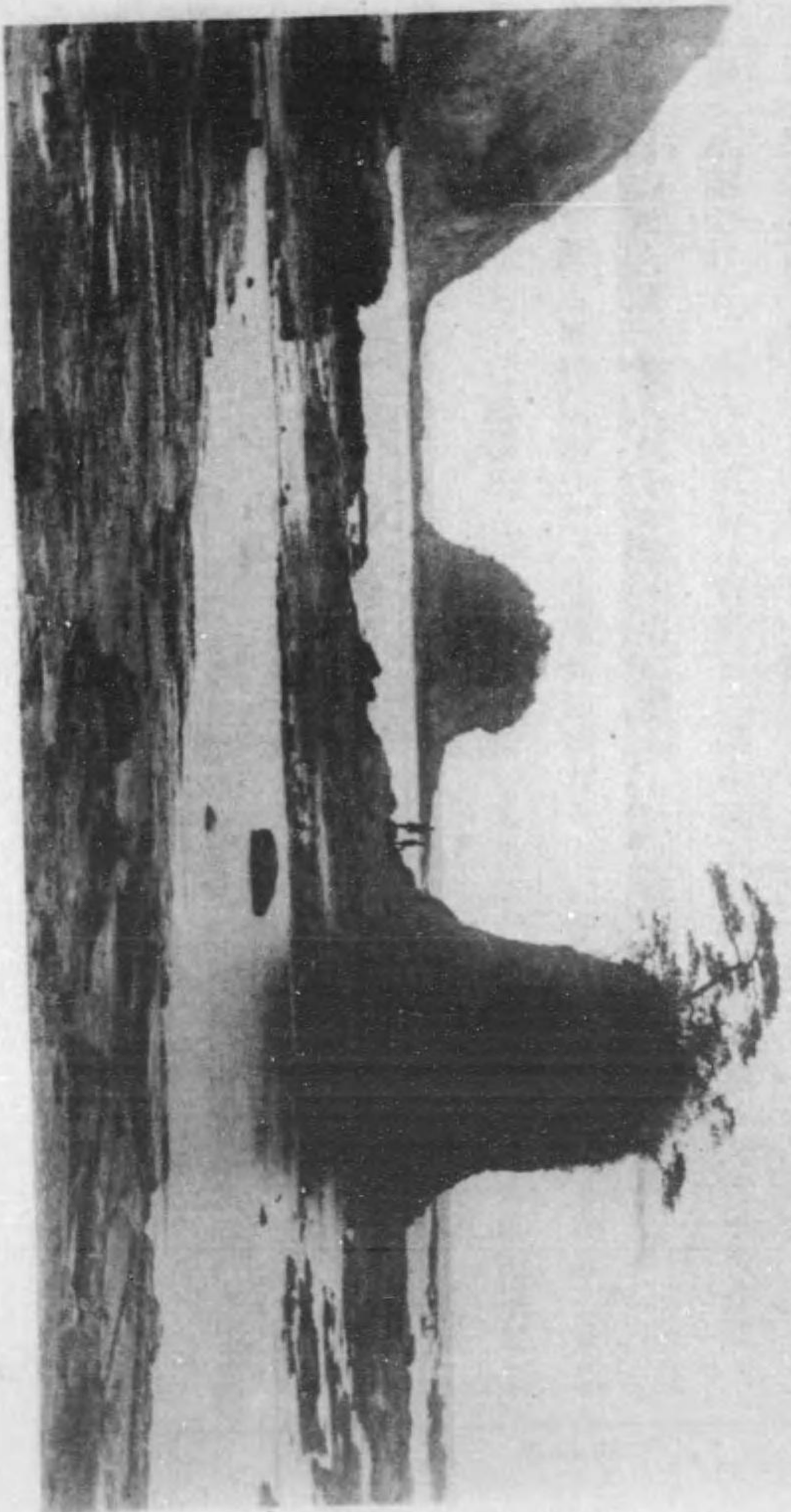
でないにしても、國難救済の人格とするべく餘りに規模が小さい。宗教家には聖人の出現に先つて近くは法然あり、ついで親鸞がある。此二人の大宗教家は、教義に於ても人格に於てもともに世界史の上に大きな光りを放つものではあるが、此人々の提唱は要するに人間だけの問題であつて毫も國家に觸れてゐない。しかも此二人を除いては、個人としては相當にゑらい坊さんがないでもないが、たとへば一遍、叡尊、良忠、良觀などがあるが、専門史以外にはあまり光輝を放ち得ないばかりだから論ずる價值がない。日蓮聖人は已上の人々とは全く其選をことにし、眞に國體救済國體解決の爲に出現する必要あつて出現し、そして其必要を十二分に果された聖者である。

但し、これによつて世界的な日蓮聖人を國家的に小くしたと考へてはならぬ、また日本國體に倣するものとしてはならぬ。時と場合では釋迦牟尼佛をさへなを小しとする大權威ある聖人が、この小さな日本國に倣する必要は毫もない。たゞ日本建國の主張にあらはれた尊貴な國體が、聖人の宗教組織に最重要なものであるといふ事が、日本國をして彌大ならしむると共に、聖人の主張をして彌大ならしむる所以である。これでこそ聖人によつて唱導された永遠の平和は、ただ一種の理想でなく實際的のものとなるのである。

## 日蓮聖人降誕の靈蹟

### 小湊「妙の浦」

(安房國小湊の海濱なり、また「蓮華ヶ澤」ともいふ)



小菴「彼」の「前」  
日蓮聖人剎土の靈巖

(安徳園小菴の霊巖あり。まづ「靈巖」を「霊巖」としよ)

(2) 生誕と家系と幼時の環境

聖人の生誕は、大正元年を去る六百九十一年前、後堀河天皇の御宇貞應元年二月十六日である。生誕の當時はまだ貞應と改元されてなかつたから承久四年、すなはち承久亂の翌年で、武士等が禁闕を冒してより八ヶ月を経て、本島中央部の東端に位する安房の國長狭の郡小湊で生誕された。聖人の父母は貫名重忠同梅菊といひ、もと武士であつたがこゝに流謫の身となつた人で、聖人はその第三男に當るといふ傳へである。

聖人の家系に就ては古來二説あつて、藤原氏の出だともいひ、聖武天皇から出た三國氏だともいふ、二説のうちでは藤原氏といふ説は後世のもので、是れは親鸞上人の家系などに對抗する必要上考へられたかとも思はれるから今はとらない。また其他不確實な系圖などをたどる必要がないから、遠祖は三國氏、父は貫名重忠、母は梅菊といふほど確な説に隨つて聖人の家系を語れば足りる。聖人の家門に就ては宗門内では古來武門の出といひ、世間側では事實上の賤民ではないかとも疑ふ。事實が賤民であらうと何であらうと、日蓮聖人が世界の大宗教家であるといふ事は動かさない事實だから構はない様なものだが、諸種の材料を綜合して考へると、實際はやはり賤民でないといふ結論に到着しなければなら

<sup>1</sup> 聖人出誕の時、處、父母、

<sup>2</sup> 聖人の家系に就ての二説と家門の尊卑



ない事になるのはむしろ遺憾な位である。これ等の關係は、宗門の記傳を離れて日蓮聖人の遺文にあらはれた點では房州清澄の領家との關係、光日房等の關係などから觀て、どうしても賤民とは思へない點がおほい。

聖人の出生に就ては種々なる奇瑞がつたへられて居る。第一は聖人出誕前の父母の夢想で、どちらも日輪に關してゐる、結果として聖人の最初の名は善日麻呂とされた。第二は出誕に就ての奇瑞で、これに海中に蓮華が咲出でたといふのと、庭中に清水が湧き出たといふのと二つある。かういふ實蹟に就ては現今の様な時世では一概に荒唐無稽として斥けられるが、或は或る事蹟が轉じてかういふ形式で残されたか、それは容易に斷じ難い。また聖人出誕の時、異香室に満ち外に溢れたといふ傳えがある。要するに是等は、聖人の生誕に關係した人々が、聖人の出誕に就て、何かしら精神の上にある暗示をうけて、生れた時の直覺たとへば呱呱の聲とか、巍々たる風貌とかに就てうけた直覺をいろいろなものをかりて象徴したものであるかも知れない。

聖人が後年自ら出誕に就て語られたのは、誕生處たる房州に就てゝあつて、それは當時天照大神の社が房州にあつて、或は伊勢の宗廟とならび稱されたかと思ふ程の規模であり、

八

若し傳説を離れて聖人の性格、思想等に就て研究すれば、高貴の傳説による武門の出身となつてはならない。  
3 出生の奇瑞に就ての傳説  
「誕生水」「蓮華ケ淵」等の名が、今小湊に残つてゐる。

4 出誕の國に就ての聖人の自記

精神的には時として伊勢よりも重く感ぜられた程であつた事について、こゝへ誕生された事を聖人は仔細ありと考へられた。後世のものが聖人の出誕に就て一種神祕の感を禁じ得ないのは聖人の誕生された日が、釋尊の入滅の日に續いて居る事であつて、天竺の佛法かしこに没して、こゝに生ずるといふ因縁觀の上にある暗示を與ふるものであつた。

聖人の父母にあつては、心證に直接の暗示があり、これ等に緣して村人の間にも種々なる話題があつて聖人の成育はすでに十分なる期待のうちにあつた。さりとして襁褓の間にあつた聖人に就ては何等の傳へもない、また有り様わけもない。隨て聖人が十二歳で清澄へのぼられるまでは、何等具體的な傳へはない。たゞ穎悟であつたといふこと、是れはもういふまでもないことであつたらう、その外には聖人の幼時として語るものは何物もない。たゞ我等が問題とするのは、聖人それ自身の行動よりは聖人の幼時の環境が、どれ程聖人の性格なり事業なりの上に影響したかに就て研究することが必要である。予は此傳を述作するまでに、不幸にして房州を見ることが出来なかつたから、こゝには房州の山河に接しての直觀を語る事が出来ないのを遺憾とするが、多くの房州人に接觸して房州人の通有の性格に就てその自然の及ぼしたる感化を知り、安房が房總半島の突端にあるといふことを

5 釋尊入滅は二月十五日  
聖人の幼時と環境

知り、小湊が房州の東海岸にあるといふ事實をさへ知り得れば、聖人幼時の環境がほほいかなるものであつて、それが幼時の日蓮聖人に對していかなる興味と爲り研究となりして性格の中に流れ入つたかは、見當がつくのである。

今まで予の接した房州人はことごとく快濶であつた。就中房州人の典型かとも解せらるる古房州人（これは予が勝手に付した名古代房州人の血をうけたかと思はれる人）ほどの快濶の度が強い、是は古代日本民族通有の快濶性にもよる事は勿論であるがまた房州の自然がとくに明るい感じを人間の上に與へるからではないかと思ふ。房州を見た人の話によると房州の海の色は非常に美しいといふ事である、海の色のは即ち空の色の美しいので。空の色の美しいといふ事に空の晴々として居る事が分る。晴れた空と曇つた空とが人間に與へる感じの相違に非常なものである。此點からは日本海岸と太平洋岸との人間の氣風の相違は全く空の關係だともいひ得るのである。しかも單に空だけの問題ならば、曇つたといふこと、晴れたといふことでは、たゞ白群青の色と鼠色との相違にすぎないが、天と地との關係から見ると、晴れと曇りとは日光が露出するとしないとの大問題を惹起するから、經濟上にも衛生上にも交通上にも心靈上にも非常なる利と不利とを現出して、一國

<sup>6</sup> 房州人と天空海淵なる房州人の境土

の文化の上にも影響をもつ、此意味に於て房州といふ土地は天然の恩恵を頗る多量に有したところである。世界で空の一番美しいのは伊太利であるそうだが、日本の空で伊太利に比すべきものは房州の空であるといふ。空が澄んで碧瑠璃の色にかやく、陽光が地上に溢れて萬物が恩澤に浴する。此中にあつて、海に親しみ、空に親しみ、結局日をなつかしむ意は、どうしても快濶公明な人間を生ぜずには居ないのである。日蓮聖人生誕の地はあだかも房州の東海岸で、直ちに日に接觸し得る、また小湊の背後房總の間には大した高山もないから、日光に浴する時間は比較的長いだらうと思ふ。日に對する一日の時間が多く、日に對する一年の時間が多しといふ事は、人生無二の幸福である。

聖人の父重忠が、直接漁撈に従事されたかどうかは疑問であるが、海畔の兒童で海に親まないものは殆どない、海に親んで其感化を受けないといふ事は殆どあり得ない。いかなる無智な者でもある程度の感化は必ず受ける、山野の農夫と、海畔の漁夫との性格的差違はくだくだしいふまでもあるまい。天才は皆鋭敏な感受性をもつて居る、此事は後に聖人の立志に就てもしるすが、聖人は非常に早熟な天才であつた。この早熟の天才が溢るゝ如き英氣をもつて接觸した自然は、先づ受者の位地にある聖人に對して親しみをもつ事を教

<sup>7</sup> 海洋の感化と天才の自然觀

へ、次で自然が有する祕奥なる境地を聖人に示すに躊躇しなかつたであらう。若し仔細に注意して観察したなら、波がうつといふ一事の中にも、幾十通りのうち方があるかも知れない。海に親む事によつてさういふ海の微細が知れる、何物にも突入しようとする子供の心は、聖人の如き大天才に於てはまた別してはげしかつたらう。聖人の宗教の特殊なる發展には、必らず特殊なる自然が背景となつてその思想と不離の關係を示して居る、況んや幼時の環境としての房州小湊の自然が、聖人の胸中に影をなげすには居ない。十界互具、諸法實相、草木成佛、そいういふ思想には皆聖人と接觸した自然がその中にひそんで居る事を考へなければならぬ。聖人の弟子に肥後阿闍梨日像といふ人がある、少年の時に聖人の遺命をうけて京都に布教して日蓮聖人の宗教を遂に天聽に達した偉人であるが、此人が京都へ出發前、その大事業の貫徹を祝福する爲めに、日蓮聖人の奮闘史に印せられた靈地をすべて巡つた。而して聖人艱難のあとと、思想光發のあととを、残された事蹟と、尋ねあつた自然との對照によつて、心裡に刻みつけたといふ美はしい事蹟がある。其旅行に出發の前、日像は寒中百日を期して鎌倉の由井ヶ濱に浴して自分の忍耐力を試験して見た。聖人の遺志をつぐといふ大志の前には此苦みも何等の影響なく、日を重ねて信仰體驗の悦こ

びに、満願の日は海水がまるで湯の様に感ぜられたといふことであるが、其時日像は指をもつて波間に南無妙法蓮華經の七字をゑがいた。それに念力がこもつた爲めにしばらくは其字の影がさえず、しかも波の動搖につれて字體に面白い變化が生じた。日像の曼陀羅はその變化のありさまを記しとどめて一種の筆法を残したのだと傳へられて居るが、なる程像師の題目の書風は他と全然別で、いかさま波の動搖をうつした様な形がある。しかし、波にかいたのがゆれて面白い字になつたから、紀念の爲めに其書風を残したといふよりは、この書體と波との關係にはもうすこし面白い交渉がありさうに思えるので、それは波といふ自然の一表現に就ての像師の積極的な自得である。つまり波の力と波のすがたといふものによつてあらはれた大宇宙の威力と微妙なる形状とに就て、像師はある悟道をして天地の機微をとらえ得た。そのとらえ得た機微を形の上に表現した。この像師の直觀力、そうしてそれを直ちに體得して、天地の威力を信仰の上の體驗に引あて、それを藝術的に表現し得た像師が人格の大きさは、日蓮聖人の門下として實にはづかしくない。これは聖人直接の例ではないが、弟子における此傾向は、即ち師から出發したものである。その師の出發點は、恐らく故郷安房の自然であつたらう。聖人の修學は十二の歳にはじまつて、三十

二歳まで續いて居るが、それは聖人の人格といふよりはむしろ事業に就ての研究修學といふべきで、聖人の人格の大體は、「天照大神のすみそめたまひし國」かつ「日本國の中心」なる房州の自然と歴史とによつて、立派に準備されて居たのである。

(イ)領家といふのは領主といふのと同じ意味である。この聖人と關係のある領主をこゝには清澄の領家としたが、清澄ばかりの領家であるか、或は小湊をも領した領家であるかはよく分らない。この領家と聖人との關係は後段に説くこととほとんど親族的である。ことに聖人の出家以前から、領家は聖人の家と關係して居たのであるが、氏族、門閥等のやかましい其時代に、賤民と大名との交通があり得るとは思はれないから。隨て聖人の門地を賤民としようにも出来ないこととなる。「光日房抄」には、光日房の子息の彌四郎といふ由緒ある武士と聖人とに就て、彌四郎の口上として、聖人に對して「なきなきより御心ざしおもひまいらせて候上、母にて候人もをろかならず申、なれなれしき申事にて候へどもひそかに申すべき事候」とて、これまた武士が賤民に對する口上として餘りに親しくかつ懇勵を極めて居る。かういふ例は、あげ様と思へばいくらでもあげ得られる。  
(ロ)房州にあつた神宮の事に就ては、聖人は「新尼御前御返事」の中にかういはれた。「安房國東條郷邊國なれども日本國の中心のことし、其故は天照太神を垂れ給へり、昔は伊勢國に跡を垂させ給てありしかども、國王は八幡加茂等を御歸依深ありて、天照太神の御歸依淺かりしかば、太神贖りおぼせし時、源右將軍と申せし人御起語文をもつてあなか(會加)の小太夫に仰つて頂戴し伊勢の外宮にしのびをさめしかば、太神の御心に叶はせ給けるかの故に日本を手ににぎる將軍となり給ぬ、此人東條郡を天照太神の御栖と定めさせ給、されば、太神は伊勢の國にはをばしませず、安房國東條の郡にすませ給ふ、安房の神宮が當時に重んぜられた事は是で分る。同時に、日蓮聖人の頼朝親の一面もよく分る。そればかりでない、國王は八幡加茂等を御歸依深ありて、天照太神の御歸依淺かりしかば」といふ事は、聖人の國體觀の深遠なることを示すと共に、其當時の國體的病弊を指摘された尤も適切な教示である。

(3) 聖人の立志と立志の動機及び基礎

聖人の發心に就ては、發心の時機は概して聖人出家後に語らるべき問題になつて居る。むしろそれが當然の事であるかも知れない、しかし予は聖人立志の出發點に就て考へて見て、聖人の立志をば、十二歳出家前とする事が寧ろより多く實際であると思ふのである。此事は現代日蓮主義の權威である山川智應氏も同じ意見をつとに有して居られたかと思ふ。そうして何が聖人の立志の動機であるかといへば、まさしく當時の時勢、歴史的に見た日本の現状であつたらうと思ふのである。聖人が光日房に與へられた書に、  
予はかつしろしめされて候がごとく、幼少の時より學文に心をかけし上、大虚空藏菩薩の御寶前に願を立て、日本第一の智者となし給へ、十二の年より此願を立て、其所願に仔細あり今くはしくのべがたし。  
とあつて、是れによつて見れば、聖人の出家の目的といふものが從來の諸傳とまるで違つて、すでにある問題に就ての解決を求めためであつたといふ事がわかる。幼少から學問に心をかけし上、なを出家する必要があつたので出家したが、其志望は容易な事では解決されさうもない大問題であつたから、佛神の威靈をかるべく、清澄山の本尊であり、あ

1 出家以前に於ける聖人幼時の發心

だかもまた佛教における智慧の表現なる虚空藏菩薩に祈つて、「日本第一の智者となし給へ」と智力の透徹を願せられたのは、其志すところが非常重大な事件であつたからでそれは、「其所願に仔細あり」の一語これを證して餘りある、と同時に「十二のとしより此願をたつ」とあるのだから、「幼少の時より學文に心をかけし上」といふのと對照して、立志が十二歳以前であることは確實である。而して立志の動機となり根柢となつたものは何かといふと、聖人にとつて終生の問題であつた「承久亂に就ての國體的疑念」であつたといふに躊躇しない。即ち「神國王御書」に承久亂の時の眞言宗の祈禱の事を詳叙して、

承久の合戦の御時は……日本國にわたれる所の大法祕法殘なく行なわれ給ふ、  
 佛法の御力と申、王法の威力と申、彼は國主也三界の諸王守護し給、此は日本國の民  
 也わづかに小鬼ぞまほりけん代代の所従重重の家人也、譬へば王威を用て民をせめば  
 鷹の雉をとり、猫の鼠を食、蛇の蛙をのみ、師子王の兔を殺すにてあるべけれ、……  
 いかにとして一年一月も延ずしてわすか二日一日にはほろび給ひけるやらん、……日  
 蓮此事を疑しゆへに幼少の頃より隨分に顯密二道並に諸宗の一切の經を或は人になら  
 い或は我と開見し、勘へ見て候へば故の候けるぞ。

2  
 聖人發心の動機と  
 「承久の亂」

とあつて、疑問の根本はすなはち國體解決の出發點であつた事は疑ふべくもない、しかし幼少の時の事だから勿論かう緻密には考へられはしなかつたらう。必ず簡單であつたに違ひない、しかし簡單であるだけに其疑は却て強いものであつた事も疑へまい、「天照大神のすみ初めたまふ國」といふ觀念に養成された聖人には天照大神の「葦原中國」の詔勅は深刻に印象されて居たらう。天壤無窮の寶祚を繼承し、皇統連綿としてその寶座を保持したまふ至尊が、なぜ其臣下の手によつて左右されたか。十か十一の幼い聖人が當時における尤も新しい而してしかく驚異に値ひした大事件にぶつかつて、その小さい心を千々にくだいたといふ事は、日本人たるもの大に感謝しなければならぬところである。しかも聖人が當時にうけられたほどの教育ではこの問題に對してほとんど何等の批評をもなし得ない程度のものであつたと見える。幼い聖人は進んでこれを解決しようと志ざされたのである。これが出家の動機である。

ある人々はこれに對して聖人立志の年齢があまりに幼すぎるといふかも知れない。そんな幼年時代にそんな發心があり得るかといふかも知れない。なる程凡人ならあり得ないかも知れない。それでも絶無といふ事は出來まい。況や聖人は聖者である。天才である。し

聖人の立志と立志の動機及び基礎

3  
 早熟の天才

かも古今獨歩の<sup>（一）</sup>大天才である。凡人が五百年かゝつても千年かゝつてもやり得ない事を六十年でやりおほせた天才である。凡人の千年と聖人の六十一年とを比較すれば、凡人の百歳の時がすなはち聖人の六歳の時にあたる。聖人の幼少と我等の幼少とを比較しようといふ事は全然間違つて居る。しかし我々凡夫の中でも、人によつては十歳十二歳ですでに男女間の情事を経験する早熟者を見る事はそう大してめづらしい事ではない。現代にあつてもそうだ、まして往古は皆早熟であつた。爲朝が九州を平定しようとしたのは十三であるではないか。予は聖人の立志をかりに十歳としても、毫も不都合はないと思ふ。またそういふ幼少からの志願が六十一年を貫いて、その同一精神が滅後六百年後の今日は勿論、未來萬年にも及んで、はじめて聖人が世界人類を根本的に救ひ得る大人格たることを證するものであると思ふ。

聖人はかゝる志望のもとに雄々しくも父を説き母を説いて出家の大事を決せられた。随て予は聖人の清澄入山をば、從來の諸傳の様に、先祖の追福身の得脱、或は親の信心、回向功德の考へなどといふ説はとらないのである。まことに當時にあつて聖人の此希望を満すには佛道に入るより外仕方がなかつたのである。かくして十二歳で聖人は同じ郡の清澄

出家<sup>4</sup>

寺に入つて道善房に仕へた。

清澄寺は千光山清澄寺といつて、天台宗に屬してゐたが、専ら慈覺大師の眞言の流れを汲んで、所謂台密の寺であつた。此寺の開基は甚ふるく、不思議律師といふ人によつて創められて、その當時は勿論天台でも眞言でもなかつたのを、慈覺大師が中興して已來その法流を汲むことになつたのである。定めて由緒の名刹として房總地方に重きをなしたものであつたらう。此寺に道善房といふ人が居て、聖人はその人に就て修學されたのである。しかし實際に聖人に佛敎の初歩を教へた人は、道善房よりは、むしろ淨顯房義淨房などといふ人の方が多く事にあつたかと思はれる。聖人がこの二人に對して、「各々、日蓮が幼少の時の師匠にておはす」といはれたのは、これをいふのであらう。宗史の所傳によれば、道善房は清澄の主職で、淨顯房義淨房等は聖人と共に道善房の弟子だとされてゐる。道善房が果して一山の主職であつたか否かはまだ研究の餘地がある様に思ふ。また淨顯義淨も果して道善の弟子であつたかどうかは疑問である。是れは疑に足るといふほど有力な疑問ではないが、道善房が一山の主職であるか否かといふに就ては、「圓智房と實成房とが此人の上と下とに居て」といふ聖人の記載に幾分研究の餘地あることを感じ、淨顯義淨に

千光山清澄寺と聖  
人在山の時の師友<sup>5</sup>宗史とは宗門史  
といふことにて  
日蓮宗門の歴史  
をいふ

就ては、道善房との間に、何等文字上の聯鎖がないといふことを餘り有力ではないが疑問とする、尤もそういふと聖人の清澄時代の房號是性房と師匠の房號道善房とも何の關係もないといふ事になるが、「圓智房(師)——觀智房(弟子)」、「道義房(兄)——道善房(弟)」、「淨圓房——淨顯房——義淨房。」などの關係からいふと、一應考へて見る必要もあらうかと思ふ。或は必要といふほどの事ではないかも知れないが、そういふ疑問の起つた場合がないとも限らないから付けて記す。

當時の清澄寺がどういふ位地にあつた寺であるかは不明である。由緒としては重きをなした様だが學問の上からは大してさかなな寺ではなかつたらしい。當時どういふ人々が居たかといふと。

道善房、道義房、淨顯房、義淨房、圓智房、西堯房、實成房(勿論これだ)

などが聖人の遺文に記されてある、またその當時清澄には居なかつたが、かつては清澄に居て當時清澄の周圍の末寺(?)に住職して居たと覺しきものに、

いのもりの圓頓房、かたうみの實智房、華房の淨圓房

などがあつた。いのもり、かたうみなどには皆いづれも清澄の子院があつたと思はれる、

6  
清澄寺の狀態

いのもり、かたうみ、などはいづれも清澄附近の地名

華房には蓮華寺があつて、此外に二間寺(ふたまたでら)といふものもあつた。以上に記した人々がいづれも幾人かの弟子をもつて居たこと、思はれるから、數の上では相當の學徒は居たのであらうが。しかしその學徒にもさまでの俊秀がなかつたし、弟子を率る方にも大してゑらい人物がなかつた。聖人が所謂「遠國なるうへ、寺とは名づけて候へども、修學の人なし」といふ状態であつた。

(イ) 聖人が天才であるといふことに就ては恐らく大ていな人に異存もあるまいと思ふ。凡そ偉人英雄に就ては二の型がある、一は天才型で二は修養型である。型は二に分れるがどちらか一方にだけ屬するといふ人はあまりない、ただ西洋の文藝上の天才には天才だけの天才を多く見る事が出来るが、それでも最偉大な天才はやはり修養型をもちかねてゐる。其點に於ては、東洋の天才は概して此二つの型を兼ね備へてゐる。別して宗教上の天才、それに次で政治上の天才に二型を具有した人が多い。聖人の如きはこの天才型と修養型とを完全に具有した完成せられたる大天才である(「修學」の二節參看) また天才の中に夙成型と晩成型とがある、西洋の天才に就いていへば、ハイネ、バロン等は夙成型で、ダーウキンなどは晩成型、ゲーテの如きは夙成にしてかつ晩成。日本でいへば信長、秀吉は夙成型、家康は夙成にして晩成。聖人の如きはやはり夙成にして晩成の好典型。  
(ロ) 道善房が清澄の主職であるか否かは一往疑問とはして見たものゝ、後に淨顯房が清澄の主體となつた事から推測すれば恐らく道善房は清澄の住職だつたのであらう。

(4) 修學 その一 (第一期—清澄、第二期—鎌倉)

清澄登山に先立つての聖人の立志がすでに上述の様だつたから、聖人が修學の規模もそれに準じて知る事が出来る。聖人は清澄に入ると共に、善日磨といふ名をかえて薬王磨とよんだと傳へられて居る。虚空藏菩薩への祈願は入山と同時に始まるのである。「日本第一の智者となしたまへ」日夜にこの祈りを絶たなかつた聖人は、

生身の虚空藏菩薩より大智慧を給りしことありき、日本第一の智者となしたまへと申せしこと不びんとやおぼしめしけん。明星の如なる大寶珠を給て右の袖に請取候し

といふ靈應を感じて、聖人の修學に一光明を投じた。かくして童形で居ること四年、十六歳で薙髮して、傳によれば是性房連長となつたのである。童形四年間の修學は、授けられたものとは一通りの天台學と、念佛の修行とであつたらう。しかし聖人は入山間もなく虚空藏菩薩に祈願して、「日本第一の智者となしたまへ」と祈つたといふ程の抱負であるから、此四年間を便々として孝經千字文で暮されたのではない事は分つて居る。恐らく清澄にある限りの書は若い聖人の手に觸れたであらう、その中心は無論經典研究である。この研究の中に、眼には天台の教義を見、口に念佛を唱ふる修行に就て、聖人の本典研究は先づ

1 聖人が修學の規模と「日本第一の智者」

疑義を抱いたのである。もとより天台の修行中に念佛の修行はある、しかしそれは法華經を中心とすべき天台宗におけるある變則の事ではなければならない。

皆人の願せ給事なれば阿彌陀佛をたのみ奉り幼少より名號を唱候し程に、いさゝかの事あつて此事を疑し故に一の願をおこす、日本國に渡れる處の佛經並に菩薩の論と人師の釋を習見候はゞや

即ち釋尊の一代佛敎の中心はどこにあるかといふことが、天台宗の依り所とする法華經と、修行とする念佛との矛盾によつて問題になつて來たのである。こゝまで來て聖人の事業は二つに分れた、即ち國體の本を知るべく佛敎の智慧によらうとしたところが、其佛敎にいろ／＼な教へと、行ひと、證りとがあつて、それが根元であるかゞ分らない爲めに、また佛敎の本を知らなければならなかつたのである。そこで清澄の修學は殆んど童形の間を終り、十六歳に薙髮して僧形となると共に、先づ鎌倉に向つて學問の旅に出で立たれた(嘉禎三年)。すでに一代佛經の各部の概念だけは得終つたが、實際の宗旨宗派の上をそれ等の本典がいかに意識され、信仰され、實行されて居るかといふ實際的研究に進んだのである。清澄在山中の傳えとして、童形の間には涕淚石の故事があり、連長となつてから凡

2 研究の二途「國體の根本」と「佛敎の中心」



血の笹の話がある。『涕淚石』といふのは、聖人の母公が、愛着にひかされてしばしば聖人をおとづれたが、女人結界の山である爲めに上までのほれない、いつも途中で聖人と逢つて僅に慰めたといふ故事、聖人の孝情と照してあはれにやさしい話である。『凡血の笹』といふのは、虚空藏菩薩に智慧を祈つて、其満願の日におびたしく血を吐かれたのが、虚空藏殿の階下の笹にかゝつて、今でも其の斑點が残つて居るといふ傳へである。

傳説によれば聖人は陸路鎌倉に向つて、今の程ヶ谷をすぐる時、一宿した宿の主人が、念佛に歸依して、かつて尊崇した釋尊の立像を子供のもてあそびとしてゐるのを見て、はやくも念佛宗の弊害を知られたといふ事であるが、傳説は暫く措くとするも、當時天台眞言の形式佛教儀相佛教に對抗して起つた念佛といふ精神趣味の新宗教が、一般人の間に歡迎されてその感化と流行とが火の噴野をやく様な趣のあつたのは事實であらう。鎌倉に入つた聖人は大阿彌陀佛といふものゝ門に入つて念佛の教旨をきいたと傳へられて居るが、大阿といふ人物に就ては淨土宗にも格別の傳へがないから、念佛に就ていかなる義を主張したか分らない。素よりこれは想像に過ぎないが、貞永元年頃（聖人十六歳の入鎌に先づ六年前）鎌倉に往阿彌陀佛といふものがあつて、時の執權北條泰時にすゝめて鎌倉の

凡血といふのは凡夫の血といふこと凡夫の血を吐きつくして聖智を得たといふ事を傳奇的に笹に寓托したもの

3 鎌倉の修學

和賀江島の埠頭を築かせたといふ記録があるが、この往阿の往の字が、俗人間に大の字の訓と相通するところから、そいふ實際的行動に關聯して頌德的に大阿彌陀佛などとよばれたのではないか、いやしくも念阿良忠に先つて鎌倉に開教したといふ程の僧がまるで記傳がないといふのも異なるものである。聖人はまた念阿良忠に就て念佛をきかれたとも傳へられて居る。鎌倉における聖人の研究が、先づ淨土宗をきはめるにある事が大體の方針であつたには違ひないから事實であらう。其外にはこれといつてめぼしい宗教は鎌倉にはまだなかつた。恐らく宗教として覇を稱したのは良忠等の念佛教であつて、禪宗的氣分は榮西のたてた壽福寺位にとまり至つて稀薄であつたらしい。しかし八幡宮寺をはじめ、諸處の阿彌陀堂、愛染堂などには、京都から落下つた別當僧等が、ほとんど京都と同じ様な有様で跋扈し、京都よりもむしろ奔放で自由であるだけに、餘計風儀をみだして居た。聖人の鎌倉在留に就ては、文學博士姉崎正治氏は其著「法華經の行者日蓮」で、曆仁元年から數へて四年とし、本化高祖年譜も粗其説である、予の數え方でゆくと嘉禎三年からだから五年になる、四年にせよ五年にせよ、可なり長い時間を聖人は鎌倉に何をして居られたか、當時の念佛の教義などに就て聖人程の英才が、四年も五年もかゝるといふ譯は

4 鎌倉在留の時期と其間の研究事項

ない。恐らく聖人は此間に鶴ヶ岡(八幡宮寺)の經藏に入つて一切經に就ての嚴密な研究をつまれたに相違ない。また其研究の傍といふよりはもつと適切な意味で當時の國情を研究されたのであらうと思ふ。

當時の日本における尤も重大な問題は何であつたかといふと飢饉であつた。安貞元年(聖六)以來の凶荒が、寛喜二年(聖九)の大飢饉となつて、米價は未曾有の暴騰を來した。朝廷は諸社に奉幣し、修法をこらし、鎌倉では執權泰時が常膳を減ずるといふ騒であつた。翌三年(聖十)には食糧が全く缺乏して、帝都には盛な食糧暴動が起つて暴力共産の社會主義的現象が勃發する。これに疫病がからんで人の餓死するもの無數。貞永元年(聖十)になつて此状態は更に甚く、終にいたる處無警察の状態となつて、國內の秩序はすつかりくづれた。加ふるに諒闇、天福元年(聖十)には天變地天あり、その慘憺たること明狀すべからず。一方群盜の猖獗は、畿内の人民をして自ら兵器を購て防衛をはかるといふ様な不思議な状態を演し出した。しかし嘉禎元年(聖十四)あたりから幾分恢復の緒に就て、延應元年(聖十八)の頃ほひには、經濟状態が漸く舊に復しかけた、即ち聖人が鎌倉に遊學された三年目である。かういふ一國經濟状態の危機は、單に經濟上の問題といふのでなく、國民の精神

5  
聖人鎌倉修學當時  
の國情

及び行動をも支配する大問題であつたから聖人にあつては念佛禪の研究よりもなを注意された事柄、なを緊要とされた事柄であつたに相違ない。而してかういふ時代の危機と、宗教が人世に及ぼす弊害とに就ては聖人に已に「災難對治抄」及び「立正安國論」の先鞭をなす思想が萌して居た事は疑へない。宗教の救済とは畢竟何であるか、祈禱攘災の本旨は抑どこにあるのか、災害が起つてからでなければ宗教は活動を開始し得ないのであるか、是等の諸問題は明らかに當時の聖人に對して、さきに承久亂によつて國家的に失敗した宗教が、更に人間的にも失敗して居る事を證明したものであつたに相違ない。歴史はこれ等の飢饉に就ても、ある二つ三つの事柄を除いては、救済策に就て政治家がどんな措置をしたかを傳へない。まさか袖手傍觀したのではなかつたらうが、飢饉疫病、天災の頻發には、手のだし様もなかつたと見える。世間がかうであつたところに外部からかういふ壓迫を蒙つた幕府の状態はどうであつたかといふと、當時恰も鎌倉執權中での第一等の人物たる泰時の治世であつた事は一種の皮肉ともいふべきだが、その内政における責任者としての苦痛の外、外部の恐慌に次で幕府それ自身が、精神的にも苦痛をなめなければならぬ事が生じて來た。それは何だといふと御鳥羽法皇の崩御である。普通の觀察からいへば、法

皇の崩御はまことに御痛はしい事であつたといふの外、格別他の印象を惹起する事柄ではないのだが、所がこの崩御といふ一事が、泰時と泰時以後の幕府の中樞に、どれだけの苦痛を與へたかは史家たるものゆゑに出來ない觀察點である。

延應元年(聖人十)二月二十二日、後鳥羽法皇は隱岐に崩御あらせられた。島にましますこと實に十九年、寶算六十でましました。法皇にはなを都に對する御執着もあらせられたか、一たびはかへらせたまふ思召であつたが、つひにかなはなかつた。侍し奉るものもいとすくない中で、さびしく崩御ましました。萬乘の御位をふませられた御身として、「我れこそは新島守 隱岐の海の荒き浪風心してふけ」の御詠はいかばかり人の腸をかきむしるか。若しそれ、佐波におはして御父法皇の御上を案じたまへる順徳上皇の「いざさらば磯打つ浪にことゝはむ隱岐の方には何事かある」の御詠と對して靜かに當時御艱難のあとをしのべば、泣くまいと思つても涙はとまらない。法皇崩御の刹那、御還幸の叡念と幕府に對する御憤懣はどうであつたか。いはす語らずこれが鎌倉幕府における「後鳥羽法皇の御怨靈」といふ觀念になつて、いつまでも幕府を苦しめるのである。承久亂に就て特に深刻な觀念を有せらるゝ聖人が此報に接せられた時の御感懐は定めし深甚なものであつたら

6  
後鳥羽法皇の崩御  
と鎌倉幕府

う。この後鳥羽法皇の崩御に就ての悪い聯想は、同じ年の十二月評定衆三浦義村の死と、翌年正月二十四日の執權連署北條時房の死によつて事實となつて生じた。爾來、執權家及び近親家の死については常にこの聯想があつた。格別記録とてはないけれども、予は北條一門に早世者の多い事などが、すくなからず時人のかういふ感をもり、かつ北條氏を惱ましたらうと思ふのである。

しかも當時の状態はなをこれにとどまらない、仁治元年(聖人十)には高麗から驍狀が到來して、その外交的折衝になやまされる。將軍の上洛が彗星の出現によつて止められる。仁治二年(聖人二)にはまたもや飢饉と疫病とが襲來する。一切經藏における聖人の本典研究と宗教家の實際生活(宗教の教義よりもこの點)と、實際世間に對する觀察と研究とは、恐らく聖人の事業的生涯における骨子となつたに違ひない。此等の問題を空過して、聖人鎌倉の修學を念佛に對する研究とのみ解するは傳記者としての予のとらざるところである。聖人は後年、「法然などの所立の義は、日蓮は十七八の時に知つてしまつた」(取意)といふ御抱負からいつても、念佛の研究に多年の努力をせられたとは思へない。かうして考へると、五年の鎌倉修學は決して長くはない、しかも予は、五年間鎌倉に居たきりで、房州へは一度

もかへられなかつたといふ様には考ようとは思はない。當時鎌倉と房州との交通はかなり頻繁なものであつたと考へるから、五年の間には二度や三度は勿論房州へかへられたであらう。

聖人が鎌倉滞在中の生活状態、假寓等に就ては更に記録の徴すべきものがない。しかし南都北嶺における場台の様に寄宿して研學する様な寺院は鎌倉にはなかつたらうし、聖人の研究方針としても恐らく其必要は認めなかつたらうから、寺院ならざるいづれへか寄宿せられたことと思ふが、聖人と安房の領家との關係から推して、これはかな 近密な關係のものと觀察されるから恐らく鎌倉在學中の宿所は安房の領家の邸宅であつたと推測すべきである。宗史の傳へによればこの領家といふのは名越朝時家（朝時は北條義時の次男、泰時の弟）の事になるのだがこれは信用が出来ない、たゞ聖人の記載によれば、領家の尼と名越の尼とは同人だから、而してそれは殆 親族の様な關係であつたらしかつたから、聖人は恐らく名越の尼のところ居られたのであらう

聖人が鎌倉の修學を終つて一端清澄へかへられたのが仁治三年（聖人二）といふのは普通の説である。聖人第一の述作とされてある「戒體即身成佛義」はこの清澄へ歸省後の作であ

7 鎌倉在學中の生活状態

る。此書を聖人の本幹の思想系統中へ入れる事は素より出来ないが、要するに天台眞言の一僧侶の作品とすべきであるが、その法華經に對する態度はすでに甚親密であつて、法然の念佛、痛切明快に破折された如きは、明かに鎌倉修學の結果であらう。さてこれが聖人の修學における大轉機となつて、鎌倉已後はまさしく修學の第三期に屬すべきものである、此第三期における修學の中心は、天台傳教の正意に對する検討と、眞言に對する緻密なる批評的研究となるのである。

(1) 後鳥羽法皇の御怨望といふ觀念に就ては考察すべき二の點がある。近代の人から見たら、こんな事は一種の迷信と排斥されしやうが、すくなくも其當時にかなり力強く影響された思想であれば、史家はこれに對してもう少し精神的側方をしなければならぬ。しかしまた我々の様に物質以外にも天地を有するものにあつては、怨靈の如きは必然的觀念として、怨靈の主體に就ても是認すると共に怨靈の客體に就ても十分にその影響を考へなければならぬ。泰時以後の鎌倉政治の人物と背景とに、絶えず高貴なる亡靈が黒い影を見せることは注意すべき事ではないか。而してまたかゝる亡靈に對して顧慮するといふ宗教的情性が、日蓮聖人といふ宗教家に對する畏怖ともなり逸逸ともなつた事は旁例として證する事が出来る。

(5) 修學 その二 (第三期—叡山—南都)

古來、聖人が叡山の修學に就ては、鎌倉で叡山の尊海と遭遇して、その手引で京都へのぼつたといふ事になつて居る。その尊海といふのは仙波喜多院の尊海だとされて居るのであるが、是れは山川智應氏の研究によつて、その説のあやまりなることが分つた。叡山へのぼるといふことが聖人における確定義である以上、別にこれが誘引を要としない。また尊海にすゝめられてはじめて比叡をたづねる氣になつたといふ如きは、聖人を知らざるの甚しきものである。

聖人の叡山にのぼるといふ事が聖人の研究上の一大關節であることは前にも記したが、その特殊な意味に適當の對照を爲すべく、仁治三年といふ歳は非常に複雑な諸現象をうみだした。それは殆ど聖人の研鑽に對する天の警告ともいふべくまた鞭撻とも稱すべきものであつた。外でもない此年一月における天皇の崩御と、崩御に就てなされた鎌倉幕府の措置とである。

仁治三年一月九日、四條天皇は御歳十二で崩御あそばされた。御年少でもあり、御健康に就てもかつて掛念されてなかつたので、皇儲がまだ定まつてゐなかつた。突然の崩御は

<sup>1</sup> 叡山に入るに就ての傳説の誤謬

<sup>2</sup> 研究の進捗と時勢との併行

滿廷を震撼せしめた。喪を秘して鎌倉に急使を走らせ皇位の繼承を議せしめる。九條道家西園寺公經等が皇位を擬したのは順徳院の王子であつた——これは順徳院の中宮東一條院が九條家から出られたからである——然るに執權泰時の説はこれに反對で、順徳院の如き鎌倉征伐の主體にましますかたの王子を奉戴する如きは危険極まつたことである。併し事皇位に關して輕々しく斷すべきでない。此重大問題にあつた泰時の苦悶は尋常一様のものではなかつたらしい。しかし彼れは斷乎として後鳥羽上皇討幕の御計畫を諫め參らせ、た土御門院の王子を擁立し奉ることにして一月十九日秋田城介義景、仁階堂出羽前司行義を京師へ遣した、けだし土御門院を徳とし奉つてゐる。徳とし奉るといふよりは、幕府に對して危険の憂がないといふにあることは申す迄もない。であるから義景が途中から引返して、「若すでに京師の御計ひにて順徳院の宮つかせ給たらば、いかゞあるべき」ときいたのに對して、泰時感じ入つて、「此事を申落たりける、わ殿をのぼするは加様の事の爲也、いみじく問たり、何條仔細あるまじ、よしさる事あらばあらしまいらすべし」と答へた。天子の廢立、天壤無窮の寶祚の繼紹は此時たゞ泰時の手中にある、鎌倉幕府の手中にある。驚くべき時勢ではないか。承久の播遷と天子の廢立とをさらに整束して、平時にあ

「何條仔細あるまじ」驚くべく恐るべきことばにあらずや

つても其方針に出でようとした事、若し聖人の教示に随つて義時を日本はじまつて已來、二十六番目の謀叛人とするならば、泰時はまさしく義時を完成したといふ意味で、二十七番目の大叛逆人たるべきである。思ふに皇位の力なきこと鎌倉時代の如く甚き事はない、これに對して聖人の出現を思へば、全く天命であることを思はざるを得ない。當時聖人は恐らくはまだ鎌倉にあつて此事件の顛末を聞いたであらう。かくて即位せられたのが後醍醐天皇である。この天皇の御一生に於て幕府に對したまふ御好情は皇位御繼紹の反射も見るべきものであつた。この一事件を事業の終結として、五月十五日には一代の名執權とよばれた泰時も遂に世を去つた、時に年六十。實に後鳥羽法皇の崩御後四年、義村時房の死に次で、日本の國史に不滅の逆想を残しつゝ死んだ。後鳥羽法皇の御怨靈は、またしばし京鎌倉の人の語草となつた。因縁は奇なもので、九月には順徳上皇も佐渡で崩御遊ばされる、寶算わづかに四十六、御痛はしいとも何とも申上る語さへないほどである。斯る歳に聖人は靜かに叡山の雲を分けて、そこに天台傳教の正系をたづね、一代佛敎の歸趣を適確にし、國本確立の基礎をひらかんとせられたのである。

當時の叡山は形式としては傳敎大師已來の規模を持續し、或はそれにまさるものもあつ

3 聖人在學當時における叡山の狀態

たが、大師が叡山建立の精神は毛筋ほども残されてなかつた。大師が叡山建立の理想は、佛敎を統一して法華經中心の一大宗敎を樹立し、それを以て鎮護國家の法としようといふのであつて、大乘戒壇の建設は畢生の事業であつたのだが、不幸にして戒壇は大師存生の間には勅許を得られなかつた。しかし大師の入滅と共に此機運は動いたのだから、大師の眞意をよく繼紹し得る弟子があつたら、叡山の根元に對して動搖は來さなかつたのであるが、第三の座主圓仁(慈覺大師)は、大師の雄大な規模を解する事が出來ず、自ら佛敎統貫の理想をすて、一の大中心をなげうつて、眞言と法華とを對抗させたばかりでなく、善無畏弘法等の眞言の影響によつて、遂に理同事勝(法華經と眞言の大日經とは、理は同じで事相は大日經がすぐれてゐるといふ思想)も極端までいつて、法華は大師の考へた法華より墮落したが、眞言は弘法の眞言よりも却つて深遂を加えて、それが病付きで、さしも大師の精神を留められた叡山は、一種變態な眞言宗になつてしまつて、叡山の戒壇では大乘戒を授けはするが、戒壇を以て日本佛敎統一の規模とされた傳敎大師の理想は無殘にも土足にされた。中心がすでに此通り瓦壞を來したから、大師が包容的に攝取せられた禪觀念佛業などが後には次第に獨立の機運を生じて來て、日本における禪念佛は叡山が其出生

地となつた。此意味に於ては叡山は日本佛教の淵藪で、各宗の父母ともいへるが、父母なることを誇る前、叡山は大師精神の分裂を證認しなければならぬ。これは教學的思想方面での觀方であるが、叡山が實際的活動の方面には何をして居たかといふと、これに二種の活動があつて、一は東寺高野山等に對抗しての祈禱攘災と、一は僧兵といふものゝ物興によつて起つた、山門衆徒の横暴である。祈禱佛教と公卿との結托は、公卿の勢力争ひに神明佛陀の力をかり、僧侶の榮達に公家の助力を仰いで、もちつもたれつ、次第におしおよぼして、女御中宮の争ひを宗教が手傳ひ、果は皇子出生の祈り皇位争奪の祈りとなつて、小にしては社會の風紀をみだし、大にしては國家の組織の上にも、精神の上にも、取かへしのつかない葛藤と汚濁を印した。これはひとり叡山だけの罪ではない、東寺高野山一切の眞言師との共謀であるから叡山だけをせめる事は出来ないが、罪狀相布くに至つては、もとより罪の査定に於て輕減をねがふべき資格はない。乍併また一面絢爛な文化もこれによつて生じた。特に文學方面における佛教の影響は、詞藻の上に忘るべからざる印象を残した。大してありがたい結果ではないが、源氏物語から寺院と僧侶とを除き去つたら、いかに美男と美女とが澤山居ても、一種の寂寥を感じずには居られまい。要するに平安朝文

學から、晨朝の鐘の音だとか、「みやかう」とか「みす法」とかいふ語と事實の描寫とを取り去つたら、江戸時代の遊蕩文學を時代にしたとしか思えない。六歌仙の畫の中には、僧正遍昭の僧形の缺くべからざる事を考へなければならぬ。

眞宗の人が親鸞上人の壯時を叙するに必らず慈圓慈鎮和尚の戀歌に對する宮中の批判をいふが、いやしくも叡山の座主が、戀歌をよんで問題を引起したとは、いかに傳教大師の明哲といへども豫知されなかつた事であらう。その豫知されない事が堂々たる表向の事實になり、宗教育家か詩人か、鑑別に迷ふ時、歌をよまない僧等は劍を帶し長卷をもつて僧兵となつた。座主と戒壇との事で盛に園城寺と抗争した。放火、殺人、傲訴、宣旨でさへ押し返す横暴となつた。朝廷の處置に對して服さなければ、直ちに日吉山王の神輿を奉じて京洛をさわがした。後白河法皇をして、つひに鴨川の水とならべ嘆せしめた山法師の威力は、威力といへば威力だが、何も僧侶とまでなつて刀杖を持せずとも事だ。この亂離骨灰の叡山、傳教大師の雄圖は空しく悪僧と輕僧とによつて泥土とされて傳教大師の規模薬にしたくもない様になつた叡山は、つひには朝野の冷笑とともにいやがられて、毛蟲の様な待遇をうけつゝあつた。朝廷の困つたところは、やがて幕府の當惑するところであつた

が、幕府には武力といふ最後の武器があつたけれども、朝廷が山門に對する願慮は傳習的にかなり深刻なものであつたから、山門は幕政となつても猶依然たる苦情の府であつた。聖人が叡山にのぼられたのはかういふ時であつた、併し叡山はさすがに叡山で、何といつてもがいが大きいから、惡僧と歌よみにはさまれて幾干かの學僧はあるにはあつた。

聖人が叡山に登つて誰れに師事したかに就ては、古來尊海と傳へ來たが、これはあやまりであつて、近時山川智應氏の研究によれば當時叡山三塔の總學頭であつた無動寺の俊範法印だらうといふ事である。俊範の生死の年月等は分明でないが、その生存年代は壽永年間から弘長年間まで、八十歳前後で入寂したものはやはり山川氏の考證である。すなはち聖人遊學の時分は、六十歳から七十一歳までだとの事である。當時における俊範の位地は無双の學匠として、寶地房の法印宗源とならんで、叡山の双壁であつた。叡山における最大權威は、やがて其當時平安佛教の權威であつた。山門の衆徒が院の御所への落書に「學生に宗源俊範アリ」とあるのでも、俊範がいかに山門の誇りであつたか分る。それ程の學匠であるから、門下にも數多の英才をあつめた、四天王といはれる承瑜、俊承、靜明、經海と、五人の學匠といはれる、範承、慶深、政海、心賀、全海等が居て諸弟子

5 聖人の師と師の學

を率ゐた。聖人が此門に參して、是等の英才の間に斬然として頭角をぬきんでた有様は想見するに足りる。俊範の學統は慧心流(慧心院の源信僧都の流れ)に屬して居るから、學風は勿論其範圍を出ないのであるが、俊範は可なりな包容性をもつて居た學者だから、檀那流檀那僧正の學統)の法門にも出入した公平な學者であつたらしい、聖人がかゝる人に師事された事は、聖人修學の目的を果すには大層都合のいゝ事であつたらう。

叡山における聖人の住房は、東塔の圓頓房であつた、またいつの頃からか横川の華光房(後に定光院)をも監したとも、住したとも傳へられて居る。山川氏の研究によれば、圓頓房は代々名譽の學匠を住僧としたといふ事であるから、俊範門における聖人の待遇もほゞそれによつて分るのである。定めし二十一歳にして叡山にのぼられた聖人は、數年ならずして叡山における注意の焦點となつた事であらう。聖人が叡山に於ての研究方針は、天台傳教の正意を研討して、法華經流傳の正系をたづね、法華經に對する解釋の進歩と、それが實行に移り來る鹽梅によつて、聖人の立脚地を確定し、聖人の本意顯發前の師導者たる天台傳教二師の位地を確然たらしめて、それを思想の源據として當時の十宗を批判決擇するにあつた。聖人は當時なを天台宗の一沙門には過ぎなかつたけれど、その先天的に偉大

6 叡山における聖人の地位並に住地住



な直覺力は、法華經といふ經典を通して釋尊とすでに握手してしまつた。法華經といふ經典に對する正しい解領を通して天台傳教とも握手してしまつた。であるから聖人の内觀についていえば、法華經中心に就ては聖人の胸中當時すでに何等の惑を有さなかつたのである。たゞこれを外部的に決定するには批判が要る、すなはち「何物かこれ中心佛敎」この文獻的樹立が聖人の十宗に對する研究批判の標準とならなければならないのである。

それに就て聖人の取られた方法に二つある、一は即ち歴史的研究で、他は即ち現量的研究である。歴史的に觀た釋尊已後の人々の所立、それが釋尊の思想といかに合ひいかに乖離せるか、かく時間的に見られた過去の佛敎は、時間の一轉進毎に、不規則な擴がり有しつゝ、たてにあやまりを示すと共に、横にもあやまりを擴張し凝結させて、三論宗となり法相宗となり俱舍宗となり成實宗となつた。幸に天台の出世と共に法華經が思想の本流となつては來たけれど、またそれに知慧づけられて多端な義が生じて來た、これ等は歴史的研究によつて確然と批判されるのである。ことに慈覺大師が、傳敎大師の直接の弟子でありながら、弘法大師との對抗の爲めに、眞言の思想を取入れて、天台を莊嚴する目的が、儀相の爲めに眩惑されて、次第に眞言化して、恩師傳敎大師によつてすでにある差排

7  
歴史的研究と現量的研究

を被つて居た眞言宗を法華の上において、法華統一の規模を逆轉させた始末などは、歴史的研究によつてはじめて要領を得るのである。歴史の批判を度外して直ちに價值批判などしたところが、徒に煩冗をますばかりで、價值の本體などはつかめるものでない。尤もこれは聖人としてはすこしの困難もない事だけれども、第二者第三者に示すには歴史的研究でなければ不可である。二に現量的研究とは、當時の宗教界の實際狀態に對する研究である。大體聖人の出發點が、「佛敎によつて國の紊れる不思議さ」にあるのだから、宗教といふものが、當時の宗教家と信者とにいかに意識され、宗教といふ無形がどんな按排に宗教家、若しくは信者といふ有形に移つてゆくか、その移りかた、移つた結果を研究しなければ、宗教の効用に就ての決定が與へられない。即ち宗教家の生活狀態を見る必要がある。宗教家を圍繞した世界を見る必要がある、宗教家が及ぼした効果を見る必要がある。宗教と世界との實際交渉、これを閑却しては、徹底した宗教批判が成立たないのである。先づこの二つに就て適當にして豊富なる材料を得ようと思つたならば、叡山を中心とした平安佛敎をきはめなければならぬ、聖人の叡山修學の大目的はこゝにある。況んや叡山は佛敎の住みそめ給ひし土地、精神交通の媒介としては、大比叡小比叡の山容水態は何よりも

必要だつたであらう。かういふ立場であるから聖人は慧心流を研究しても慧心的臭味を傳へず、檀那流を相承してもこの一流に拘束されず、台密にも眩惑されず、どこまでも傳教の正系をたどつて、根本大師(傳教大師のこと)門人の眞資格を失はなかつた。かういふ態度からは、慧心檀那は暫く措くとするも、台密の横義はゆるす可らざるものであつた。隨てこれの發頭人たる慈覺は師敵對の罪人で、その流れを汲む當時の慈覺流の叡山は師敵對の山、濁れる山、奸夫の子であつた。思ふに傳教と慈覺との相違點は、聖人における豊富なる論題となつて、しばし學友等をなやました事であつたらう。

聖人の叡山在留がおよそ何年間であつたかはすこしも分らない。南都の修學等の爲め兩三度の出入は無論あつたとしても、前後七八年はここに過されたであらう。これに次で比較的長かつたのは恐らくは園城寺で、南都の見學にはさまでの時間を要しなかつたことと思はれる。聖人がこれ等の修學時期を後年記されたには、「鎌倉、京、叡山、園城寺、高野、天王寺」は必らずあげるが、かつて南都をいはれない、しかし十宗研鑽といふ事は諸處に明記されてあるから、勿論南都は訪はれたのである。ことにこゝには他に見られざる日本の古美術がある、聖人の慕はれる聖德太子の規模が現存してゐる。自ら「三寶の奴」

8  
園城寺及南都

と仰せられた聖武天皇の偉業がある。必らず一二年は南都に費されたであらうと思ふ。

かくて聖人が京都奈良における研鑽は十一年を費した。十二歳の大願から通算すると實に二十年、本化上行(人類救済の根本人格としての久遠よりの存在者)の自覺に於ては世界第一の聖人と自任される聖人にして、なを二十年の研鑽を必要とせられたとは、何といふ驚くべき用意であらう。聖人の如きはまことに天縱の大聖者であるから、十二歳の發願と同時に、我れは佛の使なりと名乗りをあげて、忽ちに人類救済の宣言をしてもよかりそふなものだが、六十一年の御一生に、二十年を研鑽に投じたといふことは、まことに見ざるなく究めざるなき慎重の態度である。この慎重の態度があつてこそはじめて、「日蓮が法門は大智慧のものにあらずんば解し難し」或は「智者に我義破られずば」或は「佛法と申すは道理なり」の大判定の下にあらゆる思想道教の決濟をはかり得られたのである。

二十一歳の時から十二年の永い日子を費して、聖人立教の基礎が立てられた、この十二年間に、時代はまた聖人の活動をして遺憾なからしむべく、適當の配置をし、適當の事件を演じて、聖人の出場をまつた。この偉大なるシテの出にうたれた次第は大小ともに可なり複雑な手を、天工と人爲とによつて、可なり面白くうつてきかせた。聖人が叡山に入ら

9  
前後研鑽二十年10  
修學の終結と時代の適當なる配置

れた翌年、すなはち寛元元年(聖人二)には又もや疫病の流行によつて困らされたのである。同二年(聖人二)には大疫病になる。十歳已上のもので此病を受けないものはないといふ様な有様であつた。同三年(聖人二)には彗星が出現する、果然、鎌倉では前將軍頼經の事件がそろ／＼催して頼經は二十八で出家する(法名行智)。風雲頗る急なる時、同四年(聖人二)には執權北條經時(泰時の嫡孫、時氏の嫡子、時氏早世によつて泰時について執權となる)僅に三十三歳で歿する。北條氏の早世は泰時の嫡子時氏以來一つの慣例である。又もや後鳥羽法皇の御怨靈が聯想される時、執權の交迭で人心動搖したのをしとして前將軍頼經を奉じての江馬光時(名越朝時の子、泰時の甥)等の隠謀ははしなく露顯した。經時の希望で執權職をゆづられた經時の弟の時頼は機先を制して難なく江馬氏等を壓迫し、光時は髪を薙いで陳謝し、光時の弟修理亮時幸は自殺し、これに關連した評定衆後藤基綱、藤原爲佐、千葉貞胤、三善康持等は皆職を罷められる。光時もつひで伊豆に追はれる。時代はいよいよ北條氏らしくなつて來た。翌寶治元年(聖人二)には承久の餘波が意外な邊にまで及んで、順徳院の王子の御元服に對して、幕府が不服をとなへて抗奏するといふ様なけしからぬ事件が演ぜられた。一方、所謂寶治の合戦といふものがあつて、鎌倉における頼朝已來

の豪族三浦の一門は安達景盛の陷穽にかゝつてあえなく時頼にはろぼされる。おおよそ鎌倉の豪族中、此三浦氏位情けない最後を遂げたものはない。彼等は承久討幕の御計畫にあつて、三浦義村は弟胤義を通して上皇の御招きを被つた、然るに彼れは弟を賣つて義時に他意なきを誓つた。頼經の事件にも泰村は誘はれたがゆかずに居て、結局はオメ／＼と安達景盛にはかられて、さしもの豪族もふがひない最後をとげた。どちらにせよ亡ぼさるべき運命をもつて居たのだから、すこし眼先に見える人物であつたなら、後鳥羽上皇の御召しに走せ參じて、たとひ功ならずとも歴史上にいゝ印象位はのこせたらうに、惜しい事である。總じてこゝいらが歴史の着眼點だ。三浦等が攻め滅ぼされた後、六波羅北方の北條重時は鎌倉に歸つて、時頼を助けて執權連署となつた。同じ年に宋の亡命僧道隆が時頼に請待されて鎌倉へ下つた。かくして聖人に必要な人物の配置が次第になされるのである。それから暫くの間平穩であつた鎌倉は、建長三年(聖人三)になつて九條堂の了行法師の叛亂によつて一騒ぎ騒いだ。此騒ぎの飛沫は京都にも及んで、これに連つた九條道家の一門はさなきだに頼經の失敗以來閉塞して居たものが、この事件によつて一層のうきめを見た。翌四年(聖人三)にはこの了行の叛亂によつて恐れ多くも院の御所に於て仁助法親王に仰せら

れて關東安寧の御修法があるといふ様な奇な現象を生じた。時勢の推移といふものは實に驚くべきものではないか。幕府の實體は三十二年前、後鳥羽上皇によつて討滅の院宣を下された時と少しもかはつて居ない、むしろ餘計險惡になつて居る。然るに先の討滅の御修法は三十二年の間に關東安寧の御修法と變じた。所謂桑田碧海、これが歴史の興味である。了行の叛亂によつて、幕府は九條道家に對していよ／＼危険を感じたと見えて、將軍交迭を思ひついた。しかも宮將軍を奏請した。それも普通の皇族でない、後嵯峨上皇の王子に就て奏請した。これにも時勢の推移が感ぜられる、はじめ實朝の薨去によつて宮將軍を奏請した時に、後鳥羽上皇は國に兩主を生ぜん事を恐れたまひて斷乎として御許容がなかつたにも拘はらず、後嵯峨上皇の場合にはこれが反對で、上皇は却て宗尊親王の爲めに御喜びになつて、やす／＼と將軍親王が出現した。恐らくこゝいらが幕府の絶頂であつたかも知れない。峠はやがて下りだ、是等の事象の中に、北條氏の衰亡の徴候と國家の禍機とが歴然としてある事を、誰れもしらない。知つて居るのはたゞ聖人だけである。その聖人の準備はすつかり出來た、

予は、かつし、ろしめ、されて、候が、ごとく、幼少の時より、學文に心をかけし、上、大虚空藏菩薩の御寶前に願を立、日本第一の智者となし給へ、十二のとしより此願を立つ、其所願に仔細あり今くはしくのせがたし、其後先淨土宗禪宗をきく、其後叡山、園城、高野、京中、田舎等處々に修行して自他宗の法門をならひしかども、我身の不審はれがたき上、本よりの願に諸宗何の宗なりとも偏黨執心あるべからず、いづれも佛説に證據分明に、道理現前ならんを用べし、論師、譯者、人師等にはよるべからず、專經文を詮とせん、又法門によりては設王のせめなりともはばかるべからず、何況其已下の人をや、父母師兄等の教訓なりとも用ふべからず、人の信不信はしらすありのまゝに申べしと誓狀を立しゆへに、三論宗の嘉祥華嚴宗の澄觀、法相宗の慈恩等をば、天台妙樂傳教等は無間地獄とせめたれども、眞言宗の善無畏三藏弘法大師、慈覺、智證等の僻見はいまだせむる人なし、善無畏不空等の眞言宗をすて、天台による事は妙樂大師の紀ノ十の後序、並に傳教大師の依憑集にのせられたれども、いまだくはしからざればにや、慈覺、智證の謬悞は出來せむるかと思はせむるなり。

かくして聖人が叡山を出るの時が來た、叡山を出る時はすなはち聖人の幼少の時の志望、十二歳の時の立願が、完全に具體化される時である。

11 叡山を出づ修學の順序、要領、結果

生身の虚空藏菩薩より大智慧を給りし事ありき、日本第一の智者となし給へと申せし事を不便と思食けん、明星の如くなる大寶珠を給て右の袖にうけとり候し故に、一切經を見候しかば、八宗並に一切經の勝劣粗是を知りぬ、其上真言宗は法華經を失宗也。是は大事なり、先づ序分に禪宗と念佛宗の僻見を責て見んと思ふ、其故は月氏漢土の佛法の邪正は且置之、日本國の法華經の正義を失て一人もなく人の惡道に墮る事は、真言宗が影の身に隨がごとく山山寺寺ごとに法華宗に真言宗をあひそひて、如法の法華經に十八道をそへ、懺法に阿彌陀經を加へ、天台宗の學者の灌頂をして真言宗を正とし法華經を傍とせし程に、真言經と申は、爾前權經の内の華嚴般若にも劣るを、慈覺弘法これに迷惑して或は法華經に同じ或は勝たりなどと申て、佛を開眼するにも佛眼大日の印眞言をもつて開眼するゆへに、日本國の木畫の諸像皆無魂無眼の者となりぬ、結局は天魔入替て檀那をほろぼす佛像となりぬ、王法の盡きんとするこれなり。

これ等は勿論聖人の後年の記述ではあるけれども皆修學完成の時の思想であることはいふまでもない、なを此間の心持なり業蹟なりを記して、

世間を見るに各々我も我もといへども、國主は但一人なり、二人となれば國土おだやかならず、家に二人の主あれば其家必やぶる、一切經も又かくのごとくや有らん、何の經にてもあはせ、一經こそ一切經の大王にてはおはすらめ、而に十宗七宗まで各各諍論して隨はず、國に七人十人の大王ありて萬民おだやかならじ、いかにせんとなん疑とところに、一の願を立、我れ八宗十宗に隨はじ、天台大師の専ら經文を師として一代の勝劣をかながへしがごとく、一切經を開き見るに、涅槃經と申經に云、依法不依人等云々

更に此の消息を明細に叙述しては、

日蓮は東海道十五箇國の内第十二に相當る安房國長狹郡東條ノ郷片海の海人が子也、生年十二同郷の内清澄寺と申山にまかりて(學問し候しが)、遠國なる上、寺とはなづけて候へども修學ノ人なし、然而隨分諸國を修行して學問し候しほどに、我身は不肖也、人はおしへず、十宗の元起勝劣たやすくわきまへがたきところに、たまたま佛菩薩に祈請して一切の經論を勘て十宗に合せたるに(以下の文讀み易からしむる爲に、一宗毎の批判にいづれも行を別にす)

こゝに引用せし日蓮聖人の文章の中(括弧内の文字は、本文の意味を明瞭にせん爲に著者の私に加へしところなり、以下これに同じ

俱舍宗は淺近なれども、一分は小乘經に相當するに似たり。

成實宗は大(乘)小(乘)兼雜して謬悞あり。

律宗は本は小乘、中頃は權大乘、今は一向に大乘宗ともえり、又傳教大師の律宗あり、別に習ふ事也。

法相宗は原權大乘經の中の淺近の法門にてありけるが、次第に増長して權實と並び結句は彼宗々を打破と存ぜり、譬ば日本國の將門純友等のごとし、下に居て上を破る。

三論宗も又權大乘の空の一分也、此も我は實大乘ともへり。

華嚴宗は又權大乘と云ひながら餘宗にまされり、譬ば攝政關白のごとし、然而法華經を敵となして立る宗なる故に臣下の身を以て大王に順ぜんとするがごとし。

淨土宗と申も權大乘の一分なれども、善導法然がたばかりかしくして、諸經をば上げ觀經をば下し、正像の機をば上げ末法の機をば下て、末法の機に相叶る念佛を取て身は卑者が、身を上て心はかなきものを敬て賢人をうしなふがごとし。

禪宗と申は、一代聖教の外に眞實の法有と云々、譬ば親を殺て子を用ひ主を殺せる所從のしかも其位につけるがごとし。

眞言宗と申は一向に大妄語にて候が、深其根源をかくして候へば、淺機の人あらはしがたし、一向に誑惑せられて數年を経て候、先天竺に眞言宗と申宗なし、然れども有と云々、其證據を可尋也、所詮大日經こゝにわたれり、法華經に引向し其勝劣を見之處大日經は法華經より七重下劣の經也、(その證據彼經此經に分明也引之しかるを或云法華經に三重の主君、或二重の主君也と云々、以外の大僻見也、譬ば劉聰が下劣の身として愍帝に馬の口をとらせ、超高が民の身として横に帝位につきしがごとし、又彼大慢婆羅門が釋尊を床として坐せしがごとし、漢土にも知人なく日本にもあやめずしてすでに四百餘年をおくれり。如是佛法の邪正亂しかば王法も漸く盡ぬ、結句は此國他國にやぶられて亡國となるべきなり、此事日蓮獨勘へ知れる故に佛法のため王法のため諸經の要文を集て一卷の書を造る。仍故最明寺入道殿に奉る、立正安國論と名けき、其書にくはしく申たれども愚人は難知、所詮現證を引て申すべし、抑人王八十二代隱岐法王と申王有き、去承久三年辛巳五月十五日伊賀太郎判官光末を打捕まし

ます、鎌倉の義時をうち給はむとの門出也、やがて五畿七道の兵を召て相州鎌倉の權太夫義時を打給はんとし給ふところに、還て義時にまけ給ぬ、結局我身は隱岐國にながされ、太子二人は佐渡國阿波國に流され給、公卿七人は忽に頸をはねられてき、これはいかんとして敗けたまひけるぞ、國王の身として民の如なる義時を打給はんは鷹の雉をとり猫の鼠を食にてこそあるべけれ、これは猫の鼠にくらはれ鷹の雉にとられたる様なり、しかのみならず調伏の力を盡せり、所謂天台座主慈圓僧正、眞言長者、仁和寺御室、園城寺長吏、總て七大寺十五大寺、智慧戒行は日月の如く秘法は弘法慈覺等の三大師、心中深密大法、十五壇の秘法也、五月十九日より六月の十四日にいたるまで、汗をながしなづき(頭腦)をくだきて行き、最後には御室紫宸殿にして日本國にわたりていまだ三度までも行はぬ大法、六月八日始て行の程に、同十四日に關東の兵軍宇治勢多をおしわたして洛陽に打入て、三院を生取奉て九重に火を放ちて一時に焼失す、三院をば三國に流罪し奉ぬ、又公卿七人は忽に頸をきる、しかのみならず御室の御所に押入て最愛ノ弟子の小兒勢多伽と申せしをせめいだして終に頸をきりにき、御室不堪レ思死給畢ぬ、母も死、童も死、すべて此いのりを頼みし人幾千萬とい

ふ事をしらす死にき、たまたまいきたるもかひなし、御室祈を始給し六月八日より同十四日までなかを數ふれば七日に滿じける日也、此十五壇の法と申は、一字金輪、四天王、不動、大威徳、轉法輪、如意輪、愛染王、佛眼六字、金剛童子、尊星王、太元守護經等の大法也、此法の證は國敵王敵となる者を降伏して命を召取て其魂を密嚴淨土へつかはすと云法也、其行者の人人不輕、天台座主慈圓、東寺、御室、三井常住院僧正等の四十一人並伴僧等三百餘人也云々、法といひ行者といひ、又代も上代也いかにとしてまけ給けるぞ、たとひ勝つ事こそなくとも、即時にまけおはりてかゝる耻にあひたりける事、いかなるゆへといふ事を餘人いまだ知らず、國主として民を討事鷹の鳥をとらんがごとし、たとひまけ給とも一年二年十年二十年もささうべきぞかし、五月十五日におこりて六月十四日まけ給ぬ僅に三十餘日也、權太夫殿は此事兼てしらねば祈禱もなしかまへもなし、然而日蓮小智を以て勘たるに其故あり、所謂彼眞言邪法の故也、僻事は一人なれども萬國のわづらい也、一人として行とも一國二國やぶれぬべし況や三百餘人をや、國主とともに法華經の大怨敵となりぬ、いかでかはるびざらん

と、痛切明快に叙述された中、自ら修學の順序と要領とがあり、所詮肝要を知る身とならばや」といふ方針とともに、承久の紛争に就て「而るに日蓮此事を疑しゆへに」といふ志望の出発點と、研究の歸着とが合期して、はじめて聖人立教の準備はなつたのである。

(イ) 史家の多くは、頼朝の政治と泰時の政治とをほぼ同じ様に見てゐるが、違ふ。なるほど法令の形式に就ては、「貞永式目」といつたところが泰時にさまでの獨創があるわけでもなく、大たいは頼朝の法を文字にしたに過ぎないから、一見同じかと思はれるが、法令の精神に至つては全然違つてゐる。その尤も大なる相違は頼朝は信仰的人格であるが泰時は信仰的人格でない。頼朝の法令には信仰が精神になつてゐるが、泰時にはそれが無い。頼朝の信仰はたゞ神佛に對してでなく、皇室に對しても天照太神といふ根元からの觀察によつて崇敬以上の信仰がみられるかと思ふが、泰時によつて代表された北條氏の政治には、一つは無教養の然らしめる所であらうが、かういふ觀念が全然かけてゐる。こゝに於てか頼朝の政治と泰時の政治、源家と北條氏との政治は、形式に似たところがあつても精神は全然別である、すなはち一口に鎌倉時代といふが、頼朝 頼朝已後とては截然別をなしてゐる。

(ハ) これに就ての研究の詳細は、雜誌「妙宗」第十二篇第九號以下に掲載の山川智應氏の論文「聖祖叡山御修學中の師友に就ての研究」を参看せらるべし。

(ホ) 研鑽二十年、本書第三節の最終(イ)を参看。

(注意) 従來の記傳によれば聖人がこの叡山南都の遊學中に、佐女牛の八幡、或は科長の聖德太子廟に参拜されたことが記されてゐる。且つ科長では聖德太子の示現を見たといふ傳へもある傳で、かなり重んぜられてゐる、もとより聖德太子の國體的建設に對しては、聖人の如きは熱心な讚美者であつたから、「科長參籠」は頗る意義を有したことであつたらう。本文には省略したからここに附記する。

(6) 立教開宗

一代佛教の歸趣残るところなく見定め終つた聖人はこゝに於てか所願満足の大方針を得たのである。此上はもはや叡山にとゞまる必要はない、佛知見によつた正確な批判の上に建てられた正しい教を以て一切世間を救済すべく、釋尊の本意を其儘に體現した宗教を開いて、人類世界のよりどころとしなければならぬ。すなはち建長五年の春、三十二歳の聖人は叡山を下つて故郷房州へかへつた。およそ聖人の一生は條然たる秩序を以て一貫されてゐる。はじめからちやんと結構されて、其豫定が少しも狂はずに次第開展してゆく有様は、世界のいかなる聖人にも類のないところで、此點に於ては佛の一代と雖も、その對照の妙發展の妙は、聖人の一代に比してはなを及ばないのである。隨て開教までの徑路をしらべても、出誕(これに就て時期と、土地、志學(これに就て時勢と救済)、立願(これに就て責任と抱負)、修學(これに就て枝末と根本)と經て來て、しかもその立教開宗を思想界の中心、宗教の淵藪である京都にしないで叡山をあとにして故郷へかへられたのはどうであるか。聖人は自ら房州を以て「天照大神のすみ初めたまひし國」といひ、「此國に生れたり第一の果報の者」(取意)といはれてあつて、安房はまことに聖人を生むに足りた

1 修學の大成と故郷における開宗の意義



因縁をもつた國である。この因縁を重んぜられて聖人は房州に開教されたのである。

叡山を下りた聖人は、道を伊勢にとつて宗廟へ参拜せられた。たとひ安房に大神の宮ありとも、伊勢は國家の宗廟である、しかも聖人の開教は、たゞ汎爾に人といふのでない、まさしく此國土を佛國として此國體が正義の源泉であるといふ信仰を復活して、其基礎の上に本門の三大秘法を打建てなければならぬ。本國土妙の示現たる天照太神は、實は本佛の一面のあらはれである。國家の宗廟としても聖人が開教のはじめに伊勢を訪はれるといふ事は當然であり、聖人の法門の基礎條件としても、國祖に没交渉であるべきでないから、歸國の途次こゝをすぎて開教を奏上された、かくて房州へかへりついたのは夏のはじめであつた。週遊十二年、故郷の土をふんだなつかしさは、聖者といへども恐らく我々凡夫の心持とかはらなかつたであらう。十二年の間の變化、二十一歳の青年は、今や三十二歳の齡をかさねて、其間の研鑽苦學につれた聖人の人格の開展は、いかなる無智の村人にも感ぜられたらう。かはらないものは恐らく小湊の海と清澄の山、兩親も漸くにして老ひたまひ、師の道善房にも老のつかれが見えたであらう。短い様でも長い十二年、變化もとよりである。たゞ其變化が聖人に於ては餘りに甚しかつた、かつて一箇の學僧にすぎな

<sup>2</sup> 宗廟へ開宗の事を奏す

かつた蓮長は、今や豫言者として故郷にかへつたのである。

聖人の清澄歸山に就ては一山の期待の程も思ひやられた。傳説によれば道善房は清澄の主職を譲る目的であつたといふ事である。幼少の時から俊秀の聖人が、前後二十餘年の苦學に對してはもとより當然の期待であつたらうが、同時に聖人に對する怨嫉的氣分が、そこに早くも氣ざしたらうと思ふのも極めて自然の觀測である。それは聖人にとつては甚く迷惑なことであつた。けれどもそんな事を願慮すべき時ではない。聖人は四月二十二日から靜に三昧に入られた。けだし佛が道を成ずるに先だつて禪定によつてその精神力を統一すると同じく、聖人もまた研鑽修學の結果を發表するにあつて、一たび靜慮をこらされた。此期間が聖人の一生における恐くはもつとも神祕な時間であつたらう。聖人は此後三十年の生涯に於て、かつて一度も三昧に入られた事はない。けだし戦闘攻圍の中にある聖人はそれをする暇がなかつたのであるか、そうでない、それをする必要がなかつたのである。一生におけるたゞ一度の熱慮、それが此清澄における開教前の七日間である。此後九年伊豆に於て發表された宗教の五綱も、すでに此靜思の間にねられた思想である。開教以後入滅までを通じての三大秘法の顯發も、皆此靜思の中に洗練された思想である。恐らく

<sup>3</sup> 開宗發表に先だてる靜慮



目として日に向つて宣布せられたのである。しかしながら、斯る宗教的意味を別にしても詩としても畫としてもはた音楽としても、この日に向つての開教——しかも旭日——に比し得る光景は東西人文の歴史に一つもあるまい。釋尊が菩提樹下に明星を望み見て正覺を得られた有様は壯嚴無比だが、この聖人立教の規模とは大分違ふ、また場合も違ふ。其外の聖人賢人に就て見るも、その一生の首途、立教宣布といふ幕開きが、かくの如き法界的規模を以て太陽を相手とし宇宙を對象としてはじめられたといふ事は、だれにもない、こればかりでも世界人文史上無双の壯觀である。ヤソの傳中にはヤソと自然との交渉に就て時に記載があるが、其場合の自然はやはり環境といふ意味、また配色、若しくは背景といふ様な意味だが、聖人の日輪に向つての開教は、そういう偶然的なものでなく、全く對象と事實との間に密接な關係をもつて居て、日輪でなければならぬところに、しかも落日でなく旭日でなければならぬところに、聖人の宗教の特色があり、聖人の宗教并に人格の廣大な規模が存するのである。東西の大宗教家の事蹟に就て見るも、開教といふ事はほど際立つて成されてあるのさへ無い位である。海、而して日、而して日蓮——これを結合する眞理の題名すなはち南無妙法蓮華經、此朝よりして世界は眞に歸すべき道を得た

即ち日蓮聖人の宗教はかくの如くにして地上にうちたてられたのである。

大満足の聖人は靜に山を下りた。この日の正午聖人が一場の法談を試みる事はとくすでに豫告されてあつた。けれど成道に次で轉法輪——說法——のあるは諸佛出世の儀式である。尤もそれは最初の轉法輪のみをさすのではないが、成道の儀式に次で説法のないといふ事はない、開教の大法界的なるに對して、こゝに形式としても人間に對する説示がなければならぬ。時至つて人は集つた、一山の大眾はもとより、師匠道善房、淨顯義淨の兩先輩。一山の故老である圓智房、實成房、圓頓房、西堯房、別して淨圓房は聖人に對する同情者として、とくより此會に連つて居た。地頭の東條左衛門景信もまた此席に臨んで連長いかなる義をか唱ふると片唾をのんだ、説法の間處は師匠道善房が持佛堂の南面である。一山の衆徒、並に一會の開法衆が、聖人に對する期待の頗る重大であつた事はいふまでもない。然るに聖人の主張はまさしくこの期待を裏切つた。ありがたい念佛の法談か、眞言の談義をきくことゝ想像して居た人々は、意外にも正反對の説をきくべく餘儀なくされたのである。

聖人はこの最初の説法に於てはじめて四箇の格言を發表された。四箇の格言とはすなは

ち「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」である。この晴天の霹靂ともいふべき大破折に對して、座中は忽ちに混亂した。一見激語に似た大慈言は、素より清澄邊の田舎僧侶尼入道等に端的に解せらるべき事ではない（清澄邊の人なさておき、鎌倉の者にも、現代明治大正の人にさへまだ満足に解されてない）一座は怒つた。道理の前に屈服すべき程、まじめな信仰もないのだから、己れの宗旨を罵られたといふ感情から持佛堂は忽ち鼎の沸く様な狀況を呈した。中にも激怒したのは此邊の土豪として非常な權威を有つて居る東條御厨の給人東條左衛門景信である。彼れは長狹郡のある一郡の領主（？）であり、有力な念佛者であつたと見えて、聖人の四箇の大言を聞くや道告にせまつて聖人の放逐を脅迫した。土豪は怒る、大衆は罵る、この若僧の小さかしい論議を片腹痛く思つて居た道善坊の兄の道義房義尚、實成房、圓智房等は土豪に和して、誹謗を逞くした。しかも三十二歳の一青年僧は、屈せずに強義を主張して破折は却て激烈をきはめた。しかもこれ聖人が好んで諸宗を罵つたのではない、罵るも罵らないも、たゞ一意に釋尊の本意を光顯するより外はないのである。釋尊自ら四十餘年の所説は眞實でないときだめ、たゞ法華經だけが佛の本意の教であると重々懇切に示されてあるのを、諸宗の人師がおのれの意樂のまゝに、各

別に異つた一機類の爲めに當座の氣やすめに説かれた諸經を無二のものとして、それ等をすべて集大成して且つ其醇要をとつた法華經にそむいて居る事を哀れむの極、法華經の規範に照して邪正をわかつてよるところを示した。所謂「佛法と申は道理なり」の徹底した立場から、「悲母が赤子の口へ乳を入れんと勵む慈悲」の發動となつてあらはれた大慈折伏である。しかも聖人はこの一會の説法の結果に多くをのぞむものでない、立教開宗の内容を示し得ればよい。すでに無智惡國を通り越して邪智謗國となつて居る日本の、別して偏僻な房州あたりに此大法がたやすく植りつくわけではない。しかし此反應によつて法華經の力もわかつた、同時に法華經の眞實も分つた。法華經には「如來（釋尊）現在猶多怨嫉、況滅度後」とあるではないか、また「多怨難信」とあるではないか、法華經の教義を一句でも説けばこの通りの怨嫉である。罵るものは家に満ちても、信するものは幾干もない。東條の地頭の激怒に避易した師の道善房はいかになりゆくかと當惑した。淨圓房、淨顯房、義淨房等の同情者はひたすら聖人の身を氣づかつた。一山の老輩は切齒して講の果つるをまつたが、いふべき事のすべてをいつて壇を下りようとする聖人を仰ぎ見て、圓智房が「誰かと思ひしに藥王麈にてありつるよ」と罵つたのはよくよくやささに堪えら

れなかつたものと見える。

聖人が壇を下りてからの内部の紛亂は想像するに餘りがある。師の道善房は極めて愚痴つばい人であつた、愚痴つばい位だから勿論大した智解はない。且つ東條の地頭を無二の恐しいものとしてゐた。道善房の上には兄の道義房がある、また圓智房は恐らく一山の最古老として、常に道善房を制肘して居たところへ、此事件であるから、いよいよ笠にかゝつて道善房をせめたと見える。

道善房はいたう弟子なれば、日蓮をばにくしとはおぼせざりけるらめども、きわめて臆病なりし上、清澄を離れじと執せし人なり、地頭景信が恐ろしといひ、提婆羅伽利にことならぬ圓智實成が上と下とに居てをどせしを、あながちに恐れていとおしとあもうとしごろの弟子等をだにも捨られし人なれば後生いかんがと疑う

と聖人は後に記されたが、弟子と師とのかくばかりはげしい相違は古今東西を通じて、かなり奇な事實といはなければなるまい。

傳説によれば、聖人はこの爲めにつひに清澄を下山しなければならなくなつた。さりとて小湊へかへる事は出来ない、かゝる囂々たる反對の中に、淨顯房と義淨房とは後年ほと

7 迫害を華房に避く

道善房の人物に就ては、聖人の自記に徴してその大體を知るを得べし、後の道善死去の條に

んど聖人の弟子とならんとした人だけにさすがに聖人の義に就て領會するところがあつたと見えて、聖人の爲めにはかつた。聖人が華房の蓮華寺へ避難されたのはけだし此二人の計であらう。しかも景信が聖人の下山を要して、刃傷に及ばうと待ち構えて居る風説をきいては、聖人を獨り落す事の危険なを思ふて二人はやがて聖人を追ふて山を出て、間道を華房へと出でた、聖人が後年淨顯、義淨に對して

各々二人は日蓮が幼少の師匠にておはします、勤操僧正、行表僧正の傳教大師の御師たりしが、かへりて御弟子とならせ給しがごとし 日蓮が景信にあだまれて清澄を出しに 追てしのび出られたりしは天下第一の法華經の奉公なり、後生は疑おぼすべからず

といはれたのは是れである。豫言の聖者が豫言の第一聲をあげた日に、法華經の豫言は少しもたがはず、即日この迫害者を出して、法華經の眞實を堅固明確に證明した、いままた「則遣變化人」の經文が實となつて淨顯義淨は聖人の爲めに道しるべをする。豫言を實にしつゝたそがれの道をたどる聖人の歡喜の心はどうであつたらう。

華房の蓮華寺に暫時の滞在中、阿彌陀堂の開堂供養に四箇格言の再演があつたと傳へら

れてゐる。しかしいつまでも華房に在る事は聖人の本意でない、大法開宣の式なればこそ故郷の安房では擧げたが、それが済んだのに房州に居て何にならう。すなはち怨嫉の毒刃に送られて聖人は鎌倉に入る。

(7) 日蓮聖人によつて唱へられたる法華經と題目との意義

日蓮聖人が一代の佛教を研討して得たる中心は即ち「妙法蓮華經」であつた。しかもそれは聖人の私意ではない。「法華經」の前説「無量義經」にあきらかに佛自身が、法華經以前の諸經をさして、佛の本意の説でないといひ、或は假りにこれを擬し、或は誘導の爲めに低下の義を示し、或は凡夫二乗の執着をはらふといふ様に部分的必要があつて説いたのだといふことを明にされてある。すなはち有名な「四十餘年未顯眞實」の釋尊の自判があつて、「衆生の性欲不同なれば種種に法を説く、種種に法を説くことは佛の方便力を以てす」といふ方便の教へ、かりの教へである。永く人をしてまた世界をしてよらしむべきものではない。それ等は皆理體に對するある一種の見解を示したもので、全體的のものでないから、部分的要求には應じ得られても、若し人に他の必要が起つた時には役に立たなくなる、それでは徹底した教えでない。乃で時機が熟すると共に佛は「法華經」を説かれた。

1 佛教の中心たる妙法蓮華經と無量義經の大判

であるから法華經は釋尊における最後の經であると共に、本意の經全體の經である。今までは他人の意思に隨て、彼等の要求するものを與へて居たのが、法華經では、人の意思衆生の欲望などを問題にせず、宇宙法界における唯一人の覺者たる釋迦牟尼佛の思ふまゝに、眞理を宣説した。であるから法華經はある一面から見れば釋尊の前説を釋尊自ら破壊しくつがえされた様にも見えるが、それと共に、一切の前説を、なを完全に發達させて、而してその上に佛の本意の慈悲と智慧とを加えた大綜合經である。法然親鸞等の入々が、形式佛教と理窟佛教との弊にこりて革命を唱へた信行立ての法門も、法華經にはもつと深刻で正確なものがあつる。禪の自力だの、見性成佛だのといふものよりも、それ以上に徹底した大自力が法華經にある。眞言の即身成佛といふ現世思想も結構には結構だが、人間の煩惱といふものに對する處置がつかないばかりに、却て社會國家を毒する様になつたが、法華經では煩惱といふものを立派に菩提化して、毫も矛盾しない、徹底した大現世思想をうちたて、實際に人生國家の光りとなつてある様に、あらゆる思想の最深所を法華經に示して統融すると共に、佛の久遠の生命を以てこれを一貫した、これが法華經である。

今法華經の教理をこゝに説くとすると、到底この僅な紙ではつくされぬ、また自等

2 法華經にあらはれたる諸法實相

の様な幼稚なものでは其一斑をつくす事も出来ないが、要するに「法華經方便品」にあらはれた「諸法實相」の原理を以て宇宙法界の一切の事實と理法、實際を極め、それを佛の無始無終の生命によつて開顯して、天地人生を佛の智慧化し慈悲化する、すなはち妙法化するのである。これが法華經でなければ全くいられない事であつて、而してその實際應用は、本來の覺者たる釋尊のゆづりをうけて、やはりこれも本來の覺者の本來の眷屬たる本化上行菩薩等でなければこれを實際にあらはす事が出来ない。

そこで法華經がありがたい經典だといふ事は、およそ佛敎者といふ佛敎者は、實は皆知つて居るのである。知りながら法華經によらなかつたのは、一つは法華經の時勢でなかつたのと、一つは此れが根本の法であるといふ事が分らない爲めに、非常に義理のすぐれた經で、到底凡下のものゝ齒にはあはないと考へたからで、たゞ一人支那に天台大師あつて、法華經を法華經らしく解釋して、「諸法實相」の「十如是の法則」によつて「一念三千」の法門を説きあらはした。それでも、時世がまだ像法であつたから、「法華經」に本迹二門あるうちでは迹門だけしか説き得なかつた。すなはち法華經の形式だけは宣明し得ても、その生命を開拓する事が出来なかつたのである。迹門は要するに法華經の理的組織であつ

5 法華經の時勢と非  
法華經の時勢

て、事實的表現でない。

それといふのが法華經には現はれる時期がある、その時期をはずれてはいかなる大法もやはりきゝめがない。その時期といふのが末法である。末法になつてはじめて法華經の全體があらはれて實際の効用をする。末法といふのは佛が分けた時代の判別で、佛が入滅して已後、正法時代(千年)像法時代(千年)の次の時代を末法(萬年)といふので、此時代は名の示す通り、事事が末になつて混亂して来る。所謂諸道滅盡といふ状態を現出して、日蓮聖人の「正像の寺塔の佛像僧等の靈驗は皆消うせて」といふ時代相になる。いかなる教法も皆權威を失つて感化の實をあげ得なくなる。つまり時代の方が一切の道教より過上して悪くなるのである。正法像法の様に人がおとなしくさへあれば、あてがつた儘の教法でとなしく無難に得脱するが、時代が下つて人が放逸になると共に、教法を悪用すること、丁度現今の日本で不備な法律が惡漢の爲めに利用されて、折角の法律も惡人保護の爲めに出来て居る様な觀があるのと同じで、不完全な教法はともすれば人間の卑屈心、狡猾心、慾心を煽動して、相つれて世を惡化する。それといふのが、法華經以外の教法、思想では人間の煩惱心といふものを根本的に處置する事ができない。煩惱を抑制する、或は回避す

4 法華經の出現と正  
像末の佛の宣言

る。そも／＼末だ。抑へ様とするからよけいもちあがる、逃げ様とするから餘計逐ひかける。どこまでいつてもきりが無い。ところが法華經はそれ等の考へとは全然違ふ、煩惱結構、煩惱がなければ世界は滅亡する、人間もうまれない。随て煩惱は貴重なもので、世界存在の原力これにすぎたるものはない。たゞこのあしらひがわるいといふよりは煩惱の眞性を知らない爲めに煩惱の妙用をそなたつてこれを悪いものとする。そこで法華經では煩惱即菩提といふ原理を開明して、煩惱の處置を立派につける。煩惱即菩提、生死即涅槃、娑婆即寂光、この一連の法門は法華經を實際世間に現はした場合の法門で、この解決がつかなくつたばかりに、人は人生をけがれたもの、苦しいもの、と考へて極淨土を夢想したのである。しかも末法は現實の世界である、生存競争の世界である、實證實證の世界である。そういふ姑息な氣やすめに満足しなくなつて、あらゆる宗教はたゞ食後のジャヌターゼと同じ様に、慰安、慰藉などといふ生ぬるい名目の下に尊敬と侮蔑と相半する状態におかれた。

末法といふのはさういふ時代であるから、過去現在未來にわたつて三世を徹見する大智慧の佛はあらかじめ末法應時の大教といふものを説いておいて、どんなに亂雑な時代が來

5 法華經の行用に於ける「即」といふうまみ

5 末法應時の法華經

てもピクともせず、時代人心が悪ければ悪い程、教法の威力はますます加はつて、いやでもおうでもそれに従らなければならぬ様な大法をうちたてられた。それが法華經である。であるから法華經といふ經は最初から正法像法の二時代を眼中においてない、その通、末法正意の教であるから、天台大師がいかに法華經を巧釋しても、それは末法の爲めの準備であるのだから、最極秘奥なところは大師にも分らない。たゞ大師の立てられた道理はいかにも秀絶だから、天台以後の思想家は、いろ／＼にして法華經の道理をおのれの藥籠中のものとしようとした。

ところへ末法といふ時代の幕があく、佛の豫言は恐いもので、末法の幕あきは日本だけについて見るも恐ろしい状態を現出して、一例をあげれば僧侶が刀杖を帯してあらそうといふ非常な時代となつた。結果源平の争亂に主上は海に沈みたまふといふ國家的悲劇の演出について、承久の大亂、三上皇播遷、それに對する宗教の冷淡、佛の豫言實ならばどうしても法華經があらはれなければならぬところへ、末法に入つて百七十一年、東海の一隅に呱呱の聲をあげた一嬰兒は、三十二年の星霜を積んで、はじめて法華經の正義を人間の上にとちたてた、日蓮聖人である。釋尊は説いたばかり、これを實際に行つて行くも

6 末法の開幕(聖人の出世は末法に入つて百七十一年)



のはすなはち聖人である。聖人は法華經をどうして人間の上に被らせるか、こゝに聖人が法華經の行者として、本化上行の再誕としての苦心がある。その方法は聖人が所謂「三大事の秘法」で、一に本門の本尊、二に本門の題目、三に本門の戒壇。本尊は世界統一の標準、理想(世界)。題目は世界統一の記號、標榜(人生)。戒壇は世界統一の規模、實行(國家)、この三に經て人間を徹底して救済する。これが複製された法華經である。

この三大秘法は聖人の一生に順序よく發現する、いづれも法華經の豫言に適應して、着々と開展されたが、題目はすなはち標榜であるから、立教開宗とともにまづこの真理の名、記號、を人にしめして、こゝに真理の存在を明示した。法華經の全體を、七字につめて人類救済の要領としたのである。煩瑣なる教法理義はかゝる複雑なる時世に説くべくもない。簡短で、それで割のきく語、すなはち呪文の様なもの、而してそれが遺憾なく真理の全體をいひあらはしたものでなければならぬとして、日蓮聖人によつて唱へ出されたのが、南無妙法蓮華經の七字、即ち本門の題目である。妙法蓮華經といふのは、たい經典の名の様に解せられるが、實は其名に法華經といふ一經の歸着が示されてある。その名をよべば、法華經の全體はそれによばれて來るのである。すなはちそれに佛の慈悲も智

7  
三大秘法と聖人の一生

慧も全部こもつてゐる。我等それに南無する、南無は歸命といふ事で、我が生命を打ち込む事である。すなはち信心である。佛の智慧と、我等の信心とが、その五字七字の上に契合する、凡夫と佛とがこゝであふ、この點で一致する、それが本門題目の功能である。その手取りばやい成佛法を示されたのが、本化上行日蓮聖人の大権能である。

(イ)「正法」、「像法」、「末法」の三時代といふのは、釋迦牟尼佛が、自ら滅後の時代を三に分けられた豫言で、略して「正」像「末」の三時ともいふ。正法とは佛の遺教が缺損せず、在る間をいふのでそれが一千年。像法といふのは、像といふ字の示す通り次第に精神が衰へて形式だけになつた時代で、これがやはり一千年。末法は精神も形式ももなくなつてしまふ時代で、これが一万年と定められてあるが、この時間的推移變遷を一層明確にするために、佛は「大集經」の中に更に「五箇の五百歳」といふ豫言をせられた。それは正像の二千年と末法のはじめの五百年とに就て五種に分別して時勢を適確に知らしめる爲で、各五百歳にそれ／＼下の如き名稱が附せられてある。「解脫堅固(第一の五百年)」、「禪定堅固(第二の五百年、已上正法)」、「讀誦多聞堅固(第三の五百年)」、「多造塔寺堅固(第四の五百年、已上像法)」、「開演堅固(第五の五百年、末法の初)」、「解脫堅固」は佛の遺教を修行して證するものある時代。「禪定堅固」は解脫が衰へて禪定(座禪して心をなれる修行)で補ふ時代。「讀誦多聞堅固」は、禪定もだめになつて學問思辨で塔をあげようとする時代。「多造塔寺堅固」は學問思惟も面倒になり、佛像堂塔をつくるのが功德だと思ふ時代。「開演堅固」は佛法の中で互に論議執執して、その爲め却て佛の正法が隠れてしまふ時代。世間に就ていへば、生存競争の修羅闘争場裡。「堅固」といふ二字は、この豫言の適確な事を示した語で、佛敎史を通観すればこの豫言が一分一厘も違つて居ない事を發見する。また世界人文の歴史に於ても、大體この範疇を出ないことは、我等をして、いよ／＼佛の豫言に對する信仰を確立せしむるのである。この三時代のことを詳しく記すと面白いのであるが、他の叙述との均衡上省略したのは遺憾である。

(8) 聖人の鎌倉入と事業の基礎

聖人が故郷の安房で大法開闢の式をあげられたのは房州が聖人の生誕地であるといふ因縁に於て、是れが報恩の意を表された事は疑ふべくもない。この報恩といふ事はいろいろ複雑な意味ではあらはされた。或は虚空藏菩薩の恩を報ぜんが爲めに迫害をしのんで法華經の大義を唱へ出したといふに徴すれば、房州の開教は其意味もあらうし、安房國東條郷は邊國なれども日本國の中心のごとし其故は天照大神跡を垂れ給へり……日蓮一闍浮提の内日本國安房國東條郷に於て此正法を弘通し始たり」とあるによれば、所謂國土の恩を報ぜんが爲めに、特にこの日本國中での靈國をえらんだといふ意味もある。種々な意味からして、開教は必ず房州でなければならなかつたが、同時に此主義の宣傳は必ず鎌倉でなければならなかつた。けれど鎌倉は事實上の中心勢力である。朝廷の尊嚴は尊嚴としても、一切左右する権能は鎌倉にあつた。當時の政局を観察すればまことに慨嘆に堪えないが、乍併冷靜に觀察すれば随分と滑稽なものであつた。鎌倉政治の實際はともかく、表面の主體は鎌倉將軍である、將軍の御教書によつて萬事を決濟する。其將軍といふものをばいかにして頂くかといふと、源家絶滅の後には朝廷の勅許を得て鎌倉の主となり、將軍の宣下もあ

1 安房の開教と鎌倉の弘教

る。表面どこまでも臣下である。しかも其ゆるされて將軍となつた臣下が自由に皇統の廢立を議するといふのは何等の矛盾であるか。それも詮じつめれば將軍に何の權威もあるのではなく、たゞ一執權家の勢力がそうさせるのであるとは、どこまで人を馬鹿にした政治であらうか、およそ世に不思議な政治といつてもこの位不思議な政治はない。日蓮聖人の主義を以てこれに對すれば極端と極端である。聖人を真理の主體とすれば、執權によつて代表された鎌倉幕府は背真理の主體である、正體である。謗法の根元である。念佛、眞言、禪、律以上の巨魁である、元品の無明である。この邪想を打破り、この魔心を折伏し得るものは聖人の主張をおいて外にない。なければこそ梅尾の高辨の學徳を以てしても義時泰時の非義を糾明する事は出来なかつたではないか、聖人が身命をすて、法華經を弘通すべきところは鎌倉を措いて外にないのである。

聖人が房州を出發したのは恐らく五月の半であつたらう。華房を出て小湊へかへり、弘教の首途に御兩親に對して先づ法華經の大善を進めた。思ふに此數日の間、師匠道善房と御兩親とに就ての聖人の折衝はかなりに精神的苦痛をとまなつたものと見えて、聖人後年此事を追懷せられて、「父母手をすりて制せしかども、師にて候し人勘當せしかども」終に

2 兩親の受戒と聖人最初の弟子

法華經を唱へ通したといはれた。まことに年老た父母の心、愚痴な師匠の心には、そなたやすく法華經の正義は解せられなかつたであらう。しかも愚痴な師はしばらく措くとするも、弘教の最初に父母を濟度せずして何面目のあるべき、聖人が大孝の至情はたちまちに貫徹した、御兩親は聖人化導の最初の弟子として、戒を受けた。聖人は立教開宗の時已來蓮長の名を日蓮と改められたが其日蓮の名を父と母とに分つて、御父を妙日、御母を妙蓮とよばれた。この妙日妙蓮の戒號に就ては古來説があつて、先づ父に妙日と授け、母を妙蓮とよんだので、その日と蓮とをとつて聖人自らの名としたといふのが從來の定説であるが、「寂日房御書」の儼存する今日、此説のあやまれる事はいふまでもない、

一切のものにわたたりて名の大切なるなり、さてこそ天台大師五重玄義の初に名玄義と釋し給へり、日蓮と名の事自解佛乘とも云つべし、かやうに申せば利口げに聞えたれども、道理のさすところさもやあらん、經云如日月光明能除諸幽冥、斯人行世間能滅衆生闇と、此文の心よく案じさせ給へ、

佛教に於て、名、題目を重んずる事はいふまでもない、南無妙法蓮華經といふ名に眞理の當體があらはされ、日蓮といふ名に人類の救済が意味される。その大切な名である。「自解

3 日蓮といふ名のよつていづる所

佛乘ともいひつべし」といふほどの名を、父母の名から一字宛頂戴したといふ様な事は斷じてない。日蓮といふ名がいつから用ゐられたかといふに就ては以上の如な説があつて、隨て兩親受戒以後に獲られた事になつてゐるが、恐らくそんな事はあるまい。是れは必ず立教開宗の前か、開宗と同時に得られた名であつて、聖人一生の功德一切此名に盡在するのである。

兩親の授戒を終つた聖人は驀然として鎌倉に殺倒した。時は建長五年五月の半、節は漸く雨期に入つて、野山の新緑はあたゝかい雨にけぶつて、天地はたゞ潤に滿つる時、聖人は美しい故郷の山河をあとにして靜かに房州を出た。豫言者は郷に入れられずといふ、素より郷にとゞまるべき豫言者ではない、謗法怨嫉の刃に送られての首途は、新装した山河との對照の中に、悲壯にして花やかな感じを與ふるのである。傳説によれば聖人は陸路房州の西海岸に出で、今南無谷と稱される處から船に搭じて相模の三浦半島の米ヶ濱（今の横須賀）に上陸し、七里の險道をこえて鎌倉に入つた。この時「日蓮水」の傳説がある。鎌倉に入つた聖人は名越に居を占めた、恐らく是れは修學の時にもべた名越の尼などの手引で、且つ鎌倉中尤も閑靜な土地であつたせいもあるだらう。鎌倉の名越には今日蓮聖

4 鎌倉に入る

人の草庵跡と稱する寺が三軒あるが、そのうちのどれが眞であるか分らない、想像によれば、松葉ヶ谷の安國寺と妙法寺との一帯が多分眞に近いかと思ふ。

鎌倉に出て後の聖人は一意専心法華經の弘通につとめられた。聖人がいかに稀世の英傑であつたとはいへ、其當時の聖人は世間に對してはまだ何程の地位をも有して居ない。清澄でこそ、二十年の修學を終えて連長は光りかゞやいて居ても、鎌倉では誰れ知るものもなかつた。且つ聖人は何等確たる根據地を有せられるものでもない。加ふるに鎌倉の宗教界は、かつて聖人が修學の時とはいたく趣をことにして、どの宗教もどの宗教も一様に勃興の機運に向ひ、皆相當の人材をあつめて、まさに平安の宗教界に對抗し得る程の氣勢を有してゐた。光明寺には念阿良忠あり、新善光寺には別當道教あり、壽福寺には悲願房朗譽(？)あり、大倉の阿彌陀堂には東寺第一の智人、加賀法印定清あり、宋僧道隆、時頼の請によつて建長寺をたて、工まきにならんとし、各宗盛を競ふ有様實に一代の壯觀であつた。此中に突撃した聖人は年齒僅に三十二、しかしながら一代佛經の起盡はとくすでにありきらめて、本化上行の自覺は内心にはすでに牢としてかたい。今聖人の鎌倉出陣にあつて、各宗かくの如き壯觀を現出する事は、聖人の何より希冀する處である。これまた一に

5 聖人の弘通と鎌倉の佛敎界

時勢の然らしむるところであつたらう。

此間に處して聖人はいかなる弘敎法をとられたかといふとそれは街頭布敎である、今でも鎌倉へゆくと、小町辻説法御靈蹟といふものがあつて、そこに聖人が説法の時に腰掛けられた石といふものがあるが、恐らくそれは小町ばかりではなかつたらう、いかなる所へでも、およそ人の集るところへは聖人のすがたを見ないところは無いといふ有様であつたに相違ない。此、布敎説法における新形式はかなり鎌倉の人々を驚かしたであらう。説法といへば金碧莊嚴の堂の中で、高僧然と構へた僧侶が靜に經を講ずるものと考へられた當時に、人群雜沓する街中で、青空の下に絶叫する魁偉の沙門を見出した時の人々の驚きはどうかであつたか、しかもそれが四箇の大言であつて、念佛宗は無間の業因である、禪宗は天魔の所爲である、眞言宗は亡國の惡法、律宗は國賊といふ、耳新しい宣言をきいては足をとめずには居られなかつたであらう。

突嗟の間に一世を警告するには、まことに街頭布敎といふ新形式によるの外はなかつた。同時に聖人の敎法の組織からいつても、結縁といふことに就てはこれが最上の方法だからである。法華經といふ經典には、經典の名をきいただけでも聞いた人は救はれるとい

6 小町の辻説法と街頭布敎の新形式

ふ威力がある。理解を用ゐず分別を用ゐずに、一度きいてさへあれば、當人が知らないうちに其佛性はよび起されて、いつかは成佛するの期がある。きいて信受してすぐ大法に入る人とはもとより時間的に成佛の遅速はあるが、一度でも觸れさへしたら、それで其人は救はれるといふのが、法華經の尊貴なところである。随てかゝる應急の場合には、先づ法華經といふ名をきかせて置くの要がある。更にきかせて置くといふ事を一重強めて、驚かして置けば、其心に印象する事も強い、そこで法華經——念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊といふ非常に峻烈な調子となつてあらはれる、これを折伏といひ、その折伏は法華經の種をうゑつけるといふ大化導になるのである。したがつてきかせることを詮としてこの縁によつて佛種を起すといふ宗教は、一人も多く觸れしめ、一人も多くきかせる爲めに街頭說法といふ事を以てその目的にかなはずとするのである、されば此教の導師たる聖人は、此教の題目を「聲も惜ます唱ふるなり」といひ、「日蓮大高聲を放つて申す」ともいつて聲といふ事に非常な意義を附する。既に佛の三十二相に於ては、梵音聲といふ事は尤も重大なる意味をもつて居るのである。それではなぜかう聲を重んずるかといふと、人間の世界では聲といふものほどよく人の心を傳へるものはない、文字は形の外に多くの意味

を示すべく困難だが、聲は一つの聲の中にも無量の意をこめる事が出来る。それに人間の五官の中では耳が一番鋭敏である。佛教ではいふて、「此土（此世界のこと）耳根尤も利なり」と云ひ、その利なるに乗じて、佛微妙の教を受けしめん爲めに、佛は微妙の聲を以て法を説く、その微妙なる聲をなづけて梵音聲といふのである。

この街頭說法といふ形式の中にも聖人の宗教の偉大なこと、公明なこと、天真なことなどが窺へる。昔印度に發生した釋尊の宗教が、支那のいろ／＼な人師の手に觸れるまでには多くの自然味を包容して居たのが、支那へ來て形式儀相の上に甚い變化を生じた。尤も是れは單に支那といふばかりの影響ではなく、像法といふ時代的感化であるけれども、あかるい印度の露天の說法が支那のくらしい殿堂の中にかかれる様になつて、佛教はかはらずには居ない、そこに非常な變化がある。露天の禪定と屋蓋の下での入定、これは大變なちがひである。それは野天でないといふ事がわるいとはいへない、たゞ其天真を表明し、眞理を開拓するには、大自然の眞中につゝ立つて天人を叱咤するといふ街頭說法は到底殿堂内の宗教の比し得べきところでない。この街頭說法は、聖人の鎌倉在任中は常に行なはれたのであらうが、新宗教樹立の建長五年、六年、七年は尤も盛に行なはれたらしい。隨

人間の感覺の中で耳が一番鋭いといふ事は、我々の日常にも経験されるのである、癡醉をかく時など、眼鼻などはすぐ感じなくなるが、耳はかなり長く感じて、かつ一番早く感じるそうである。

つて聖人の教團における有力者はかなり此街頭説法の聴衆から出たようである。

この時、聖人に對する有力なる一助勢と見るべきは、聖人の恐らく最初の弟子たる辨阿闍梨日昭の來り投じた事である。(但し是には異説がある、予の考へではどうも此の時の入門は事實ではなからうと思ふ。が、未研究なので其儘にしておく) 日昭は聖人より一歳の兄である、年輩から見ても経路から見ても恐らく聖人における恰好の相談相手であつたらう。日昭は宗史の傳ふる所によれば、下總海上郡能手の領主印東次郎左衛門祐照の三男で、母は工藤祐經の女だとされて居る。はやく出家して叡山へのぼつた、近衛左大臣兼經の猶子となつて、法印權律師に任ぜられた。つとに慈覺大師に對して疑をもつて居たが、論議の席でそれを發表したところ、汝は蓮長の徒ではないかといはれて聖人を慕ふの餘り尋ねて來たといふのであるが、此説はあまりあてにならない。恐らく叡山で早く聖人の義に接して敬慕の餘り比叡を去つたのであらう。宗門の傳へによれば聖人は日昭の來化を喜んで、迫害重疊の中いかなる禍の身に及ぶかも知れないからといふので、日昭に事ある時の第二陣の編成を囑托したといふことである。建長六年(聖人三十三)には、日昭の甥吉祥麻呂も聖人の門に來り投じた、此吉祥麻呂が後年の日朗である。多くの弟子の中でも、日

7  
日昭及び日朗の來  
投と在俗の諸弟子

朗が聖人に對する至孝の情は特に群をぬいて居た、且つ頗る有徳の性格であつたと見えて後年此人の門からは多くの英才を輩出した。是等の二弟子の外に、此二三年の間に池上太夫志宗仲、同兵衛志宗長、荏原義宗、江馬入道の近江四條三郎左衛門尉頼基、進士善春、房州天津の領主工藤左近尉吉隆、甲州波木井の領主波木井實長等が聖人の門に歸した。また建長六年には聖人が房總を旅行して、此時に富木五郎胤繼が聖人の化に服したといふ傳へがある。富木、太田、曾谷等の諸大檀越は、聖人と民族的關係があるらしく推測される、隨て一端化に服してからはいづれも有力な信仰者となつて聖人の化導を助けた。

教効は日にあがつて、聖人は續々同志を得ると共に、反對者も續出した。けだし當時の宗教界にあつては、聖人の四箇の格言の如き義味に對する研鑽は到底覺束ない。當時の宗教といふものはほとんど各宗共通の宗教であつた。隨て道理の批判などといふ事はとんとない。眞言の僧も念佛をとへる。念佛の僧も律僧によつて戒を受ける。めい／＼受持受持があつて互に融通しあうといふ状態であつた。病氣災難の加持祈禱を眞言僧が受持しては道路普請と橋をかける事は律僧が引受けるといふ有様であつた。いざ臨終となると念佛僧が來て引取るといふ萬事が充協氣分の宗教状態であつたから、四大格言に對してはたゞこ

8  
鎌倉宗教界の狀勢

れを罵詈ばりとき、誹謗ひぼうと解するはかはなかつた。營業妨害と考へるより外はなかつた。これは今でもやはりかう考へて居る人があるが、四箇の格言といふものは決して罵詈ではな  
い、まして折伏せつぷくは立宗りつしゅうの方便などといふ様な淺はかなものではない。よく一知半解いちはんげな人々  
が、聖人を評して、他宗を罵らすとも、おとなしく宗旨を弘める道はあるといふ。なるほ  
ど他の宗教に對しておのれも一門戸を張るといふのが目的ならば、既成宗教の及ばない範  
圍があるからそれを開拓すれば足りるのだが、聖人の解された宗教、就中佛法といふもの  
はそういふものでなくて、道理を主體とするのである。道理とあらばその道理に幾通りも  
あつては人が取捨しゅしゃにこまる。東西南北いづれの道をとつても同じところへ行けるとはいへ  
ない。佛法の目的は一、人間と世界と爲めに、完全なよりどころを與へるのである。ま  
るで方向の違つた教があつていゝといふ事はない。たゞ物には經路といふものがあるか  
ら、佛釋尊はだん／＼淺いところから説いて次第に深遠の義を示した。それは赤ん坊から  
大人にはすぐなれないと同じ事で、教育でいへば小學中學大學と次第して進む、小學だけ  
でも中學だけでも、當人が苦情さへいはなければ別に構はない様なものゝ、いざ就職の口  
をさがすとなればやはり大學でなければ相當の位置は得られないと同じ様なもので、しか

し宗教といふことは畢竟して眞理の探求が目的だから、一度び無上の道理が示された以上  
は、その一道のほか他をたよつて安心を求めようとする事は出来ない。それは究竟の安心  
を人に與へる道ではないからである。そこで佛は「無二亦無三」といひ、聖人は「佛法と  
申すは道理なり、道理と申すは主に(さへも)勝つものなり」とて、決着を示された。此大  
きな見地からはじめて眞實の宗教批判がなり立つのである。

いかなる宗教家にも、必ず批判と建設との二つがある。あなたがちに宗教家と限らない、  
學者、思想家、聖人、賢人、何等かある一つの思想學教を以て世を啓發しようとする人々  
には、批判と建設とは必ず具はるべき案件である。しかも偉大なる宗教家の多くに、其建  
設と相均あひひとしき批判があるかどうか、建設とはすなはち顯正で、批判は即ち破邪である。法  
然上人の「選擇集」其は法然房としての顯正であつて、その顯正のうちに批判があるが、  
其批判は顯正の爲の批判であるからつまり手段的である、聖人の四箇の格言の如き積極的  
態度をもつて居ない。顯正と同じ程の精神意氣でなされた破邪といふものでない、それは  
顯正そのものが根本的のものでないから破邪も勢ひ不徹底となるので、隨てどの宗教でも  
他に對して徹底的にそれが悪いとはいひ得ないのである。是れに反して聖人の宗教は全然

他の存在を認めないのである。すでに一度び太陽が出て後は、燈光も星月の光も何の効用もない。法華經は太陽で、餘の諸宗諸經は燈炬星月、それに執着しようとするからその迷執を斷破する、それが四箇の格言である。であるから大破折の根元は本化の菩薩が人類を哀憐救護する大慈大悲から出るのであつて、方便でもなければ罵詈雑言でもない。その「四個の格言」とは何かといふと、簡単にいへば、

一に念佛無間、といふのは、法然上人の立てた念佛宗といふものは、無間地獄の業因であるといふこと、それは一切衆生が佛になるたゞ一つの道たり法たる法華經を捨てよと説いたからで、その行爲は一切世間のものが佛になる種を斷滅したのであるから、三世十方の佛を殺したと同じ罪である。法華經に、「若人不信毀謗此經、即斷一切世間佛種、乃至其人命終入阿鼻獄」の明文があるによつてこれを無間と斷破したのである。しかもそれは、たゞ法然上人の念佛宗ばかりでなく、一切の念佛思想の謗法者に適用さるべき破折であつて、念佛の教理其ものが、すでに此土の教主たる釋尊を捨て、他方無縁の阿彌陀を念ずるといふ佛の方便の説に固執してそれを眞實と思ひ僻めたものであるから、法華經があらはれた後もなをそれを捨てなければ、謗法罪となるのである。且つこの國土の佛をす

「念佛無間」

て、他の佛に依頼するといふことは名分において不可なるばかりでなく、ありもしない空想の國土を豫想して現實の生を無視しようとする。また法華經は難行道だから、末法の人間にはとても行へないとか、人間本來の菩提心を否定してたゞ本願力によるといふ様な事は、教法の不徹底な道理に、人間の消極的な見解を結合せしめたもので、その結果は人の心性の上に、依頼心、卑屈心、惰弱心、背本思想、厭世思想などを生ぜしむるなど元來が勃興的な人間の本來性を無視した、到底存立をゆるされない惡思想惡見解であるから、この邪想妄見を根本的に絶滅すべく法然の念佛宗を標準として萬世に下した大々の教訓、徹上徹下の格言、その根元は本化上行の智慧と慈悲とから出て居る。早い話が念佛の思想を認容して、正直に其厭世觀を實行したら、人は念佛に歸した其當日に自殺しなければならぬ譯である。眞實の念佛行者には此現世といふものは汚濁極つたもので、到底生て居られる筈はないのである。そこで人々皆此考に任して念佛宗徒一人も残らず自殺し終つたら此國土はどうなるか、幸に此土に對する執着が、念佛の宗旨に徹底させないからいゝようなものゝ、正直な念佛行者ばかりであつたら、此思想の傳播と共に、國家は次第に人間の數を減じて、しまひには亡國とならなければならぬ、危險此上もない思想で



ある、であるから是れを以て無間地獄におつる惡業だと、極樂淨土と反對の恐怖を與へて覺醒を促すのである。

二に禪天魔 禪宗の思想は「教外別傳」といつて佛の經典に依らない、「見性成佛」といつてもつた儘の心が佛だといふ。すべて教相といふ佛敎の規矩を無視し信心に伴ふ修行を越階して、食ひたい飲みたいの凡妄の心其儘に佛だと考へて、釋迦何物を我れ何物ぞなどといふ。佛弟子の姿をして袈裟法衣を着しながら、佛説によらないで自見を打立てたのであるからこの我慢な心を折伏して天魔の説といふ。「涅槃經」にも「佛の所説に依らざるものは魔の眷屬なり」と佛は誡められてある。總じて佛説を輕視するといふ觀念は、畢竟條然たる規矩をうるさいと思ふ不精ものゝ考へが土臺であつて、方今の無統制な自由といふ思想も根元同一である。一時文壇に自然主義といふ思想がさかんにうたはれた時、血氣の人々はいづれも其奔放な點に共鳴して恐しい流行を來したものであつたが、妻をもち子をもち、實際生活に觸れ、家庭といふものゝ味を経験して來るとそれを正直に實行された日には大變だからいつか其自然主義も自然消滅で、一時は人生の實際に行なはれて時めいた思想も、單に「文藝上の主義」といふ様な事に範圍を狹めて來た。その奔放自恣な主義が、

11 禪天魔

傾向としては禪宗其儘である。此點からは、禪宗は佛敎中の自然主義とも目すべきものであらう。それを極端に主張する結果、佛説を虛妄だと誣いたのは、まさしく佛の誠諦の語を毀謗した事にあたるので、佛法の秩序を破壊した謗法罪を構成する。また潛上にも凡夫の妄心を其儘佛だといひ、それを悟つた積りで「謂己均佛」のは、下剋上の亂心である。かゝる放逸の思想は人類世界の禍根であるから天魔を呵責して排斥したのである。

三に眞言亡國、弘法大師空海の立てた眞言宗は亡國の惡法であるといふこと。空海は其敎相判で十住心を釋して其中で法華經を「第三戲論」と下し、現實の教主である釋迦牟尼佛を捨て、空想の佛大日如來を本尊としたのは、つまり本來の君主に背いて潛逆の主に仕へる叛逆と同じ事である。殊に法華經は佛が自ら「諸經中王最爲第一」と説れたのを第三と貶したのは明かに叛逆思想である、全體大日經といふ經は一代佛經中でもそう大した地位を占める經典ではない。それを何の據あつてか大日經を密敎だといひ法華經は顯敎だといひ、顯敎は密敎に劣るといひ、剩へ釋尊は法、報、應、三身といふ佛に三通りの身がある中では應身の劣佛であつて、大日如來は法身の佛だといふ横議を立てた。法身の佛といふのは理體をいふのだから、それが言説を以て法を説くといふことは絶對にない事であ

12 眞言亡國

「法身は佛の理體、報身は佛の智身、應身は正しく形體の佛。」

る。其外天台大師の一念三千の思想を取入れたりなどして、大體の組織が誑惑的であると  
ころへ思想の骨子が全然叛逆的であるから、かゝる僧逆の思想は國家の正義を害し、名分  
を紊り、大義を失ふ基であるから、到底世界別して此日本國に存在せしむべきものでない  
としてこれを亡國の惡法と呵した。實際またこの眞言宗といふものが、日本の國史の暗黒面  
に非常な活躍をして、その醜惡面を代表してゐるかの觀あるは、まさしく亡國の活例とも  
いふべく、また社會的には呪咀などの惡風を残し、一國風氣の上に多くの惡弊を残した、  
小さなたとへでも「丑の時参り」などといふ奇怪な風習は皆眞言の感化である。かういふ  
思想の根元は、皆おのれの慾望を遂げるといふ事を認容するにあるのだから一面かういふ  
凶險な風があると共に、慾望追求すなはち肉慾等の方面に發展して、大聖歡喜天の信仰な  
ど、姪靡な風習を残して、國性を靡爛させた、これが亡國の惡法でなくて何であらう。

四に律國賊、律といふのは戒律の事で、佛法の修行に就ての極めて煩瑣なる規則をいふ  
のである。しがし佛法の中でも小乗は戒律を基礎とするからやかましい事をいふが、大乘  
でいふ戒は、戒の精神に於ては同じでも、應用はまるで違つて来る。それは小乗の様なや  
かましい戒律によつて居たのでは大體人生の營みが出来ない、小乗の機類といふものはも

とく個人修的修行觀想が主であるから、社會がどうあらうが、國家がどうあらうが、自  
ら清くし自ら得ればよいが、大乘はそうはいかない、であるから大乘の戒といふものは小  
乗よりはすつと樂になつて居る。まして末法は無戒といつて、そいふ些細な規定や規律  
位では、鬪諍堅固白法隱沒といふ位の大規模に亂れてゆく世界をどうする事も出来ないか  
ら、もつと根本的な戒を立て、簡單で明白で誰れでも守れて、而して人類萬般の規定と  
なる戒によらなければならぬ。その末法の戒といふのは法華經である。その法華經にそ  
むいて小な戒に拘泥して形式的に律義をかざるといふのは、ありがた相に見せようといふ  
一種の瞞着である、全く人を惑はす賊であると判定する。

以上が四箇格言の大體であるが、これは何も必ずしも此四宗だけと限つたわけではな  
い、此四宗の外でも、法華經に背く宗旨は皆諸宗無得道墮地獄の根元と定められて、其  
宗旨の傾向によつて、無間なり天魔なりのいづれへか攝せられる事はいふまでもな  
い。また上記の四宗といへども、互に皆無間、天魔、亡國、國賊の義を兼ね具へて居る、  
結局は皆謗法墮獄の義なのである。そこで此四箇の格言といふものが聖人の義の中でい  
かなる義門に當るかといふと、これは聖人化導の大格であるところの「折伏立教」すなは

ち折伏的に法華經の正義を宗教として立てたといふことの実際應用に當るのである。全體折伏といふのは何であるかといふと、其語義は破折屈伏、或は破折調伏であつて、惡義の存在を絶對的にゆるさずどこまでも破折して屈伏させることであるが、その折伏は、折伏を手段として教を立てるといふのでなく、折伏的に教を立てるといふのであるから世間の人の考へて居る折伏とは大變違うので、下種の化導には是非この折伏を用ひなければならぬからである。けだし本化の折伏といふ事は全世界を根本から動して覺醒を與へるのであつて、根本から動かすといふ事は容易な事でない、しかもそうしなければとても本當の佛性は動き出さないから、折伏を加へる。であるから其折伏は日蓮聖人の教判たる「宗教の五綱」といふ嚴密な教義から出發するのである。こゝで注意を要するのは、五綱の教判といふものは、聖人が伊豆へ流罪されて、その流謫中にあらはされた宗教批判であるが、事實的應用はすでにその發表に先だつてあるのである。これはなぜ發表がおくられて實行が先だつたかといふと、聖人の内觀では建長五年の旭の森開教已來、聖人は「法華經の行者」で「本化上行の再誕」であることは自明の道理であるのだけれども、法華經の行者には自ら法華經の行者たる條件があつて、その條件を具備した上でなければ世間的に本化上行の

認識が成立しない、そこで佛によつて豫言された法華經の行者たる條件をみたす迄は本意の發表をわざと控えてしない。けれども事實は本化上行たるに相違ないのだから、立教開宗と同時に聖人の中心思想たる三大秘法の中の本門の題目も唱へ出されれば、四箇の格言も即ち應用された、この點が實に聖人が聖人中の聖人である證據である。聖人の思想の開展に就て、やはり我々普通人間と同じ様な思ひをして、事件と時間とによつて次第に進歩したものだと考へる人もある様だが、これは聖人に對する非常な誤解である。聖人一代の化導は、聖人が悟りを開いた日にちやんときまつてゐる。一生の割あてがすつかりすんで居る。事業の方針が明白に立つて居る。またどうもそれが立たない位ならこの複雑な人間の世界を救済し得るわけがない。天文學者はその精密な計算から、將來出現すべき彗星の形狀、位置、時間等を知り得るではないか、その位でなければ文學者とはいへない。いやしくも本化上行といふ宇宙の根本的人格が、根本的事業としての人類救済に就て、大方針を設定する其一代の化導が、はじめから定まつて居ないわけではない。たゞその發表には自ら時間があつて、其つばへはまらなければ施すとも功がないからあらはさないの、時が來ればそれに隨て開出される。すなはち天地の呼吸と一つになつて、はじめてこの根本的

聖業が成就するのである。さればこそ「念佛無間」等の「四大格言」は、聖人の理想が貫徹する際までは、人間別して日本國民が忘れる事の出来ない、慨世憂國の聲であるのである。

(注意)日蓮聖人の折伏といふ事に就ては頗る深刻な研究を要するのであつて、到底此書の著者などが其淺薄な知識に於てはのべられないところである。折伏に就て十分に知りたいと考へられる方は必ず専門家に就て研究せらるゝがよい、而して其研究については是非 田中智學先生の名著「本化攝折論」を一讀せらるゝがよい。同書は、日蓮聖人の宗教における攝受と折伏といふ二大問題に就て尤も徹底した研究を發表されたもので、同宗における數百年來の疑問を解決せられたものだ相である。眞宗の學者なども頗るこれを稱揚して居る。また此次手をもつて日蓮主義を研究せんとせらるゝ方 爲に 研究の良書を御紹介せば、此書の著者が今迄接した所では田中智學先生の「日蓮聖人の教義」を讀まれるのが一番便利かと思ふ。外には日蓮主義の全體に就て講述したものはあまりない様である。たゞ最近本多日生上人の「日蓮・義綱要」(?)とかいふ本が出たそうである。これも定めし結構なものであらうと思ふ。

### 第二章 「立正安國論」と「伊東流謫」の前後

(文應元年より  
文永四年迄)

#### (9) 正嘉の大地震と正元の大飢疫

建長五年、六年、七年と、開宗已來すでに三年を経過した、この間に教勢はかなりの發展を見て、教團としての實力は十分生じて來た。同時に時勢もまた日蓮聖人の活動を促す様に局面を展開して來た、それは康元から、正嘉、正元と引續いた疫病と天變と、飢饉と地天とである。これに依て聖人の行動がいよいよ本領的になつて行くのであるが、其前に是非記さなければならぬ事件がまだ一つある。其は「安房の領家と極樂寺家との利權爭奪の紛争」である。此事は殆んど他に記録がない爲めに、從來の諸傳のいかなるものにも記載された事がないが、聖人の自記に此事がしばしば出るのをこれを逸することは出来ないのである。そこで此事件の真相は如何といふと、北條義時の三男で、執權泰時には弟、執權經時、同時類には叔父にあたる極樂寺の入道重時が、房州の清澄山及び其周圍を、その領家の手から奪つて己れの勢力範圍にしようとした運動をいふのである。此事は正史に

正嘉の大地震と正元の大飢疫

1 時勢の本領的促進と極樂寺入道重時の一小事

何の記載もない、いかに「吾妻鏡」が鎌倉時代の正確な史料であつても、斯いふ秘事に至つては残念ながら何の記載もない。此點に於ては日蓮聖人の遺文は、一面鎌倉時代政治史の秘録ともいふべき貴重なものである。極樂寺重時がどういふわけで清澄一帯の地を己れの手におさめ様としたかは甚だ不明であるが、清澄といふ山は、現在でもなを非常に豊富な森林を有して居る相だから、其當時にあつてはかなり豊かな財源であつたと思はれる。それに鹿などを飼つてあつたりして、森林の収益だとか、鹿および鹿以外の鳥獸からあがる獸皮羽毛其他の収益とかいふものも相當にあつたらしく考へられる。それ等の點に着眼したものと見えて領家の手から重時が奪はふとしたのであらう。

それを奪ふといふに就て重時がどういふ方策をめぐらしたかといふ、藤次左衛門入道（いかなる人物とも分らない多分重時の輩下であらう「吾妻鏡」建長四年三月六日の條に藤次左衛門尉泰經が、宗尊親王の下向に就て使者として上洛したといふ記事がある、或は此人かも知れない、泰經といふ名から考へると、城系の人だらうと思はれる）といふものと共に先づ安房の國東條の地頭東條左衛門景信を語らつて強壓的に清澄を奪取しようと試みた。そこで極樂寺重時に語らばれた東條景信はどういふ方針に出たかといふと、清澄の

城系、秋田城介の系統の意味、城といふとが、平左衛門尉の「平」と同じ意味で姓の様になつてゐたのである。すなはち安

山の飼鹿を狩取るといふ亂妨な事をやると共に、他方には清澄山内の房に居る僧侶等を念佛者の所従にしようとした。ところでなぜ重時がかういふ亂暴な事をやりはじめたかといふと、單に利權を獲得しようといふ考ばかりでなく、やはり一面には宗教的感情が加はつて居たのであらう。それは景信が清澄の僧侶を念佛者にしようとしたのでも分る。また地頭東條左衛門景信と申せしもの、極樂寺殿、藤次左衛門入道、一切の念佛者にかたらはれて

達氏の一族であらう

とある聖人の自記に徴しても分る。さて當時の清澄といふものは、清澄山全體が清澄寺の所有であつたのではなく、大體は領家の有であつた上、かつ清澄寺は領家の菩提所ででもあつたと見えて、清澄全體は有力なる領家の勢力範圍であつた。

處が此領家が何物であるかは目下の處先づ不明としなければならぬ。宗史のある傳へによれば、聖人が領家の尼といはれた名越の尼といはれるものは、名越朝時のよめだといふ事であるが、どちらかといへば是れは信じがたいのである。名越朝時はいふまでもなく極樂寺時の兄で、此紛争時分にはすでに歿してゐるから、後家尼一人ならば重時が随分さる野望を起すまいものでもないといふ事は想像に難くもないが、朝時には光時（江馬越

領家は何人なるか

後入道) 時章(名越尾張守) 時長(備前守) 時幸(修理亮) 時兼(左近太夫將監) 教時(中務權太輔) 時基(刑部少輔遠江守) 等數多の子があつて、建長五、六、七年には時幸(寛元四年歿) 時長(建長四年歿) 時兼(建長四年歿)を除いては健在だつたと思はれるから、重時がいかに一門の故老であり、執權連署の要職に居たといへ、血で血を洗ふ争は得しなかつたかと思はれるのである。しかもなをそれは斷言し得ない、領家には聖人が領家の、尼或は名越の尼といはれる大尼の外になを新尼といふものがあつて、これが名越尾張守公時の妻だといふ傳へがあり、聖人の檀越で岡宮妙法尼といふのは名越時章の娘だといふ説もあつて、何等か根據もあるらしいから暫く領家といふのは名越家ではないといふ斷言は見合はせるが、しかし名越朝時には二人の妻があつて、(今二人とは斷言は出来ないが、或は二人以上としなければならぬかも知れないが) 一人は時章の母でこれは大友豊前々司能直の女である、一人は教時の母でこれは泰時の叔父にあたる修理權太夫時房の女である。この二人の妻のいづれについて見ても聖人とは縁が薄さうである、が宗史にも傳へがある事だから疑は十分存て置く。そこで此紛争が起つた時に、領家ではこれに對抗して争ふだけの實力がなかつた。若し形勢のまゝにまかせて居たならば、清澄を中心としての領家の

財産は皆奪はれて仕舞はなければならぬのである。そこで聖人が此事件に對して領家救済の爲めに一臂の力をふるつた。

清澄山の大家は、日蓮を父母にも三寶にもを、ひをとさせ給は、今生には貧窮乞者とならせ給ひ、後生には無間地獄に墜させ給へし、故いかにとなれば、東條左衛門景信が悪人として、清澄の飼鹿を狩り取り、房房の法師等を佛者の所従にしなんとせしに、日蓮敵をなして領家の方人となり、清澄二間の二箇の寺東條が方につくならば日蓮法華經を捨てんと、誓狀の起請をかいて、日蓮が御本尊の手にゆいつけて祈りて、一年が内に兩寺は東條が手をはなれ候しなり

とあるのがこれである。しかし祈つたといふ事は、當時の人情に相應した一の慰安の方法であつて、實際は祈るといふ事よりも多量に聖人の智慧が此事件に就てめぐらされたと思ふのは、これも同じく聖人の記載にある。

地頭東條左衛門景信と申せしもの、極樂寺殿、藤次左衛門入道、一切の念佛者にかたらはれて、度々の問註ありて、結句は合戦起て候上、極樂寺殿の御方人理をまげられしかば、東條の郡ふせがれて入事なし、父母の墓を見ずして數年なり

といふ中の、「度々の問註」といふ事、結句は合戦」といふこと終には、「極樂寺殿の御方人理をまげられしかば」といふ事によつて、聖人の救済といふものが、實際の懸引かけひであつて、其指揮にもとづいて清澄山徒及び山下の住民等が、東條側と問註もんちゆ(裁判である)を起した。度々の問註がいつも清澄方の勝利であるところから、東條側はいらつて「結句は合戦」に及んだ。理にまけたので腕力に訴へたのである。それでも正義は最後の勝利だから、「極樂寺殿の御方人(つひに)理をまげられ」て、「一年が内に兩寺は東條が手をはなれ」領家の利権は確保されたのである。解決に一年を費したといふのも、此事件が仲々面倒なものであつた事が分る。若し聖人が参加しなければ、此事件はまけ公事くじであつたのである。此恩恵に對して、領家及び清澄寺が、聖人に非常な感謝をもつた事は、聖人の「清澄山の大家は日蓮を父母にも三寶にもおもひおとさせ給はゞ、今生には貧窮乞者とならせ給ひ、後生には無間地獄に墜させたまふべし」といはれたのでも分る。さてそれ程の結果を收めたとしたら、勝つた方は申分ないが、まけた方は非常な番狂はんくるはせである。これによつて結ばれた忿恨はつまりどうなるか、而して其忿恨はどこに決着するかといへば、いふまでもなく聖人に集つたのである。即ち「東條の郡ふせがれて入事いりごとなし、父母の墓を見ずして數年

なり」で、聖人に對する報復が企てられた。東條左衛門景信はこれより以前にすでに聖人に對して深い憤りがある。ところで、此事件の年代が更に徴すべきものがないが、前後の事情を綜合してほと年代を判定すると、先づ大體は建長六年から文應元年迄の間で、其間でも、正嘉正元はもはや聖人の本領的活動に入る時期だからかういふ事件がたとひあつてもそれに關係してゐる事は出来なかつたらうから、建長六年から康元元年までの足かけ三年と見るが尤も穩當の見解であらうと思ふ。宗史の傳ふる所によれば、建長六、七の兩年に聖人は兩度歸省せられて、相當期間を房總の間に滞在せられた様である。宗史では單に房總遊化とあるが、聖人にあつては殆ど懸命けんめいの事業ともいふべき、鎌倉の運動がまだ緒につかないうちにそう度々房總に遊化いうひせられたかどうかは疑問とするに足りる。これは恐らくは餘儀ない事情であつて、其餘儀ない事情とは即ち極樂寺對領家の係争であつたのではないか、建長六年のいつごろからであるか分らないが、七年にまたがつてほと一年といふ事は容易に考へらるべき事である。よつて此事件はかりに建長六年乃至七年と年代をきめて置く。

さて此事件は、一見聖人の事業の本幹とは格別關係のない事の様に考へられるかも知れ

ないが、實はこゝが重要な觀察點である。此觀察點を逸すると、後來聖人に對する極樂寺入道系の迫害といふものが、何が故に紀傳の如く特に惡辣であつたかといふ疑問を解決する事が出来ない。また文永元年の東條景信の小松原の刃難といふ事が餘りに唐突になつてしまふ。たゞ立教開宗の時の忿恨だけなら、聖人の建長六年の入國にも七年の入國にも機會はいくらでもあつたらうにそれを無關心に過して、開宗後十一年を経て急に勃發するといふ事も異なるものである。予の見解によれば、東條法難は必ず極樂寺——對領家の問題に就て、東條景信としての解決法であつたに相違ない、かういふ觀察點があるから、此事件を、立正安國論已前に、伊東法難已前に、特に銘記して置く必要があるのである。

併し聖人に對する迫害が、宗教の問題からでなくつてかういふ事に怨恨が根ざして居るとなると、聖人の宗教家であるといふことが、いくらか位置がひくめられる様に考へる人があるかも知れないが、却てここに聖人の宗教のねうちがあるのである。聖人の宗教はすでに人生の徹底救済を意味して居る。隨て萬事を解決すべき宗教である。たゞ神や佛を念じて、その信心で精神を撓めるとか、人格を向上させるとか、あるひは神佛の冥護があるとかいふ様な宗教でなく、世の中の事實に就てその善惡を判別して惡を懲らし善を獎護す

に對する重要な觀察點

5 聖人の宗教的本領

る、而して道理を以て事實の基礎として正義を行つてゆく、そこが法華經の妙理であるから、空理を以て實際にのぞむのと違ひ、ことごとくに事物を活かして、正しい發展をする。どこまでも理のあるところをつめて行くから、合戦まで起つて腕力的解決に及ぼうとしても、結局はやはり正理が勝つ。東條左衛門景信に對するこの制裁、極樂寺入道重時に對する此制裁は、畢竟、さきの念佛無間等の四箇の格言といふ道理に對する破折が事實となつてあらはれたのである。事實的破折である。此事件が極樂寺重時に對してどんな感じを與へたかは、これが延いて松葉ヶ谷の焼打となり及ぼして伊東の法難になつたのでも分る。東條景信の瞋恚は小松原の法難となつてあらはれた。日蓮聖人の名が、立正安國論已前に鎌倉幕府の中樞部に知られて居たといふことは尤も注意すべき點である。

六、七の二年に、清澄方面の事はほゞ解決がついて、建長八年（聖人三十五歳、十月五日に康元と改元した）の三月に、極樂寺重時は何の考ふところがあつたか、出家して法名を觀覺といつた。五十九歳である。重時の弟で當時一番引付頭であつた政村が次で連署となる。此歳は春から雨つゞきで、爲に夏から秋へかけては疫病が流行した、赤痢、及び赤斑瘡などで上下一般これに悩まされた。執權時頼もやはり赤痢におかされて悩んだ。此等



世間の状態が因をなして時頼も遁世の氣があつて山の内に最明寺を建て、七月には宗尊親王も臨まれたが、十一月には時頼もいよ／＼落髮して、覺了房道宗といった。しかし子息時宗はまだ幼少なので、極樂寺重時の二男長時が執權となつた。勿論時頼もあづかり聴くのである。

正嘉元年（聖人三十六歳）前年の疫病と氣候の調を失した事などからして、從來飢饉につぐ疫病に長い苦しみをつゞけて來た當時の人心は早くも動搖の兆があつたとおぼしいところへ、正嘉元年二月に大地震があつて數日にわたつて止まない。次で五月十八日に大地震があり、八月朔、二十三日、九月と連々と大地震があつて、中にも八月の大震といふものが、ほとんど鎌倉を根絶するほどの損害をもたらした。「吾妻鏡」にしろされた處によると、此大地震は恐しい音響をともなつて居た。山岳はくづれる、人家は顛倒する、神社佛閣一として満足なものはなく、地面が裂けて水が湧き出る、下馬橋の邊では地の裂けたところから火炎が燃え出るといふ様な凄／＼有様であつて、人心の恐慌はほとんど極度に達した。同時に此大地震が聖人に對する刺戟となつて、聖人の事業はまさしくこゝに一大轉機を生じたのである。これが實に「立正安國論」の動機となつた。

立正安國論の動機

災禍の由来

この天變と地天と飢饉と疫病とに就ては聖人に二様の觀方があつた。一は、此國が法華經の正法に背き、國民が正理を捨て、邪法を尊信し、その邪法の指揮によつて國土を經營するから、この天地間のあらゆる善心がほろぼされ、隨て善勢力のこの國を守るものがない、邪心惡心が滿ち充るの結果かういふ災異が續くのであるといふのと。二は、法華經の行者を迫害する爲に善神が此國を治罰するといふのである。此二點をよくあきらめて災難の根元を除かなければ、國は滅亡する。こゝに於てか邪法の糺明と共に、これに就て更に佛説を研覈する必要があつて聖人は駿河國岩本實相寺の經藏に入つて一切經を研究された、かくして聖人の思想の骨子となつて、立正安國論の組織の基礎となつたものが「三災七難」の佛の豫言である。

「三災」と「七難」

三災とは佛が大集經に説かれた三の不祥事、一には穀貴、二には兵革、三には疫病をいふのである。穀貴とはいふまでもなく食料の騰貴で飢饉である。兵革は兵亂の絶え間ないこと、疫病は惡病の流行である。七難には藥師經の七難と、仁王經の七難との二つがあつて、藥師經の七難は（一）人衆疾疫難、（二）他國侵逼難、（三）自界叛逆難、（四）星宿變怪難、（五）日月薄蝕難、（六）非時風雨難、（七）過時不雨難、をいひ、仁王經の七難もほ

正嘉の大地震と正元の大飢饉

これに類似して居るが、日月星宿の變相、時節叛逆の相等が更に詳細を極めて居る。而してこれ等の諸現象を起し來る原因については、要するに國家が正法にそむいたからといふ結論に到達するのである。聖人がこれに就て一大警策を與へんと發起されたのはまさしく正嘉の大地震が動機ではあるけれども、その動機がつひに聖人一代の事業の中心ともいふべき立正安國論となつたのは、數十年來打續いての國土的災禍に對する聖人の深刻なる觀察によるものである。今、聖人の誕生より正嘉元年（聖人三十六歳）までの三十六年間に大觀すれば、此三十六年間は、ほとんど天變地天と、飢饉と、疫病と、叛亂の歴史である。

貞應元年（聖誕）

元仁元年（聖人三歳） 五月、義時卒。七月、伊賀氏の叛亂。此年小兒赤斑瘡多し。

嘉祿元年（聖人四歳） 六月、大江廣元卒。七月、政子薨。痘瘡によつて元を改む。

同 二年（聖人五歳） 四月、博徒忍寂の亂。七月、京都に反徒起る。

安貞元年（聖人六歳） 此歲諸國凶荒の徵あり、赤斑瘡流行。一月、京都群盜横行、無警察の

状態、三月、伊豆前司の所従後鳥羽上皇第三宮と稱して叛亂、伊勢國丹生右馬允叛亂。

寛喜二年（聖人九歳） 六月、冷氣、七月、美濃武藏に降霜あり、八月、大風に次ぐに霖雨を以

てす、米價暴騰し大飢饉。朝廷幕府修法を行ふ。

9  
變天と飢饉と疫病  
と叛亂の歴史

同 三年（聖人十歳） 三、四月の頃京都に食糧暴動起り、飢民富家を侵し、飲食し錢等を強請す、飢饉によりて幕府人身賣買の禁を弛くす、夏諸國疫病流行、人餓死するもの多し。

貞永元年（聖人十一歳） 飢饉は疫病と併行して全國に及び、荒怠終に無警察の狀を現じ、夜討強盜の跋扈治承年間已來と稱せらる。これによつて改元。後九月彗星東方に現る。

文曆元年（聖人十二歳） 二月、咳嗽流行、世に疔病といふ、五月、公卿の從者等多く群盜となる。爲に京畿の人民兵器を購つて自ら備ふ。諒闇に加ふるに天變地異あり、改元して文曆といふ。

嘉禎元年（聖人十四歳） 痘瘡流行。

延應元年（聖人十八歳） 天變多きによつて改元。

仁治元年（聖人十九歳） 彗星出現。

同 二年（聖人二十歳） 飢饉、夏痢病。

寛元元年（聖人二十二歳） 夏、痘瘡赤痢流行。

同 二年（聖人二十三歳） 夏、大疫病流行、十歳以上のもの此病を受けざるなし。

同 三年（聖人二十四歳） 三月、彗星出現。

正嘉の大地震と正元の大飢疫

寛元四年（聖人二十五歳）宮騷動（江馬光時等の叛亂）。

寶治元年（聖人二十六歳）三浦一族の亂。

建長三年（聖人三十歳）九條堂の了行法師叛亂。

同 四年（聖人三十一歳）了行の件によつて將軍交迭。

康元元年（聖人三十五歳）春夏秋雨多し、夏秋赤痢、赤斑瘡流行。

以上は予の「日蓮聖人傳年譜稿本」によつたもので、わづかに其一端を記し得たに過ぎないと思ふ、それでも此通りである。かういふ不安状態のあげくが正嘉の大地震となつて勃發したのである。今既往にさかのぼつて、一々に叛亂のあとを見、疫病飢饉等によつて來る所を考へると、いづれも政治の瑕瑾ならぬはなく、其政治の欠缺はその根元に正義の根柢をもつて居ないからである。かういふ考へは、近代科學旺盛の世の中には少々解しにくい考へであるかも知れない、けれども予等の考へでは、今日の科學の程度では、まだそれにして絶對的抗議は提出出來まいと思ふのである。なぜとならば、現代では宇宙の物質的方面に就ては相當研究も出來かゝつて居るけれども、宇宙の精神的方面に就ては何一つ分つて居ないのである。宇宙精神と人間精神との交渉に就てはなをさら分つて居ないのである。

である。隨て我等は宇宙の精神的方面の觀察に就ては、精神界の巨人のあとを辿つて行くより外には仕方がない。天變地天が果して神佛の人間に對する懲罰であるか或は人間が自ら招いた結果であるか、何であるか知らぬが、すくなくとも天變地天や飢饉疫病が、人間の世界に非常に關係のある出來事であつて、それに對して人間が精神的に苦痛を感じ得るといふ事が、すでに人間の精神内にあるところの宇宙的萌芽といふべきものである。こゝに於て聖人はその根本的解決を試みんが爲めに、正確なる佛の豫言に立脚した經世の大論策を建て、國家を覺醒せんとせられたのである。そこで正嘉二年（聖人三十七）わざ／＼駿河國富士の山下岩本の實相寺に赴いてこゝの經藏に入つて一切經を通覽された。宗史の傳へによれば、聖人が一切藏經を閱讀されたのはこれで五回目であるといふが確乎たる證據はない。鎌倉鶴岡にも經藏はあるのだが、恐らく岩本のが最新の渡來であつて、當時における確實なる證據であつたからであらう。この岩本實相寺は智印上人といふ人の開基で、鳥羽法皇の祈願寺であつて、泰時なども歸依した寺であつた。由緒のある寺でもあり四十九院の塔中があつて規模は餘程廣大なものであつたらしい。聖人が入藏された當時の寺主は、二位律師嚴譽といふものであつた。

聖人の入藏は恐らく正嘉二年と正元二年との三年に渡つたらうと思ふ。當時此寺の學頭に智海法印といふ人が居た。此人頗る聰明な人で、早くも聖人の非凡な人であることを看破して、聖人に「摩訶止觀」の講義を乞ふたといふ傳へがある。同じ時に學徒に伯耆房といふものがあつた。まだ一箇の少年に過なかつたけれども、はやくも聖人に私淑して將來の弟子たらんといふ誓をおこしたこれが後年の伯耆房日興である。智海法印は後に日源となつて、やはり聖人の高足となつた。後年この岩本が天台宗から聖人に歸した時、智海の日源は最初の寺主となつた。

この聖人入藏中の正元元年（聖人三十八歳）には、春から夏へかけて恐しい疫病が天下に流行した、家として患へざるなし胃されざるなしといふ状態で、川原には捨てられた死屍が山をなして道を塞ぎ往來することが出来なるといふありさま。其難境にあつて一方にはさらに飢饉の爲めに全國にわたつて人民の死すること無數、何とも明状すべからざる國患であつた。この一國怖畏の状態にあつて、朝廷は三月諸國に令して仁王經を轉讀せしめられた。同じ月に疫病と飢饉と、地震とによつて、正嘉三年を正元元年と改元する。恐慌の狀目睹する様である。四月には更に全國に令して最勝王經を轉讀せしめられる、五

11 聖人の岩本實相寺入藏と學頭智海並に學徒伯耆房

12 入藏中の災天

月には如法北斗法を宮中に修して疫疾を攘はれる等、混亂状態の中に九月には天皇御不豫にわたらせられてつひに御讓位の事がある。これに星宿の變怪がからんで自然と人事との交渉が一種悽愴の感を人間に與へた。七月になつて幸に疫病はいくらか下火になつて、五穀も實りそうだったので一時安心したところが、其反動とでもいふのか、飢饉と疫病とはしばらくしてまた一層猖獗を來して、これが次年における更に大きな災となる。

此間にあつて、岩本の藏中に一切經を閲して居られた聖人は、「守護國家論」と「念佛者追放宣狀事」等の副産物的著述があつて、先づ準備的に念佛宗の大々的破折を試みられた。建長五年已來、聖人の破折の對象は先づ念佛宗であつた。隨て建長五年の「女人成佛抄」建長七年の「念佛無間地獄抄」等皆是見地における著述であるが、「守護國家論」はまさしくこれを教學的に大成したのであつて、佐渡已前における聖人の念佛破の典據とし權威とすべきである。ほゞ同時にあつめられた「念佛者追放宣狀事」は、念佛破却の政令、奏狀等をあつめて、側面から念佛を破折された一種の方便である。右の二書を前提として、正元二年にはなを一つの注意すべき撰述がある、それはすなはち「災難對治抄」で、これはまさしく安國論の草案にあたる。

13 準備的述作

かくて機が熟して文應元年（聖人三十九歳）此歳は正月から大飢饉で、疫病がこれと併  
 行した、幕府は諸國の守護に令して部内の社寺をして大般若經と最勝王經とを轉讀して  
 攘災にあてた、しかしそれらの姑息な手段では、到底此大災厄をいかんともすべきでな  
 い、死亡者の相つぐ様は恐しい様である。六月には流石の幕府も、餘り死亡者の多い爲め、  
 幕府の法としては、人を殺したものは、刑の執行後十年をまつて釋放するといふ例を改め  
 て十年以内と雖も刑の輕重によつてそれぞれ釋量し得る規定を設けて早速に實施した程で  
 ある。惣じて飢饉と疫病に就ては記録を亡したせいでもあるかも知れないが、幕府はこれ  
 に對して方法らしい方法を立て、居ない、たゞ祈禱攘災でお茶をにごして居た。祈禱攘災  
 は宗教として抑々末だ、宗教の人間に及ぼす効果は人の眞智をよび起すにある。人間の煩  
 惱情性にくらまされた智慧を出さして、それのみがきをかけて人間世界を光明化しようと  
 いふのが、眞實の宗教である。此第一義をわすれて、徒に神佛に祈つたところが效能のあ  
 りようわけがない。この、人に智慧を與へるといふのが聖人の事業である。今此累年の變  
 災に就て此感を深くされた聖人は、其偉大なる直觀に於て、國家救濟の徹底義を示すべく  
 努力されたのである。

14 立正安國論の述作  
と豫言

此無策なる幕府の  
有様を、大正の今  
に移したらどうで  
あらう、「穀物救用  
令」や「暴利取締  
令」をだしてさへ  
彈劾される大臣と  
比較してその相違  
の甚いのに驚くで  
はないか。

かゝる目的によつて書きあげられた「立正安國論」の大論策は、七月になつてめでたく  
 完成した。同じ月の十六日を以て前執權最明寺入道時頼に、その近臣宿谷左衛門西信の手  
 を以て獻ぜられた。此書を作製せらるゝ由來に就ては上來は述べた通りであるが、しか  
 此書の眼目は、現在の災禍をのがれるといふ以上に、過去の變天によつて暗示された恐  
 しき未來に就て、此國滅亡の豫言となつてあらはれた事にある。一體の組織は念佛の惡法  
 をとどめるといふ事が國家安全の祈りだといふにあるが、さて是を停止しなければ國家の  
 將來は、うだとなつて示されたのが、自界叛逆と他國侵逼との二難である。藥師經の七難  
 のうちで五難はとくすであらはれたが、上の二難がまだあらはれてない。大集經の三災  
 のうちで、穀貴、疫病の二災はあらはれたが、兵革の一災はまだあらはれない。油斷をし  
 て居る時ではない、若惡法の科によつてこれ等の災難が競ひ起つたらどうするか、自界叛  
 逆といつて國內に同士討が起る、他國侵逼といつて他國からせめられる、内憂外患こもご  
 も起つて國家がほろびてしまつたら、社會はなり立たないではないか。人といふものを認  
 め國家といふものを認める以上、その發達と永生とを希望するは人間の本然のつとめであ  
 るのだから、一度びかういふ自覺を得たならば、而して從來の謗法に就て開悟するところ

15 文應元年七月十六  
日の上書と「立正  
安國論」の内容

正嘉の大地震と正元の大飢疫

があつたならば、速に其謗法を抛て正法に歸すべきが國家安康の本である。

汝早改<sup>チノメテ</sup>信<sup>シテ</sup>仰<sup>グ</sup>寸<sup>チ</sup>心<sup>ヲ</sup>、速<sup>ニ</sup>歸<sup>ス</sup>實<sup>ニ</sup>乘<sup>リ</sup>一<sup>ニ</sup>善<sup>ニ</sup>、然<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>三<sup>ニ</sup>界<sup>ニ</sup>皆<sup>ク</sup>佛<sup>ニ</sup>國<sup>也</sup>佛<sup>國</sup>其<sup>レ</sup>衰<sup>ス</sup>哉、十<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>悉<sup>ク</sup>寶<sup>ト</sup>土<sup>也</sup>寶<sup>土</sup>何<sup>レ</sup>壞<sup>レ</sup>哉、國<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>衰<sup>ス</sup>微<sup>ニ</sup>土<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>破<sup>ス</sup>壞<sup>ニ</sup>、身<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>安<sup>ニ</sup>全<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>禪<sup>ニ</sup>定<sup>ニ</sup>、

かくて此一書の中に國と法との關係、法と人との關係、人と國との關係をしめし、その關係交渉に就て、自然と人間との一致、神靈と人間との交通、現在と未來との一致、政治と宗教との一體不離等を示された。而して此豫言の背後にある日蓮といふ人格に於て佐渡流罪後における「開目抄」と呼應して暗に本化上行の自覺を示し、佛國寶土觀に於て本尊と戒壇の理想とを暗示して、聖人一代の規模をこれに縮寫された、即ちある意味に於ては「觀心本尊抄」「開目抄」よりも重く、一代の大前提となりまた事業の骨子となつて、聖人自ら時々講説せられたのみならず、臨終に際してもまたこれを講ぜられたほど聖人自が重要視された書であつた。乍併文辭餘りに雅妙であつて、一篇詩の如き體裁である爲めに、人は往々それによみこまれて聖人の意思をさぐり得ない。この事は聖人自らも「彼書に詳く述べたれども、愚者は見難し」といはれた位で、かなり難解の書ともいふべきものであるが、是れが、聖人が正式に國家を諫められた第一次の發表である。而して聖人は宿谷左衛

門入道西信に托して上書せられる時宿谷入道に向て、左の進言をせられた。

禪宗と念佛宗とを失ひたまふべし、此事を御用なきならば、此一門より事起りて他國にせめられさせ給ふべし

なを聖人の記載によれば、安國論已前にも此事を時頼に進言されたかとも思ふのだが、或は別の事であるのか確とした傳へはない、たゞ「法門可申抄」に

故最明寺入道に向て、禪宗は天魔のそいなるべし、後に勘文もてこれをつげしらしむとある。しかし立正安國論の大諫已前にそれだけの事を別にいはれるといふのも異なるものである。恐らく安國論を重々しくする爲めに、豫め安國論の事を告知して、其後に上つたものではないか。それからまた宗史のある傳へによれば、安國論上書の後ち、七月二十四日、時頼が聖人に面會を求めたといふことがあるが、これは信じ難い事と思ふ。況んや是れを以て國諫の第一次とするのは、「撰時抄」の聖人の自記に合はない、かたがた信を措くべからざるものである。

さて「立正安國論」は斯の如き堂々たる規模を以て時頼に呈せられたが、事實幕府の政治的内容と「立正安國論」とでは餘りに距離がありすぎる、隨て時頼もこれを用ふる事が出

來なかつた。或は時頼の意志としては、いくらか聖人にきかうといふ傾きがあつたかとも思はれるが、終に無沙汰に終つたといふのは、何か此間に仔細があつた事と思ふ。聖人も大義名分の上からは、聖人を罪し、法華經の行者を迫害し、其言にきかなかつたといふ事に就て、責任上時頼を責められるけれども、そうでない場合には、時頼の夭折を、残念がられる趣きは、聖人遺文中の所々に發見する。聖人が伊豆の流罪についても、

最明寺殿計こそ仔細あるかとおもわれていそぎゆるされぬ、さりし程に最明寺入道殿隠させ給しかば、いかにも此事あしくなりなんす、いそぎ隠るべき世なりとはおもひしかども云々

とある位で、聖人と時頼の間には、何かしら相通するものがあつた事と思ふ、それが通じなかつたのは、けだし極樂寺重時と長時との二箇の人物が、時頼と聖人との間にあつたからである。

極樂寺重時は泰時の弟で、時頼の父時氏には叔父、時頼には大叔父に當る。當時門閥中の門閥であつたばかりでなく、その人物も兄泰時と拮抗して苛辣な事は泰時にすぐるかと思はれる。此人餘程政權に戀々として内心執權の要職を希望してゐたものか、六波羅に居

た時分も、鎌倉に事ありときけば、直ちに下向しようとするので、朝廷からとめられた事さへある。しかし當時にあつては恐らく唯一の材幹であつたと見えて、時頼が執權となるや早速六波羅から呼び返さうとした程であつたが、是れは三浦泰村が好まなかつたので拒止した。泰村が亡びると時頼は直ちに招いて執權連署とした。けだし實治元年には時頼二十一歳の青年で、萬事しつかりした相談相手を要したからであらうが、一度重時によつて得られた政治的中樞は、永く極樂寺系にとどまつて、これが聖人の一代に輕からぬ關係を有する事を記憶しなければならぬ。

こゝでしばらく彼等の一門に就て考察すると、北條義時には五人の男子があつた、泰時朝時、重時、政村、實泰である。泰時は長子だから宗家を繼いで執權となり、朝時は分家して名越家となり。重時からは常磐家、赤橋家、極樂寺家の三家がわかれ。政村も相當の人材を生じてさかえ、實泰は金澤家となつた。朝時の名越家は門閥に於ては宗家につぐべき家柄であるが、或はそれが原因か、何かまた政治上の不平か、朝時の子光時、時章、時長、時幸、時兼、教時等、皆宗家からよく思はれないで、つひには大體亡ぼされた。また亡ぼさるべく、甚多くの野心家と不平家とが名越家には居た様だ。之に反して極樂寺入道重時の

1. 北條氏の中樞に對する考察と日蓮聖人に對する鎌倉幕府の感情

家は甚さかへた。重時には六人の男子があつた様である。長子爲時は早世したが、長時の材幹はつとに一般の認むるところで、重時にかはつて六波羅北方となり、康元元年鎌倉によび返されては、引付衆を経ずして忽ちに評定衆となり、時頼隠居によつて直ちに執權となつた。けだし重時の深意の存する所であらう。其他時茂、義政、業時等の子息いづれも榮達をした。長時以後、極樂寺の一門からは二人の執權が出た、而して三の家にわかれて政治界の中樞となつて居た。聖人に對する關係も、此一族が一番濃厚である。(政村、實泰二家の事は、さまで必要がないから略する)

そこで時頼は、聖人に對して多少の理解をもつて居たと假定しても、重時と長時とはこの時頼の意見には同意を表しがたいのである。それは何かといふと前に記載した極樂寺對安房の領家の係争一件であらうと思ふ。一體鎌倉時代の政治家の特色とすべき點は、互にその公明を缺く點にある。若し公正を期したとすればそれは司法、別して莊園の公事訴訟であつて、行政的方面にはあらゆる權謀術數を弄した。武力と術數、これが其當時の政治家の金科玉條で、是れに縁の遠いものが皆亡ばされるのである。隨て此時代程政治が個人的に營まれた時代でない。各自がおのれの勢力範圍内で斷獄でも何でもするといふ亂暴な

世の中であるから、極樂寺入道の清澄奪取も行はれたのであつたらうが、聖人によつて其事がはゞまれて、其報復として安房國が塞がれた。鎌倉での報復はいかなる形式となつたか、すなはち「立正安國論」に對する反感となつてあらはれた。而して其反感がいかに具體化されたか、それが「松葉ヶ谷の焼打」である。

去正嘉元年に書を一卷注たりしを、故最明寺の入道殿に奉る、御尋もなく御用もなかりしかば、國主の御用なき法師なればあやまちたりとも科あらじとやおもひけん、念佛者並に檀那等、又さるべき人人も同意したるとぞ聞へし、夜中に日蓮が小庵に數千人押寄て殺害せんとせしかども、いかにかしたりけん其の夜の害もまぬがれぬ、然ども心を合たる事なれば、寄せたる者も科なくて、大事の政道を破る、日蓮が生たる不思議なりとして伊豆國へ流ぬ。

立正安國論の建策は以外な報酬を受くることとなつた。安國論上書の後約四十日八月二十七日の夜聖人の松葉ヶ谷の庵室は、忽ちに暴徒の襲ふ所となつた。それも五人や七人ではない數千人である。大體は念佛者であるが、其背後には「さるべき人人」がある、しかも此事件の發起は、念佛者が思ひ立つたのではなくて、其「さるべき人々」の發意である



ことは、聖人が光日房抄の自記によつてあきらかである、  
きりものどもよりあひてまらうと等をかたらひて、數萬人の者をもんて夜中におしよ  
せ失とせしほどに十羅刹の御計にてやありけん日蓮其難を脱しかば、兩國の吏心をあ  
はせたる事なれば、殺れぬをとがにして伊豆國へ流しぬ。

而して其「さるべき人々」また「きりものども」が誰れであるかは「心を合せたる事なれ  
ば、寄せたるものも科なくて大事の政道を破る」といふにてそれが政治の當局者であるこ  
とが分り、「日蓮が生たる不思議なり」と伊豆國へ流ぬ」とあるによつて、これを「長時武  
藏守殿は極樂寺殿の御子なりし故に、親の御心を知て理不盡に伊豆國へ流し給ぬ」と對照  
すれば焼打は極樂寺重時及び長時の所爲であることが分る、而して見てはじめてこれが單  
に「立正安國論」といふだけの怨嫉でないことが分る。

傳説によれば、庵室を襲はれた夜、聖人は迫害の襲來を數頭の白い猿によつてあらかじ  
め避難するを得たとて、今猶も猿島の名と故事とが残されてある、詩的史としてはそこに  
ゆたかなる興味があるが、恐らく事實であるまい。たゞ山中幾日かの避難中、猿が食物を  
捧げたといふ様な事はあつても差支えのない事である。恐らく聖人はその偉大なる直覺力

きりものといふは  
權勢者の事

20  
松葉ヶ谷焼打の眞  
相

21  
お猿島の傳説

によつて、豫め迫害の來る事を知られたかも知れない。聖人が避難されたあとの庵室には  
能登坊、進士太郎など居合はせたものが防戦甚つとめたけれども、幾千幾萬といふ鎌倉を  
舉つての迫害をばもとより支ふべくもない、庵室は終に誘徒の一炬に付せられてしまつ  
た。迫害の徒は思ふ儘に本意を遂げて凱歌をあげた。これによつて聖人が鎌倉における根  
據地は一時失はれたわけである。かゝる状態であるから、到底鎌倉に居るわけに行かな  
い、聖人はしばらく下總の富木殿のもとへ赴かれた。

(注意)この「松葉ヶ谷庵室の焼打」に就ては、鎌倉時代政治史の見地から見て見逃すべからざる重要問題がある。  
それは本書一九頁に引用した聖人の御書の中にある「大事の政道を破る」の一句である。而してそれはいかにし  
て政道を破るかといふと、其下の文に「御式目をも破らるゝか」といふのがそれであつて、鎌倉時代政治の中心で  
ある「貞永式目」五十一ヶ條といふものを、政治家が自ら無視したのみならず、これを蹂躪した事を指すのである。  
即ち當年の政治家の唯一の準拠であり軌範である「貞永式目」が、政治家の私意己情によつて、土足にかけられた。  
「松葉ヶ谷の焼打」における殺傷と放火とは、明に「貞永式目」によつてその犯人は流死の二罪のうち二罪に擬せらるべ  
きものであるのに、官憲と暴徒とは心を合はせることであるから、この殺傷と放火とは何等幕府の間ふところと  
はならず、却て聖人の「生けるが不思議なり」としてこれを伊豆の國に流したといふ、まことに言語道斷の政治と  
なつた。法典はあれども、何等政道の軌範とはならぬ。これ子が五四頁にいつたごとく、頼朝と頼朝以後の政治と  
の信仰的相違によるものである。

(10) 伊東の流謫、法華經の行者と——宗教の五綱

松葉ヶ谷の焼打の後下總へゆかれた聖人は、恐らくそこで歳を越されたらうと思ふ。此間の化導が房總における教勢の將來に多くの利益を與へた事はいふまでもない。其うちに鎌倉における根據地が出来て聖人は直ちに鎌倉に入られた。聖人のこの鎌倉入りは、確かに鎌倉全態の驚異であつたに相違ない。「日蓮が生たる不思議なり」の一語は此間にあつて實に活躍して居る。死んだ筈の日蓮が無事であつたといふに就て、直ちに日蓮の處分案が議せられて、五月十二日に聖人は伊豆の伊東に流された。この伊東の流謫に就ては聖人に如何なる罪科が擬せられてあつたかは不明である。恐らく確たる罪目もなく、諸宗を譏誣したとか、頭を切れ、寺を焼けとかいつたといふ様な今ならば治安警察法を以て律すべき様な曖昧な罪條であつたらうと思ふ。素よりそれは表面の事であつて、

念佛者等此由を聞て、上下の諸人をかたらひ打殺さんとせし程に、かなはずりしかば、長時武藏守殿は極樂寺殿の御子なりし故に、親の御心を知つて、理不盡に伊豆國へ流しぬ。

すなはち極樂寺重時が聖人にふくむ所あるを、長時はよく知つて居るから、理も非もなく

1 房總の遊化

2 聖人の歸鎌と伊東の流罪

3 伊東流罪の真相

伊豆へ流したのである。其含む所とはいふまでもなく前の房州における係争が主因で、而して立正安國論の大諫が、聖人の清澄事件の態度に就ての堂々たる證據となつてあらはれたが爲めに、強盛なる念佛者にして、政道亂脈の張本人たる極樂寺重時の根本の無明心を挑發した爲めに、焼打につぐに流罪を以てして、聖人に對抗せしめたのである。

弘長元年五月十二日、早朝に召捕れた聖人は、日中に鎌倉を引まはされて、なめり川の河尻から、伊豆へ流罪の船にのせられた。此流罪には一人の從者をもゆるさなかつたと見えて、あはや解纜せんとする船のともづなへつかまつて、師と共に配處へ送れと乞ふた日朗を、幕吏は拒んだがきかないので、遂に日朗は腕を折られたといふ傳へがある。折しも梅雨の季節で、氣壓はひく、おどり狂ふ海面を、船は西南の風に押されて、其夜のうちに配處のそば近くいつたが、伊豆の海岸は風浪の荒い所で、とりわけ伊東は船着が悪い、加ふるに季節風の西南風が吹ま、船は川奈の方向へと流され、漸くにしてかどわき崎を去る半里の南へ着船した。しかも着船の個處は陸ではなくて此邊におびただしい暗礁の一つであつた。總じて此邊は巨大な暗礁があつて一見陸かと思ふ様な個處があつたものと想像される。聖人を護送の官人は此處へ聖人をおろして其儘鎌倉へ去つてしまつた。いかに

4 流罪によつてあらはされたる極端なる憎惡の感情まないた岩

長時重時の方寸とはいへ、餘りに暴虐なやりかたではないか。配流の罪人を配處の役人に渡しもせず、構はず暗礁に捨て去るといふ事は、全く死を以てこれに擬したにもひとしいのであるが、けだし長時重時の豫定の行動であつたのであらう、此聖人着船の地點は祖岩といつて、伊東から陸行二里ばかりのところにある。其邊一帯を笹海が浦といひ、其祖岩に臨んだ岬角を鳥崎といつたが、今は日蓮聖人の流謫によつて、之を「日蓮崎」と公稱した。日本國中、聖人の名を冠した地名は、こゝばかりである。陸地と思つたのは大きな暗礁であつた、餘儀なく聖人は此に天明をまたれた。天明をまつはむしろ天命をまつのである。しかも不惜身命の法華經の行者に、さばかりの迫害は何等の不安を伴ふものではなかつた、聖人は靜かに讀經唱題して居る時、はからず此邊へ漕よせたのが、川奈の漁夫彌三郎といふものであつた。

因にいふ、近來現今の祖岩は眞の祖岩にあらず、とて考證を立つる人あるよし、「日蓮宗大觀」といふ書に其考證見えたり、往古の事全く知りたければ、今となりていづれを眞なりとすべきか、容易に判じがたし、たゞ其考證を見るに、可あり不可あり、其可なりと認むるものも、全く現今の地形によつて憶斷を下せるは、なほ正論を得たるの説とすべからざるか。(一)「北風の強きため伊東に着く能はざりし船の伊東より遙かに北風を強く受くる篠見近海に船を寄する筈なし」といへど北風といふこといかなる典據あるや知られど此説信じ難し、予が此本文に記し

今の「祖岩」は日蓮崎の突端にわづかばかりをあらはして居る、(寫眞參照)したがって往時のありさまとは甚く違ふのだから、却て現在の方が靈蹟としての尊嚴もすこみも十二分にある。

最近における祖岩の兩説と眞偽

たる如く西南風とすれば、鎌倉よりの航路に照して、西南に流されたるものと解する方極めて妥當なるべし、此地方に新暦六月頃北風といふこと餘りなき例なり。(二)(三)「官船すら船を寄するに苦む強風の日にあたり、彌三郎の漁船に彌三郎一人乗りたるも不審」とあれど、此不審には、不審すべき條件具備せず、官船さへ船を寄するに苦めるにいかでといへど、海の勝手を知れると知らざるとの相違には此位の差違あり、まして彌三郎一人といふは何によつてその確定的に推測するか、一人だらうといふ想像に過ぎざるべし、確たる典據なき以上、若し一人にして出來ざる事ならば、二人乃至三人なりとする方むしろ妥當の見解なり、また官船の寄するに苦みしといふ事に就ては、文字通り正直に解すべき事とせぬ義もあるべし。(四)「篠見附近は漁場として不適當、川奈は好漁場云々」は、専門家ならざる我等の知る處にあらざれども、漁場といふもの、六百年七百年の長年月を経ても變更なきものにや、きくところによれば、五七年にても潮流の關係にては非常なる變化を來す事もあるよし、現に暖流は年々に遠ざかりつゝあるにあらずや。(五)「古來伊東と川奈との間に「まないたばら」又は但に「まないた」と稱する所あり云々」これは尤も有力なる説なるべし、しかもそれはまた今迄の祖岩をも認定せしむべき説なるが如し、思ふに川奈の「まないた」は固有の名にあらずして、此邊一帯の暗礁を目して「まないた」と稱するにあらざるか、川奈の「まないた」を「まないた」なる名あるが故にと斷じたる人は、また笹海が「まないた岩」と古へより稱しつゝあるを記憶せざるべからず、川奈のまないたが暗礁にして、笹海の祖岩が暗礁ならば、暗礁の方言をまないたとするに不可なるべく、ともに祖岩を是定せば、古へより其地なりと傳へ來れる方を正しとする事また適當の見解なるべきか、若し強て川奈の「まないた」を着船の地と立證せんとならば、笹海の祖岩が、祖岩とよび來れるあまりを指摘するにあらざれば不可なり。(六)「古の書に篠見なる文字なし云々」なしといふも何等不可なし。(七)「大聖人自ら「伊豆伊東川奈」云々」されど、着船の場所を指したるにはあらず。(八)如何に昔の事とはい

へ、伊東に着くべき船を伊東を見ながら、伊東よりも三里遠き而も船に不便なる。據見に官船を寄する理由なし、といふは一往尤なるに似たれど、これに就て二様の見解あり、若しこれを風浪の爲めと解せば、西南の風ならんには必らずしも不可なかるべく、此際伊東より日蓮崎の地圖をのみ見ず、鎌倉より伊東への航路に注意すべし、若し原因を風浪におかざれば、流罪の宣言をなすつゝ死罪に處してあやしまざる幕府は聖人を暗礁に放つ事あえて不思議にもあらざるべし、尙又最初の北風説をもちだすに、若し實際北風ならば、川奈につく迄もなく船は必らず伊東につくべし、以上は聖人傳に就て直接の問題にはあらざれど、「日蓮聖人傳における地理的研究」の興味として、附記するものなり。

海中の暗礁に死を待つより外なかつた聖人は、はしなくも彌三郎の救ふ所となつて、三十餘日の間彌三郎夫婦の給仕をうけられた。公然の流人であるにもかゝはらず、此間の生活が甚危険なものであつたらしいのは、不思議であるが、恐らく幕府の意向によつて伊東の地頭其以下も、聖人をにくんだものと見える。其間にあつて三十日の給仕奉公は一漁民の彌三郎としては非常な努力であつたらう。

日蓮去る五月十二日流罪の時、其津に着きて候ひしに、未だ故をも聞き及び參らせず候處、船より上り苦み候ひきと、ころに、ねんごろにあたらせ給ひ候しこと、いかなる宿習なるらん、過去に法華經の行者にてわたらせ給へるが、今末法に船守の彌三郎と生れかはりて、日蓮をあはれみ給ふか、たとひ男はさもあるべきに、女房の身として

### 日蓮聖人伊東法難の靈蹟

#### 日蓮崎「まないた岩」

(伊豆國伊東より二里餘富戸村鎌海の海中にあり、「日蓮崎」は舊稱「からす崎」といひ、まないた岩にのぞめる鯉角をいふ)